
緋の剣

抹茶小豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋の剣

【Nコード】

N6732I

【作者名】

抹茶小豆

【あらすじ】

オリビエ国の將軍家の娘、ルリアはある日、幼馴染のサリエリ国の王子ランクス・クリフォードと再会する。

しかし、それはオリビエとサリエリの同盟のためのオリビエ皇女エアリスとの婚姻を申し込むためであった。

そうとは知らない、エアリスとルリアはいたずらで自身の衣装をそっくり取りかえてしまう。そこにサリエリからの迎えがやってきて、なんとルリアがランクスのもとに嫁ぐことになってしまった。

陽だまり

ランクス・クリフォードは先ほどから、何とはなしに窓の外を見ていた。深い闇の中に輝く無数の星々が冷たい光を放っている。それはさながら人の墓標のようだとランクスは思った。命というものを代価に輝くからこそ、そこには心を打つ美しさがある。ランクスは特注の革張りのシートに身体を預け、しばしの間瞳を閉じた。『やっぱり宇宙は嫌いだ』

そんな矛盾した子供じみた感傷が沸き起こり、自嘲する。

船内に無機質なアナウンスが流れ、間もなく予定地に到着する旨を告げた。

やがてそこに地球の姿をみつけると、ランクスの深緑の瞳が懐かしさに潤んだ。

あれは花の季節。

むせ返るような花々の匂い、

陽だまりの中に、向日葵の花の色の髪がゆらゆらと揺れていた。きかん気の強そうな少女の口元が、やがて自分の姿を見つけると咲き初めの花のようにほころぶ。

地獄のような日々の中で、今日まで自分が生きてこれたのは、あのときの思い出があったからなのかもしれない。

あのとき——巡る四季のなかで、確かに自分は幸せだったのだ。

少年の紫にも見える、漆黒の髪が微かに震えた。
渴いた笑いが込み上げ、止まらなかった。

少年の頬を一筋の涙が伝うと、堪えきれず

「……たすけて」と呟いた。

「ルリア」

そう呼ばれて振り返ると、少女の向日葵の色の髪が少し揺れた。背までのびた美しい髪を、高くひとつに結っている。

白いブラウスにエンジのタイ、赤と黒のチェックのスカートはこの学園の制服だ。

少女はトレニングルームの前でお気に入りの『いちご牛乳』を購入し、満足気に微笑んだ。

「また買ってんの？いちご牛乳」

少女に声をかけた少年が、少々うんざりとした様子で少女を見つめている。

茶色の髪に、夢見るような紫の瞳、どこかあどけなさを残している美しい少年だ。

同じく白のシャツにエンジのタイを結び、しかし男子生徒は黒地に白のチェック柄のズボンである。

「悪いかな？」

少女は不本意そうに少し口を尖らせた。

「悪かないけど、ルリアそのうち肥満か、糖尿病になっちゃうよ」とからかうように少年は笑っている。

「断じてならん！運動量は十分に足りているぞ。ハヤト」

助走をつけ、少女は軽やかに少年を飛び越えた。

「あっちよつと、待ってったらルリア！」

「ふん、待てと言われて待つものか」

少女は階段の手すりに腰掛け、勢いよく滑り降りる……が運悪くそこに人影が現れ……。

「どいてえええ！！！！」

ルリアの悲痛に満ちた金切り声が、廊下にむなしく響き渡った。

「ご愁傷様……」

ハヤトは思わず手を合わせ、瞳を閉じた。

直撃を覚悟した瞬間に、ルリアは身体がふわりと宙に浮くを感じた。

ルリアが恐る恐る目を開けると、眼下にあるのは、紫がかった漆黒の髪の毛の恐ろしく美しい少年であった。

ルリアは思わず息を呑んだ。

ルリアは今、その少年に抱きかかえられている。

いわゆる小さい子が大人によくしてもらおう、『高い高い』の体制である。

ルリアは焦った。

焦りながら、とりあえず目下の少年に謝った。

「す、すまない。私が悪かった」

少年はルリアをその場に下ろすと

「廊下は走らない、わかった？」

そう言って踵を返し、立ち去った。

「ルリア、大丈夫？」

ハヤトが心配そうにルリアを気遣うと、

「ああ、大丈夫だ」

ルリアは苦笑し、答える。

刹那、ルリアの頭を強烈な拳骨げんこつが襲う。

「こんの、バカ娘！高校生にもなって、お前は一体何をやっとなるか！！！！」

ルリアはしばし痛みに堪えるためにうずくまった。

「マサムネ……理事長」

ハヤトが苦笑する。

マサムネは年の頃なら五十代、いかめしい面構えにたっぷりとした口ひげを蓄え、鬼神のごとき形相で一人娘のルリアを睨みつけている。音に聞こえるこの国の名將軍であり、ルリアと同じ髪の色から『黄金の獅子』という異名をもつ。同時に優れた教育者でもあり、

貴族の子弟が集うこの学園の理事長も兼任している。

「まあまあ、そのへんで」

鈴を転がしたような、澄んだ美しい声の持ち主の姿を視界に認めると、ハヤトの動作がぎこちなく、その頬が少し赤らんだ。そんなハヤトの様子を、ルリアは頭を撫でながらチラリと横目でみやる。

亜麻色の髪の少女が、ふんわりと笑う。

天使降臨である。

頑固親父の説教を免れ、ルリアはほっと息をついた。

「恩に着るぞ、エアリス」

生徒会室に通され、エアリスに入れてもらった紅茶を啜りながら、ルリアは心から感謝の意を伝えた。

「いいえ、礼には及びませんわ。わたくしのルリアさま」

エアリスは頬を赤らめ、背後からそっとルリアを抱きしめる。

ルリアはティーカップを握り締め固まった。

その様子を見つめ、やがてエアリスは鈴を転がしたように笑った。

「冗談ですわ。ルリアさま、そのように固まらなくても」

そして面白そうにまたも笑い続ける。

正直、ルリアはその手の冗談にはついつい固まってしまう。

ほうくら、隣でハヤトも引き攣っているではないか。

「でもね、わたくしの初恋は本当にルリアさまですよ」

エアリスは、夢見る乙女の眼差しで、偽りとも真実ともつかないうっとりとした瞳でルリアを見つめた。

今ルリアは頭にアイスノンをのっけて、ソファアの上でエアリスに膝枕をしてもらっている。きつく結っていた髪をおろし、美しい黄金の髪が流れ落ちると、エアリスが優しくその髪を撫でてくれた。不思議とそれは心地よく、ルリアはしばし、うとうとと眠りに落ちてしまった。眠ってしまったルリアの寝顔をこの上もなくエアリスは幸せそうに眺めている。

ハヤトは少し胸が苦しくなった。

「あ、あのっ、エアリス皇女殿下」

なにか話さなければ、と咄嗟に口をついて出た言葉だった。

エアリスの顔が少し曇る。

「学校では、エアリスと呼んでください」

ハヤトの頭は真っ白になる。

「は、はい。 申し訳ありませんエアリス皇女殿下」

エアリスはいたずらっぽく笑った。

「ほらまた、もう、ハヤトさまったら」

斜陽が窓から差込み、優しい陽だまりが三人を包んでいた。

「おい！ 風紀委員、転校生が脱走したので連れ戻して来てくれ」
担当教師の唐突な申し出に、ルリアは素っ頓狂な声を出す。

「はい？ わ、わたしがでありますか？」

ハヤトは笑いを堪えるのに必死だった。

軍人を父に持つルリアは、そう睨られたとはいえ、話し方が古くさく、いかめしい。

一緒にいると、まるで時代劇を見ているようだ。

「ああ、すまないが頼まれてくれ。 もうすぐホームルームだ」

「了解、いたしました」

ルリアはその場で先生に敬礼し、走り出す。

転校生とは、やはり昨日の黒髪の少年であった。が、何が気に入らないのか、その少年は朝のホームルームを終えると不意に教室から姿を消したままなのだ。

「うぬう、転校生め。 初日からサボタージュとは良い度胸だ。

その性根、私がかかと叩き直してくれようぞ！！！」

ルリアは自分のロッカーから竹刀を取り出すと、しかとそれを握

り締めた。

裏庭、プールサイド、体育館裏：不良の待機していそうな場所はくまなく探したが、どうにも見当たらない。ルリアは決意に満ちた眼差しで校舎の屋上を見つめた。

「あとは、屋上を残すのみ。待っている、不良転校生!!!」

ルリアは不敵な笑みを浮かべた。屋上へと続く非常階段を小気味良い音をたてて上りつめると、ルリアはそっと扉を開いた。

雲ひとつない晴天の下で、少年は眠り姫さながらの風情で眠り込んでいる。

その姿を視界に認めると、ルリアの鼓動がトクンとひとつ高鳴った。美しい深緑の瞳が今は閉じられ、長い睫がその双眸を縁取る。

イカン！ルリアすっかりしろ!!! 私は今この悪の不良転校生を成敗するためにここにいるのだから。

「いざ覚悟！不良転校生!!!」

ルリアは竹刀を振りかざし、少年目掛けて突っ込んだ。

竹刀が空を切り、ぱしんという小気味の良い音を立てた。

しかしそれは、少年の頭上ではなく掌の中であつた。

ルリアの金に近い褐色の瞳が見開かれる。

少年は忍び笑いを喉で殺した。

「どうやら、不意打ちには天もあなたに味方しなかったようだ」

思いがけない強引な力でいとも簡単に竹刀は取り上げられ、ルリアはいきなり少年に抱きすくめられた。ルリアの頭が真っ白になる。

「お……おい、お前っ」

「……何？」

「い……いや、あの、だから……」

ルリアの両手が空をかく。

情けなくも足ががくがくと震えてしまい、その場に座り込んでしまった。

少年はクスリとわらって、ゆでだこになっているルリアを見つめ

た。

「もうちょっとだけ、このままで、いよ」

ブラウス越しに伝わる少年の体温が妙に現実的で、耳に落ちるその美声がルリアの神経を麻痺させてゆく。不思議と恐れはなく、暖かで懐かしいと感じるのはなぜなんだろ。

やがて二人の頬を優しい風が撫でていった。

不意に少年が笑い出す。

「ルリアはあの頃とちっとも変わらないね」

「え？ あのことって？　なんでお前は私の名前を知っているんだ？」

少年はルリアから身体を離し、立ち上がった。

「ホームルームなんでしょ？　俺、先に戻るわ」

背中越しに少年はルリアにひらひらと手をふり、行ってしまう。

「あっ、ちょっと待て。私も行く」

その背を追って階段を降りようとした刹那、むせかえる花の香りを嗅いだような気がして、最後に泣きながらその背中を見送った記憶がフィードバックした。

ルリアは少年の背中に抱きついた。

「……ランクス」

「うん、やつと思い出してくれたんだね」

ルリアはしばし、その背中で泣いた。

ランクスを囲んで、生徒会室に設けられた応接間で四人はお茶を飲んでいる。

ルリアの泣きはらした目を、あらあらとエアリスが濡れタオルで甲斐甲斐しく冷やしてくれたおかげで、ルリアはようやく見れる顔になった。

「ほんと、今の今まで気がつかないって、ルリアてばやっぱりトリ頭だよな」

ハヤトが笑うと、ルリアは不服そうに唇を尖らせた。

「うるさい。っていうかお前は気付いていたのかよ？」

「僕は、最初に会ったときからわかってたよ。ああ、君はやっぱりもう一度この場所に戻って来たんだって思った」

心なしか、ハヤトの顔が陰って見えたのが、少し気になる。そんなルリアの不安を打ち消すように、エアリスは努めて明るい声を出した。

「わたくしは、ランクスさまのこの学園への転入のことは理事長より、事前に知らされておりました。本当にお久しぶりですわね」

エアリスは当時を懐かしむように優しくランクスに微笑みかけた。

10年前ランクスは、人質としてこの国『オリビエ』にやってきた。

当時世界はある予言によって混沌とし、赤き王族の治める国と、青き王族の治める国が世界を二分する、血で血を洗う殺戮戦争を繰り返していた。

ランクスは赤き王族の血脈に属する『サリエリ』という国の第一王子であったのだが、その停戦の証にと、青き王族の名家である『オリビエ』の王族に三年間人質として預けられたのである。『オリビエ』の第一王妃であるリア王妃が、將軍家の出でありマサムネの妹であることからルリアとハヤトは生れ落ちた瞬間から、皇女エアリスの学友と定められていた。

ハヤトもまた、マサムネの二番目の弟の息子であり、エアリスにとっては従弟にあたる。

彼らは幼いころから、本当の家族のように過ごしてきた。

しかし今ハヤトはその関係がもどかしかった。

『オリビエ』という一国の正当後継者であるエアリスと、一貴族でしかない自分。それは決して許される恋ではないことを、自分なりに理解しているつもりだった。

しかし目の前に今、一国の王子としてランクスがいる。
ハヤトは胸にひりつくような痛みを覚えた。

青い月

帰宅後、シャワーを浴び終えたルリアは着替えを済ませて、ハヤトの待つ客間へと向かった。ぼんやりと窓の外を眺めるハヤトの目の前に、ホットミルクを差し出す。

「ほら、飲めよ」

ジーンズに赤いジャンパー姿の彼女はちっとも良家の子女っぽくなかったが、そんな彼女の素朴さをハヤトは愛しいと思った。恋愛感情というものは程遠いものであったが、家族よりも、もしかするとルリアとのほうが心の距離は近いのかもしれない。何も語らなくても理解しあえる魂の片割れのような感覚に陥ることがある。

ハヤトはルリアが入れてくれたホットミルクを一口啜った。

刹那ふわりとルリアの腕が降りてきてハヤトを優しく抱きしめた。

「お前泣きそうな顔してる」

「……泣きたいんだ」

「泣いても、いいぞ」

「……泣かない」

「意地っ張り」

ルリアはハヤトの髪を優しく撫でた。

「エアリスのことか？」

「……うん」

「余計なこと考えんな。エアリスは今必死で戦ってる。私たちができるのはそれを背後で支えてやることだけだ」

「……うん、そうだね」

ハヤトはルリアから身を離し、はにかんだように微笑んだ。

「みんなががんばってるときに、僕は、情けないね」

「ばか、そんな顔すんな」

ルリアはそっとハヤトの頬にキスをした。

ハヤトが幼い頃から、エアリスに思いを寄せていることは知って

いた。それゆえにいつかこんな日がくることをルリアは、なんとなく予想してはいたのだが、今は時が悪い。国を挙げて世界が争いに色めき立っているこのとき、このタイミングでのランクスの来訪。それが意味するのはサリエリとオリビエの『婚姻による同盟』であることは誰の目にも明らかであった。

ルリアの瞼裏に、漆黒の少年の面影が横切り、やるせない思いにさせた。

その夜、ルリアはなかなか眠ることができなかった。

月が青い。

それはなぜか心に染み入る光景だった。

夜風が頬を撫で、ルリアの髪とシルクのネグリジェ揺らすと、ルリアは深く瞳を閉じ、追憶の闇へとゆっくりと沈んでいった。

その日、エアリスは王妃の離宮の中庭で、めずらしく泣いていた。ルリアが慰めても、ハヤトが慰めても決して泣き止もうとはせず、そしてとうとう悲しくなって三人で泣き出してしまったのだ。そして、大好きなリア王妃が私たち三人にキスしてくれた。

王妃はエアリスを抱きしめた。

「エアリス、泣いてはいけません」

静かだが、それは強い意志を宿した声だった。

「はい、母上、エアリスはもう泣きません」

一生懸命泣きべそを堪えようとするエアリスが愛おしい。

王妃がエアリスの頬に優しくキスをすると、ようやくエアリスが泣きやんだ。

王妃はまるでおとぎの国の魔法使いのようだと思った。

そしてそこに侍女に手をひかれ、黒髪の少年がやってきたのを覚えていてる。

その少年には悲しいくらいに表情がなかった。空虚な瞳が物憂げ

にただぼんやりと空を映していた。

だけど、私は彼の深緑の瞳が大好きで、彼に心から笑ってほしいと思った。

だから王妃の魔法を真似てみた。

芝生に寝転んだ少年の上に馬乗りになり、唇を重ねた。王妃の魔法は長ければ長いほど効果があると信じていた私は、五分間くらいずっとその唇を重ね続けた。やがて少年は白目をむくことになる。

「ルリア、それは魔法じゃなくって、りょーじよく（陵辱）っていうはんざいこうい（犯罪行為）のひとつだよ」

六歳のハヤトが冷静にルリアに状況を説明していた。

ルリアは、当時を思い出し、ぽりぽりと頭をかいた。

今思えば自分は初対面の人にとんでもないことをしてしまつたと、つつい赤面してしまうが、それを機に（？）少年ランクスは幼い瞳に深い悲しみを宿しながらも、少しずつルリアや、ハヤト、エアリスにも心を開いていった。

——あのころ、確かに私たちは輝くように幸せだった——

やがて停戦の条件のひとつであったランクスの召還期間が終わり、彼は帰国した。

ルリアが眠れぬままに、東の空は白みはじめ、やがて暁に染まるとルリアは苦笑する。

「しっかりしろ、私……」

「青い月……か」

ランクスはふとその光景に見入っていた。辺りには耳を劈くような銃声と爆発音が響く。

まるで夜空に浮かぶ花火のような光景だと、ランクスは思った。
その花火の下で、一体何人の人間が命を落とすのだろうか。

「王子、お急ぎください」

その傍らに男が一人佇んでいた。

冷たい銀の瞳に同じ色の髪が砂漠の風に揺れている。

大魔法使いの証であるその額宛には、この国の守護である『青龍の紋章』が刻まれている。

やがてその男の身体が青白く輝きはじめると、地に巨大な魔法陣が現れた。

ランクスは魔法陣の中心に立ち、腰に薙いだ青龍の宝刀抜き地につきたてた。

『いでよ、青龍』

魔法陣が眩いまでに輝き、その場所から巨大な人型の殺戮兵機が現れた。ランクスは『青龍』と称されるその機体に取り込んだ。

「だ〜か〜ら〜、王宮から招集があつたって、ちゃんと連絡いれた
だろ？」

軍服姿りりしく、ルリアはハヤトのベッドの前に佇む。

ベッドの中で冬眠を決め込んでいたハヤトは飛び起きた。

「そうでした！ うっわ、やべー」

シャワールームにダッシュするハヤトを横目に、ルリアは小さくため息をつく。

「ったく」

執事に客間へと通され、今朝渡されたばかりの会議の資料に目を通す。

「『シバ』壊滅って、まさか！」

ルリアは目をみはる。

ランクス之母国『サリエリ』は今、この大陸の南に位置する砂漠の大国『シバ』と開戦状態にある。『シバ』は豊富な地下資源とそ

れによって得た莫大な利益を惜しげもなく軍備に費やし、おそらくこの大陸で最強を誇る軍事力を保持していた。進軍を開始したのがわずか3日前で、すでにその『シバ』が陥落したのだという。ルリアはその手の震えをおさえることができなかった。

もしも、その戦力をもって自国『オリビエ』を攻められたら……。

「ルリア、大丈夫？ 顔色悪いよ？」

支度を終えたハヤトが部屋に入ってきた。

ハヤトはルリアの手にある報告書に目をやると、そっとルリアの肩に手を置いた。

「大丈夫だよ。この国を焼かせはしない。僕たちも僕たちの戦場で今、僕たちにできることを全力でやろう」

ルリアはこくりとひとつ頷いた。

「おい、コラ！ 遅刻だぞ、お前ら」

エアリスへの謁見を前に、ルリアとハヤトはその男に呼び止められた。

大魔法使いの証である額宛には、この国の守護である『白虎の紋章』が刻まれている。

貴族の軍服に身を包み腰にはサーベルを薙ぎ、ブロンドの髪をオールバックにまとめ、透き通るような美しいアクアブルーの瞳をしているなかなかの美男である。

「げっ、トーマ先生」

ルリアとハヤトは、ほぼ同時にその名を呼んだ。

「げっ、とはなんだ、げっとは、失礼な。それよりお前らこの国の状況についてはちゃんと把握しているな？」

「トーマ先生、『シバ』の陥落は本当なんですか？」

ルリアが切羽詰った声色でトーマに問う。

「ああ、本当だ」

「しかし、この大陸一の軍事力を誇る『シバ』をたった三日でなん

て」

ハヤトが信じられないように、静かに首を振った。

「『サリエリ』まさにその名の通り『死の天使』だな。あいつら禁じ手を使やがった」

トーマは徐に机にこの大陸の地図を取り出し説明する。

「この大陸の四方の守り神として、四神が祭られていることは、お前らも知っているな」

「はい、この大陸の西に位置するわが国では、古の昔より守護として『白虎』が祭られていますよね」

「ああ、だが実はその四神は神なんかじゃない。四神の正体は強力な殺戮兵機だ」

「まさか！」

ルリアとハヤトは思わず息を呑んだ。

「いや、事実なんだ。その昔世界は赤き王族の血脈と青き王族の血脈に別れ、殺戮戦争を行い混沌とした状態に陥った。戦争を終結に導くため、その兵機は開発されたのだが、如何せんその力があまりにも強大だったため、この惑星そのものを破壊し尽す恐れがあった。停戦の調停とともに各国は二度とその過ちを繰り返さないと誓い、嚴重に四神と呼ばれるその兵機を封印した。しかし今になって『サリエリ』がそのうちのひとつ『青龍』の封印を解いた」

普段は飄々としたこの男が、こんな切羽詰った苦々しい表情を見せたのは、はじめてだった。

「今回の『シバ』攻めも、おそらく四神が関わっている。もしそうだとしたら、『シバ』が祭っている四神のひとつ『朱雀』はすでに『サリエリ』の手に渡っている可能性がある」

「ばかな！ならば『サイエリ』は一体何を企んでいるというのだ」
ルリアの握り締めた拳が震えている。

「赤き血脈の王族による、世界の統治。すなわち世界征服だ」

そう話ながら、先ほどからトーマは背後にある巨大な本棚に向かい、必死に古文書を調べている。

「予言の成就、ですか？」

上目遣いにトーマを見上げ、おずおずとハヤトが問う。

「ああ、そうだ。『滅びの黙示録』に記されている世の終わりを、『サリエリ』の国王オーリスは自分の手でなそうとしているってことだ」

「『滅びの黙示録』ですか」

「ああ、昔この地を混乱に陥れた原因のアレ。でも実は『滅びの黙示録』と対になっている預言書がある。その昔、俺のお師匠さんが封印した『光の書』っていうのがあるんだけどな、それには奴らの『滅び』を覆す方法が書かれてあるんだ」

「でもなんで、トーマ先生のお師匠さんは『光の書』を封印しちゃったんですか？それをもって、もっと早くに『滅びの黙示録』に対抗すればよかったのに」

ハヤトが不服そうに唇を尖らせる。

トーマは悲哀のこもった瞳でルリアとハヤトを見つめた。

「いろいろ……事情があったんだろうさ」

ルリアとハヤトは釈然としない顔でトーマを見つめた。

「あっと、俺ちよつとヤボ用あるから、今の間にお前らさっさとエアリス様に謁見してこい」

トーマはひらひらと手を振ってその場を立ち去った。

離宮の中庭で、王妃は静かに彼の訪れを待っていた。やがて現れた彼に、静かに金の酌を差し出すと、トーマは跪きその先に口付けた。

「時が、来たのですね」

「ええ、そのようです」

王妃の瞳がトーマを見つめた。

「今のあなたには、少し酷かもしれませんね」

「いえ、覚悟はできていますから」

神殿の地下に静かに安置された『契約の箱』の前に二人は佇む。
その箱に触れると、トーマのアクアブルーの瞳から、涙が零れ落ちた。

王妃がその場を立ち去ると、トーマはしばらくの間その場所で泣いた。

『光』はあまりにも多くのひとの犠牲の上に、紡がれた。

『光』は愛する人たちの流した血によって、守られた。

エアリスはこの国の皇女として、正装していた。

ふんわりとした亜麻色の髪はアップに結い上げられ、その頂にはダイヤをあしらった豪華なティアラが飾られている。

ノックの後に、ルリアとハヤトが入ってきた。

エアリスは気丈に笑顔を取り繕う。

「王宮は今、大変な騒ぎだな。大丈夫だったか？ エアリス」

沈痛な面持ちでルリアがエアリスを気遣う。

「ええ、大丈夫です。こうしてルリアさまとハヤト様が来てくださいましたもの」

エアリスの瞳が潤む。

ルリアはエアリスを抱きしめた。

「安心しろ、命に代えてもエアリスは私を守る」

エアリスの頬はパツと赤らむのを横目に、ハヤトの瞳に剣呑な光が宿る。

「その台詞、僕が言いたかったのに！！！」

恨みがましく呟くハヤトを見つめ、やがて三人で笑いあった。

「エアリス、そのドレスすごく似合っているぞ！」

「まあ」

エアリスはポツと頬を赤らめた。恋する乙女のそれである。

「ルリアさまこそ、その軍服も萌えですわ」

エアリスはソファアに『のの字』を書いている。

「ですが……」

「？」

エアリスはぽんと一つ手を打って、いきなり立ち上がった。

「ルリア様、衣装を取り替えませんか？」

エアリスの瞳がキュピーンという音を立てて光った。

エアリスは冷酷な笑みを浮かべ、ルリアの上に馬乗りになると、静かに笑いをかみ殺した。

「さあ、大人しくしてらして……」

「や、やめてっ」

エアリスの形の良い指先が、ルリアの衣服を器用に脱がせてゆく。

「やだっエアリス。やめて……あ……ん」

「さようなら、僕の初恋」

そういう置くと、ハヤトは背を向けて走り去った。

「助ける！ ばかハヤト！！！」

ルリアの悲鳴がむなしく部屋に響き渡る。

10分後そっくり衣装を取り替えた二人がいた。

エアリスの軍服姿は、もうコスプレのお姉さんにしか見えなかったが、潤む瞳で「逮捕しちゃうぞ」とハヤトに迫ると、ハヤトはそこにあった大理石の柱に頭を殴打し始めた。

「ドレスはあまり好きではないんだがな」

そこに佇むルリアを見て、ハヤトがあんぐりとだらしなく口をあける。

「ル……ル……」

「なんだ？ ルルって。私は風邪薬ではないぞ」

「ルリア！！！！？？？」

もともと、確かに顔立ちは美しいとは思っていたが、日ごろの粗

野な振る舞いから、ときどき彼女の性別などきれいさっぱり忘れてしまっていた。

しかし、しかしだ。

これほどまでの変貌とは、もはや詐欺に近い。

金に近い褐色の瞳を長い睫が縁取り、まだあどけなさを残すふつくらとした頬は咲き染めのピンクの薔薇の色。つんとつきだした愛らしい唇には、朝露のように濡れた紅がさされている。純白のシルク地に金の髪が惜しげもなく流れる様は、どこからどう見ても、完璧に萌属性の美少女だった。

「ステキですわ。ルリアさま」

エアリスがうっとりとしてルリアを見つめる。

「これで気がすんだろ。はやく衣装を取り替えろ」

「やーん、髪をアップにして……と。さあこのベールを被って見て下さい」

「ああ、もうなにやってるんだよ、エアリス」

そのときドアをノックする音がし、王妃付の侍女が、先触れに来了た。

「間もなく王と王妃がこの部屋に参られます」

そう告げられ、真っ白になっているルリアに、エアリスがいたずらっぽく微笑みかけた。

「うふふ、お父様とお母様気付くかしら？」

エアリスは帽子を深く被って俯き、ハヤトに目配せした。

王と王妃は深刻な顔をしてその部屋に入ってきた。部屋に入るなり、人払いを命じられ、ルリアに扮するエアリスとハヤトは部屋から出されてしまった。

「エアリス、すまないが、お前隣国の王子ランクスと結婚してくれ」
王はそう言うやいなや、エアリスに扮するルリアに頭を下げた。

「はい？」

「形式だけでいいんだ。時間を稼がなくてはならない。どうしても『サリエリ』の目を逸らす必要がある。その間にわが国も『白虎』の封印を解く」

「ちょっ、ちがうんです私エアリスじゃあな……」

ルリアが自分の正体を明かそうとしたときだった。

「国王陛下に申し上げます。すでに『サリエリ』よりエアリス皇女殿下のお迎えの輿が到着されました！」

王の側近が告げると、王がルリアの手を握り、涙目で訴える。

「たのむエアリス。そなたの肩にこの国の命運がかかっておる」

ルリアの背中に嫌な汗が伝う……。

国王の合図とともに侍女たちが現れルリアの手をひいて謁見の間へと導く。

使者に立てられたのは、白銀の大魔法使いだった。

「久しいのう シルビス。かねてよりの約束の通り、貴国との友情の証に、我が娘エアリスをランクス殿に差し上げよう。この婚姻が貴国との和平への証とならんことを切に願う」

国王が静かに白銀の大魔法使いを見つめた。

迎えのリムジンに誘われ、その向かいにシルビスが座ると、シルビスは低く声を殺して笑い始めた。

「オリビエも粋な計らいをしてくれるものだ。おい偽者、いやお前こそが本物なのか。将軍家の姫君」

ルリアは生きた心地がしなかった。

「大丈夫。悪いようにはしない」

冷たいと思っていた銀の双眸が優しく微笑んだことに、まずルリアは驚きを覚えた。

「王子、オリビエの皇女をお連れいたしました」

居室にてタキシードに身を包んだランクスがため息をつき、ソファーに腰掛ける。

「お互いに望みもしないこの婚姻に、果たして意味があるのか？」

「まあオリビエの時間稼ぎには違いありませんが、そう不貞腐れずにくれるというものはありがたく貰っておきなさい」

シルビスはそう言ってランクスに目配せした。

石の聖堂に厳かなパイプオルガンの調べが響く。

この婚姻自体はサリエリとオリビエの間で、それこそ停戦直後に決められたものであったが、その時期はランクスが18になる年と定められていた。しかし情勢が激変した今、人質としての意味合いも兼ね、急遽エアリスがサリエリに入ることになった。非公式ではあるが祭司の前で結婚の儀式だけでも済ませることになったのである。

聖堂には祭司とランクス、シルビスと数名の兵士がその脇に控えている。

「汝、病める時も健やかなる時も、その妻エアリス・シャル・オリビエを愛することを誓いますか？」

ランクスの唇は、その誓いの言葉を紡ぎだせない。

次の瞬間、強烈な爆風が石の聖堂を襲う。

無意識にランクスは花嫁を背に庇う。

そこに佇むのは、血の色にカラーリングされた機体。

「死ねええ、サリエリ王子ランクス・クリフォード！！！」

聖堂が炎に包まれる。

爆風が、花嫁のベールを吹き飛ばした。

「エアリス、こっちだ」

ランクスがその手首を掴み、絶句する。

「ル……ルリア」

「あ……あの、これには深いわけが……」

天井には繊細なガラス細工のシャンデリア、床には赤いじゅうたんに敷き詰められてある。

猫足の白い鏡台にルリアは自分の顔を映してみると、随分疲れて見えた。

「まあ、要するに態のいい人質といったところか」

しかし、自分は偽者なのである。この政治的に極めて重要な場面で、なんということをしてかしてしまったのだろう。しかし、もし自分たちが入れ替わらなければ、こうしてサリエリの人質になったのは、エアリスなのであり……。うーん、国を取るか友をとるかという問題に発展するわけだ。エアリスがもしサリエリに嫁したところで、今の軍事力の均衡からいって、オリビエがサリエリの従属となるのは目に見えている。これは時間稼ぎにすぎないと国王も言っていた。オリビエは今の間に白虎を復活させるはず。ルリアの目裏に忙しく古文書を紐解くトーマの姿が浮かんた。その間エアリスを命の危険にさらさずに澄んだことは、せめてもの救いであったのかもしれない。とルリアは少し前向な気持ちになれた。

ルリアはシルビスに守られ、サリエリ要塞に避難しているのだが、戦いに赴いたランクスは未だ帰らない。大丈夫なのだろうか。不安が頭を過る。

ルリアは部屋の安楽椅子に深く腰を下ろし静かに瞳を閉じた。

「つうか、コルセット苦しい」

ジャージとフリースの上着が無性にほしかったが、この国にユニクロが存在するのかどうかは、謎だった。

「お着替えをお持ちしました」

自分と年恰好のさほど変わらないメイドが、シルクのネグリジェを用意してくれたので、とりあえずそれを着ることにした。

「今日はいろいろあって、お疲れでしょう。ゆっくりお休み下さい」
メイドがホットミルクを入れてくれた。

それを飲むとなんだか眠気が催して、ルリアは安楽椅子でうとうとと眠ってしまった。

ランクスの愛機、青龍が要塞に帰りついたのは夜もだいぶ更けてからのことだった。

「婚姻の夜にひとりにしてしまって、すまなかったな」

椅子の上で眠るルリアをみつめ、ランクスは微笑する。

「こういう形でなく、君を妻としたかった」

そうつぶやくと、まだあどけなさの残る少女の唇にそっと触れた。

ランクスはそっとルリアを抱き上げ、寝台に寝かせる。

月の光の加減か、少し青白くさえ見えるルリアの顔が頼りなく、愛しかった。

翌朝ルリアが目覚めたのは、日もだいぶ高くなってからだだった。

メイドの運んでくれたアーリーティを口に運ぶと、ルリアは用意された衣服に着替えた。エンジのAラインドレスの背には大きなリボンが結わえられている。

「うへへ、今日もコルセット……」

ウンザリという表情でルリアが鏡を覗きこむと、メイドがクスクスと笑う。

「そうおっしゃいますな。とてもよく似合っておいですよ」

「そんなこといっても、こういったドレスはちっとも機能的ではないし、窮屈だ」

「ランクス様は、あなた様のお美しい姿を楽しみにしていらっしゃるのです。ほんとうにあなた様ほどお美しいお姫様はわたくし、見たことありませんわ」

「そんなことより、ランクスは？ 無事なのか？」

メイドがルリアを見つめにつこりとほほ笑む。

「ご無事ですわ。見事な勝ち戦です」

控えめなノックの後に、ランクスが入ってくる。

「よく似合っていますよ、姫」

ルリアはなんだか泣きそうになった。

「よかった。お前、無事だったんだな」

ルリアがランクスに派手に抱きつく、うっすらとランクスに顔に赤みに染まる。

「心配したんだぞ！」

ルリアの潤んだ瞳に、ランクスが温かいものに満ちる。

「食事を一緒にしよう」

メイドに作らせた朝食をバスケットに入れて、中庭で食べることにした。

広間ではシルビスや他の監視が多くて、とても本音を話せる状況じゃなかった。

「ほら、とにかく食べて」

ランクスがルリアに玉子サンドを手渡す。

「あ、あのそんなことより、オリビエは一体どうなるんだ？ サリエリはオリビエを攻めるのか？」

ルリアの張り詰めた瞳に涙が光る。

「ああ、サリエリは今夜オリビエを攻める」

「ば、ばかな」

ルリアが震える。

「嘘だよ」

小さく笑ってランクスはルリアの膝に頭を預ける。
そして自嘲する。

——嘘 トハ 何？ デハ 真実 トハ？ ——

時

王宮の謁見の間では、エアリスが泣いて父王に詫びていた。

「もう泣かずともよい。これがあの娘の運命なのだから」

王の穏やかな双眸が優しくエアリスを見つめる。

「あの娘は運が強い、必ず天が味方してくれよう」

なんとか王はエアリスを慰めようとするが、エアリスは無言のまま、泣き伏している。

そのとき、王の立てた斥候がずぶ濡れのままで通された。

「申し上げます！ただ今サリエリが我が国に向けて進軍を開始しました」

「ちい、思ったより動きが早い」

トーマの端正な顔に苦渋の色が広がる。

「トーマよ、白虎の復活についてはどこまで進んでおる？」

「現在のところ、宝剣と魔法陣の出現までは成功したのですが、『白虎に選ばれし者』つまり宝剣の封印を解くことのできる者がおりません。虱潰しにわが国の勇士を集め、調査中です」

「トーマ、とにかく急いでくれ」

王の表情にも、焦燥の色が濃く滲んでいる。

先ほどから降り出した細い雨が、シルビスの白銀の髪を濡らしてゆく。頬に張り付く長い髪を払うこともせず、シルビスはただ闇を見つめている。馬のひずめ、鎧の金属が擦れあう音、火薬の匂いが鼻につく。

オリビエへの進軍はサリエリ国王オーリス直々の命令であった。背くことは、即ちランクスの死を意味する。

しかしランクスは最後までオリビエ攻めに難色を示し、抵抗し続

けた。

サリエリの第一王子ランクスは今、シルビスによって城の地下牢に監禁されている。

「王子、お許してください。この責めと業は後ほど私がかようにも負います」

シルビスは双眸に深い悲しみをたたえ、天を仰ぎ呟いた。

陵辱

先ほどから降り出した雨が、少し強くなっている。

窓の外を眺め、ルリアは物思いにふける。

ルリア付のミリアというメイドがルリアを気遣い、声をかける。

「そんな窓辺におられますと、身体が冷えてしまいますよ。さあ、こちらでハーブティーなどいかがですか？」

「ありがとうございます」

遠くのほうで雷鳴が轟き、ミリアが小さく声をあげた。

「雷は苦手か？」

「ええ、苦手です」

顔を赤らめ、下を向く。

「今日はもういいから、早く自室に帰っておやすみ」

ミリアはルリアの好意に甘えることにした。

深夜、戸をたたく音にルリアは飛び起きる。

シルクのネグリジェに外套を羽織り、部屋の扉を開くとそこに佇むのはランクスであった。

ルリアはランクスの風貌にぎよっとする。

不快な酒の臭いが鼻につく。

彼女の大好きな深緑の瞳には空虚な絶望が宿り、赤く充血している。形の良い唇の端は切れ、赤くはれている。

「ランクス、お前……」

「サリエリがオリビエに進軍を開始した」

ランクスがぶっきら棒にそう告げる。

ルリアは顔色を失い、小さく震える。

「そ……んな」

ランクスはルリアの唇を強引に奪う。

ねっとりとした感覚とともに鉄の味が口に広がる。

ルリアはランクスから逃れようと必死にもがいた。
やみくもに振り回した手がランクスの頬を引っかき、鮮血が滴^{したた}る。
しかし、ルリアの華奢な手首はすぐに掴まれ、ベッドの上に組み
敷かれた。

「や……めて」

ルリアの瞳に涙が光るのを見つめ、ランクスのは切り裂かれる。

西の空が砲撃によって緋色に染まっているのを、ルリアはただぼ
んやりとベッドに組み敷かれながら、見つめていた。

自国が燃えている。

愛してやまない母国オリビエが、サリエリによって焼かれている。
人も土地も、ルリアの大切なもの全てが、奪われていくのだ。

これは葬送の送り火。

大好きな人たちの面影がルリアの頭をかすめ、消えていく。

そして自分の貞操も、誇りもまた、サリエリの王子であるランク
スによって、全てを奪われ、果てる。

行為の余韻の後で、ランクスがそつとルリアに触れようとすると、
ルリアは反射的にその手を払いのけた。

ランクスは自嘲する。

「人を慈しむときの目は青いというが、君の目は赤い」

「赤い目は、人を憎むときの目だ。私はお前を憎む。憎んで、憎ん
で……」

ルリアの瞳に涙が溢れる。

涙とともに声にならない激情が込み上げる。

憎くて、憎くて、だけど愛おしくてならない。

互いに相反する激しい感情が心を裂く。

「ルリア、俺を憎め。そして慈しみを憎しみに変えてでも、生き延
びろ」

ランクスは自分の上着をルリアに放ってよこし、部屋を後にした。

ルリアは呆然とその場に立ち尽くし、衝動的に机の引き出しからナイフを取り出すと、自身の金の髪に刃を当てた。鈍い音とともに豊かな金の髪が床に滑り落ち、あたりに散乱した。

それは、ルリアにとって儀式であったのかもしれない。

「今日私は死んだのだ」

そう呟くと、少しだけ楽になったような気がした。

ルリアはその日のうちにランクスの屋敷を後にし、一昼夜森をさまよった。

雨に打たれ、水を吸った外套がひどく重い。

サンダルを履いただけの素足には、無数の切り傷ができ、血が滲んでいる。

目が霞み、足が絡んで倒れると、もう自力で立ち上がることはできなかった。

教会にて

トーマは自身の指揮する精鋭部隊を率いて、白虎の祠ほくらに来ていた。サリエリの進軍はもうそこまで迫っている。

しかし、自身の精鋭部隊にも『白虎に選ばれし者』はいなかった。トーマの焦りと苛立ちは頂点に達している。

「隊長！女が行き倒れております」

部下の報告を受け、トーマがちらりとそちらに視線を向ける。

「この近くに確か教会があったはずだ。そこでなんとか助けてはもらえないだろうか」

トーマは女に駆け寄り、助け起こすと、深く被っていた女の外套のフードから、不揃いな金の髪が覗き、蒼白な少女の顔が垣間見える。

トーマは言葉を失った。

湯の沸く音と、おいしそうなスープの匂いにルリアは目を覚ました。

年若い修道女がにっこりとルリアに微笑みかける。

「ここは？」

ルリアはぼんやりとした視線を修道女に向ける。

「ここはオリビエの国境沿いにある教会です。あなたは、この先の森で倒れていたのですよ」

不意に下腹部に鈍い痛みを感じ、辱めを受けた記憶がフィードバックする。

「私……」

ルリアの頬に涙が伝い、修道女がただ優しくその背を擦る。

ひとしきりルリアが落ち着いたところで、

「ここは安全です。しっかり食べて早く元気になってください」

そういつて修道女はルリアに食事を差し出した。

トーマは部屋の外で心配そうに佇んでいる。

「あいつの様子はどうか？」

「外傷はほとんど見当たらず、心配はありません。ですが、内面は……服を換えたときに、彼女の身体に数箇所、痣がありました。下腹部からは出血がありましたし、おそらく性交の跡ではないでしようか」

トーマの拳が震える。

「あいつら、絶対に赦さねえ」

外で待たせていた部下が、慌しく玄関の扉を叩く。

「トーマ様、王宮よりの使者です。西ゲートがサリエリ軍に突破されました！すぐに王宮に戻り、戦闘の指揮をとるようにとのことです」

「ちいつ、こんな時に。 シスターすまない、こいつを頼む」

「神のご加護がありますように」

シスターは十字をきり、走り去るトーマの背中を見送った。

火急

王宮では、將軍マサムネを中心に重臣たちが会議の真つ最中で、ハヤトもその場所に控えていた。話の内容はあまり芳しくはない。不意にマサムネが立ち上がり、ハヤトのほうに歩み寄る。

「朱雀の封印が解かれ、サリエリはこの戦いにすでにそれを投入してきた。我らはこの王宮とともに果てる覚悟だが、ハヤト、お前は親衛隊を率いてエアリス様をお連れしろ」

エアリスの顔が驚愕に引きつる。

「嫌です。わたくしは絶対にここを離れません。父上！ 母上！！」

エアリスの悲痛な声が部屋に響き渡る。

「姫、失礼」

マサムネがエアリスの鳩尾に一撃を食らわせた。崩れ落ちるエアリスの身体を抱き上げ、ハヤトに託す。

「ハヤト、エアリス様を頼む。それから……うちのばか娘のことも

……」

よろしく言うておいてくれ。

マサムネはそう言ってハヤトに背を向けた。

エアリスの頬に一筋の涙が伝う。

赤い髪の女

王宮に帰りついたトーマを待っていたのは、部下マリア・クラビスのお小言だった。

燃えるような赤い髪が肩に流れ、飴色の魅力的な瞳がトーマを挑発し、官能的な肢体がトーマの男心を虜にする。トーマはマリアの小さめのちゃんと突き出た唇に、つついキスしたい衝動に駆られたが、なんとか理性でそれを抑える。

まあ、ようするに彼女マリア・クラビスとは、大人の色香漂ういい女なわけである。

「だいたいお前は、このくそ忙しいときに一体どこをほつつき歩いていたのだ。お陰で私はパニクった部下に泣きつかれるは、大臣殿に怒鳴られるわで、えらい迷惑を被ってだなあ……」

トーマは回廊で仁王立ちの部下マリア・クラビスを脇の小部屋に連れ込むと、そっとマリアの唇に人差し指を当てた。

「静かに」

「なんだというのだ」

長年の付き合いで、どうすればマリアを黙らせるのかをすでにトーマは熟知している。

「トーマ様、どこにおられるのですか？」

部屋の外をどこか間の抜けた部下が通り過ぎ、やがてその足音が遠ざかるのを確認すると、トーマはポケットから指輪を取り出し、マリアの左手の薬指にそれをはめる。

「給料三か月分」

トーマが、にんまりと笑う。

マリアはぽかんと口を開け、次の瞬間耳まで赤面する。

「それって……」

「結婚しよ」

「お、おおおおお前、こんな時に何言って……」

「こんなとき、だからだ。つうわけで、必ず生きろ。約束だ」

抱きしめられ、刹那に交すディープキス。

引き寄せられた腰が砕けそうになるのに懸命に耐えながら、マリアは小さく喘ぐ。

マリアは赤面したままトーマの背中を見つめ続け、薬指にはめられた指輪をそっと抱きしめた。

一部始終を覗き見ていた同僚のクロダが、マリアの耳元にぽそつと呟く。

「トーマなあ、この前飲屋の姉ちゃんにもそれと同じ指輪渡して口説いてたぞ」

「なっなにを、私は別にこんなもの……」

そう言ってそっぽを向く。

クロダが去った後、マリアは指輪を床に投げ捨てる。

「ふん、こんな指輪がなんだというのだ」

机に頬杖をついて、ため息をひとつ。

「だけど、それでも……これはあいつがくれたもの」

マリアは立ち上がり、そっと指輪を拾って胸に抱きしめた。

人の顔を見る度に好きなんだというけれど、いまだにその真意を解りかねる。

アクアブルーの透き通った瞳に、何もかもを見透かされ、ただいのように遊ばれてるだけかも。

「ああ、もう！」

マリアは荒々しく立ち上がる。

その夜、マリア・クラビスは素手で敵の一小隊を壊滅させる働きを見せた。

マサムネ

「さあて、わしも一暴れするのでしょうかのう」

マサムネが会議の席を立つと、マサムネの弟コジローがその後を追う。

「兄上！」

「後のことは任せたぞ、コジロー」

「兄上、私もお供いたします」

「ならぬ、コジロー。お前は生きて必ず王家と一族の再興に尽力せよ」

「マサムネ將軍！」

ダテ家の兵士たちが皆、男泣きに泣いている。

「ええい、どけい！むさ苦しいわ、男臭いわ」

おうおう、と盛大に鼻水を垂らし涙する部下を蹴散らし、マサムネは愛機『雷神』にむかって悠々と歩みコクピットに乗り込んだ。

「マサムネ・ダテ『雷神』発進する！」

マサムネの愛機『雷神』がオリビエの空へと飛翔する。

強烈な重力の感覚に蘇るのは、これまであまた潜り抜けてきた戦闘の記憶と、今は亡き戦友たちの面影。

「待っておれ、すぐにわしもそちらに行くでな」

それは冴え凍るような冷たい夜だった。

月はなく、星もない深闇がただ広がるばかり。

そんなオリビエの空を死の鳥が舞う。

真紅にカラーリングされた飛行型の戦闘機の火力は、あまりにも圧倒的で、あっという間に街を焼いてゆく。深闇より火の粉を纏まとい

現れ出でるその姿をマサムネは美しいとさえ思った。

マサムネは愛機『雷神』を飛行型から人型へと変形させる。

漆黒のボディーに関節部は金のカラーリングが施され、機体の左腕に白虎とマサムネの紋章である菊があしらわれている。

マサムネは軽く目を閉じ、呼吸を整える。

やがて目を見開き、一気にアクセルを踏み込む。

「禍つ神、朱雀！ 行くぞ！」

『雷神』の右手に巨大な槍を握り締め、死の鳥目掛けて突っ込んでゆく。

寸でのところで、朱雀は雷神を交わすと朱雀もまた飛行型から人型へとその形態を変化させ応戦する。腕に仕組れた巨大な弓を引き絞り、雷神目掛けて光の矢を放つ。

雷神も危ういところで、左腕に装備された盾でそれを防ごうとするのだが、爆発を誘導してしまい、盾はもはや使い物にならない。

マサムネは雷神を一気に加速させ、朱雀のコクピット目掛けて槍を投げつける。

ぎりぎりのところを、朱雀も左腕に装備された盾で交わすのだが、強烈な電気エネルギーが生じ、爆発を起こす。

次の瞬間雷神が朱雀の懷に入り込もうと急加速するが、朱雀は素早く機体を飛行型に変形に変形させその背後に回りこむと、機体に据えられた巨大なスキュラで雷神の動きを封じた。

「もはや、これまで、か」

マサムネはその双眸を深く閉じた。

緋の剣

石の聖堂に祈りの歌が響く。

聖堂の両脇に据えられた蠟燭の明かりが、頼りなくあたりを照らす。

聖堂の中央に据えられているのは、美の女神オリビエの石像。

その手には鈍く光を放つ青い神珠が握られている。

ふと修道女は目を見開き、じっと神珠を見つめた。

「時が来たのですね」

耳を劈く（つんざく）ような轟音^{ごうおん}に、ルリアは飛び起きた。

あわてて外に出ると、頭上^{おびただ}を夥しく戦闘機が飛び交う。

ルリアは唇をかみ締める。

涙が頬を伝う。

いとも簡単にランクスに組み敷かれ、陵辱された記憶が蘇る。

——力が欲しい——

ルリアは天を仰ぐ。

ひりつくほどにそう願ひ、声をあげて泣いた。

「泣いている場合ではありませんよ」

いつの間にか修道女がルリアの傍らに佇み、じっとルリアを見つめる。

「あなたには剣をとる覚悟がありますか？」

ルリアは真っ直ぐに修道女を見つめる。

「力が欲しいのです。世界が救えるなんて思わない。だけど自分の愛しい人達を守るだけの力が欲しいのです」

雨に濡れたルリアの前髪から雫が滴り落ちる。

修道女は頷く。

「あなたが手にとるのは『緋の剣』です。この剣によって多くの人の血が流されました。その人たちの血がしみ込んでこのような緋色になったと言ひ伝えられています。呪われた剣という人もいますが、私はそうは思いません。この剣には人々の思いと、希望が託されているのだと思います」

ルリアは修道女によって白虎の祠ほこらへと案内され、着替えるように言われた。

「パイロットスーツ？」

「ええ、そうです」

真っ白のパイロットスーツの左腕には白虎の紋章と百合の刺繍があしらわれている。

「百合の紋章……か」

ルリアの脳裏にエアリスが浮かんだ。百合の紋章は王族のみに使用が許されている特別なものであったからだ。

祠ほこらの奥へと進むと、そこにはトーマが残っていた魔法陣が今も青白い光を放っていた。

魔法陣の中心には緋の剣が地面に深く突き刺さっている。

頭の中に雷の轟くような声が響く。

———魔神白虎に選ばれし者よ、時は満ちた。今こそ汝の力を用いて宝剣の封印を解き放つがよい———

ルリアは魔法陣の中心に進み出で、静かに宝剣を引き抜くと、やがて青白い光の粒子が魔法陣を包み込み、目の前に巨大な獣型の機体が出現した。

「これが伝説の魔神白虎」

ルリアの瞳が大きく見開かれる。

白虎

巨大なスキュラが雷神のコクピットを貫き、破損した機体の一部がマサムネの右目に突き刺さる。

生温い感触が頬を伝い、マサムネが己の死を覚悟したそのとき。西の空に白く輝く獣形の魔神が降り立った。

王宮の物見櫓でマサムネの戦闘を見守っていたトーマの瞳が大きく見開かれる。

「あれは、白虎…」

口にサーベルを咥え、死の鳥を目指し空を翔る

朱雀のパイロットは、人型にそれを変形させる。眩いばかりの真紅のフレイムの機体が赤く光るサーベルを握り白き魔神に切りかかる。

白虎のパイロットもまた機体を人型に変形させ、ライフルで応戦する。

ライフルの銃弾が、朱雀の後頭部のカメラに命中し、制御が困難になった。

形勢の不利を悟ったサリエリ軍は撤退を始める。

オリビエ軍はやんやの喝采で白虎を迎える。

やがて白虎のコクピットがひらき、勝利を祝いに駆けつけたオリビエの兵士の中に降り立ったのは、一人の少女であった。ヘルメットを脱ぎ、小脇に抱えると、不揃いに切られた金の髪が夜風に揺れているのが痛々しい。

「運命っていうのは、ちよいと残酷過ぎやしないかい？」

トーマは複雑な表情を浮かべ呟いた。

朱雀のパイロット

格納庫の手前で、朱雀はその形態を飛行型から人型へと変形させた。

悪びれもせず、パイロットはコクピットから地表へと降り立つ。

「最強の兵器を持ちながら、負け戦とはな」

サリエリ国王の弟オルシエは冷ややかにパイロットを見据えた。

「……申し訳ありませんでした」

朱雀のパイロットはオルシエの死角でこっそり「あっかんべー」と舌を出す。

年の頃なら17・8歳といったところか。

日に焼けた小麦色の肌に、彫りの深い端正な顔立ちにはどこことなく気品が漂う。

オルシエが咳払いをする。

「シャナ王子、御妹君蓮姫が我らの手中にあることをお忘れなきように」

シャナは唇を噛み締める。

「王子」

乳兄弟で側近でもあるアグニが心配そうにシャナを見つめる。

シャナはアグニの前で盛大にため息をついてみせる。

「なにが悲しくて、他国の侵略戦争に加担せにやあならんの」

アグニは目を伏せる。

なにせ、つい数日前までシャナは砂漠の要塞都市シバの王子として、何不自由ない暮らしをしていたのだ。それがいきなりのサリエ

りの侵略に国は焼土と化し、妹は捕虜として連行された。一度は伝説の四神朱雀を駆って、サリエリへの奇襲を試みたものの、青龍の前に敢え無く敗北を喫た。妹を盾に無理やり朱雀を駆って、他国の侵略戦争へと駆りだされているという始末。

「心中お察し申し上げます」

アグニは感極まった声色で、ようやく声を絞り出した。

「バーカ、泣きそうな顔してんじゃねえよ。蓮を取り戻し、軍の立て直しが済んだら速攻でサリエリのバカをしばきに行くっつうの！」

シャナは悔しげに唇を噛みしめた。

父

コクピットから降り立ったルリアにマサムネ被弾の一報が知らされる、ルリアは足早に処置室へと急いだ。

「父上！」

「今、鎮痛剤を投与し、眠ったばかりです」そう看護師が告げた。ルリアはベッドに横たわるマサムネをじっと見つめる。

厳しくはあったが、誰よりも強く優しかった父。

今と変わらず父が大好きで、その温もりにどれだけの安らぎを得ていたことか。

そんな父の顔の右半分が痛々しくも包帯に覆われている。

「父上」

そう呟いた声色が自分でも思ってもみないほど心細げで頼りない。幼い頃そうしたように、ルリアはそっとマサムネの手を取り自分の頬に押し当てる。

やがてマサムネの左の瞼が微かに動き、ゆっくりと見開かれる。

「ルリア……か」

「そうです。父上」

気が緩んだせいか、涙が止まらない。

そんなルリアの頭をマサムネの掌が優しく何度も撫でてくれた。

「髪はどうした？」

「ちょっとイメチェンです。似合いませんか？」

ルリアは父の枕もとに置いてあるティッシュで鼻をかみ、笑顔を取り繕う。

「お前はもとが美人じゃて、どんな格好でもよく似合う」

「お……お……親……バカ」

ルリアの意思と反して、涙が一向に止まらず上手くしゃべれない。

憎まれ口を返すか、と思いきや、マサムネはルリアに優しく微笑んだ。

「バカでもええよ。バカなほど、わしはお前を愛しておる」

そしてふと彷徨ったマサムネの視線が、不意にルリアのパイロットスーツに注がれる。

その左腕には銀の糸で白百合の紋章の刺繍が施されている。

「白百合の紋章…か」

ルリアはこのパイロットスーツのままで父を見舞ったことを後悔した。

白百合の紋章は王家のみにその使用を許された厳格なもの。だからきつと怒られるか、そうでなくても父は不興に思うだろう。

「火急のときゆえ、このようなものを身に纏い、申し訳ありませんでした。すぐに着替えます」

ルリアが席を立とうとすると、マサムネは静かに首を横に振った。

「そのままでよいよ。いや、その紋章こそがそなたに相応しいのだ」

「父上、一体何をおっしゃって……」

ルリアは腑に落ちない様子でマサムネを見つめる。

マサムネはふと視線を彷徨わせる。

「夢を見ておった。そなたが生れ落ちた新月の夜の夢を」

北の国

地に足をつかないというのは、なんとも心もとない感覚だとハヤトは思う。

昨日、サリエリの攻撃を受け、自国の不利を悟った將軍マサムネからエアリス亡命の任を仰せつかったハヤトは、現在大陸の北にある『北斗』という国に向かう飛行艇に乗っている。隣でエアリスはスースーと寝息を立てているが、ハヤトはとても眠る気持ちにはなれない。時々おもいだしたようにそつと懷にしまった書状を確認してみる。

それはマサムネから、北の国の首長に宛てた書状だった。

もしかしたら北の同盟国への援軍の要請かもしれないし、エアリスの保護を要請したものかもしれない。

とにかく今この場でエアリスを守ってやれるのは自分しかない。そう言い聞かせ、自分を奮い立たせる。

規則正しいエンジン音を聞きながら、ハヤトが深く目を閉じると、不意にバランスを崩したエアリスがハヤトの肩に頭を持たせ掛ける。その温もりを肌を感じ、ハヤトは思わず赤面してしまう。

やがてエアリスが眠そうに目を擦り、小さな欠伸をひとつした後、定まらない焦点でハヤトの顔を見つめる。

「ハヤト様、お顔が真っ赤ですわ。お熱がおりになるの？」

エアリスがそつとハヤトの額に触れようとすると、その懷にある書状が垣間見えた。

エアリスは可愛らしく小首を傾げる。

「なんですの？ それは」

「あつと、これはですね、マサムネ將軍から預かったもので、我々はこの頃からこれを携えて、北の国『北斗』の首長殿に会いに行かねばなりません」

飛行艇の船内にアナウンスが流れ、間もなく目的地『北斗』に到着する旨を告げた。

「北の首長殿といえば、上杉一族ですわね。たしか名を謙信様とおっしゃるのではなかったかしら？」

「そうです。なんでも謙信様はマサムネ將軍の旧知の友人らしいですよ」

「そうなのですか」

エアリスは飛空艇の窓から、近づいてくるターミナルをじっと見つめた。

手をつないだ親子連れ、笑顔で語らうカップル、スーツケースを持ったビジネスマンの群れ、それはごくなんでもない平和な日常の風景であった。

「でしたら、なおさら急がねばなりませんね。サリエリが次に軍を進めるのはおそらくこの国でしょうから」

魔法

「ああ、上杉さまのお屋敷に行くには、この道をまっすぐに進めばよいよ」

ターミナルを出たハヤトとエアリスに、親切そうな老婆が教えてくれた。

「ありがとう、おばあさん」

エアリスが優しく微笑むと、つられて老婆も微笑む。

「なあに、礼には及ばんさ」

そういつて見送る老婆に会釈し、ハヤトとエアリスは先を急ぐ。

「はて……わしは何かを言い忘れたんじゃないだろうか」

しばし老婆は考えこむ。

「そうじゃ、上杉のお屋敷にはとても^{どじょう}獐猛な犬が放されておるんじゃない」

そういつて老婆が顔を上げたときには、もう二人の姿はそこになかった。

「大丈夫かのう……」

老婆は小道の先を見つめ心配そうに呟いた。

白い砂利の敷き詰められた小道の両脇には^{うつそ}鬱蒼と針葉樹の森が広がる。

どこからか小鳥のさえずる声が聞こえ、頬を伝う風の冷たさが心地よい。

「一本道でよかったですね。この森は迷うと厄介なことになりそうだ」

なんとなく間を持余し、ハヤトが口をひらく。

「そうですね、ですが美しく素敵な小道ですわ。 平和なときであればルリア様もお誘いして、ここでお弁当をいただきたいです」

エアリスがふんわりと微笑する。

刹那、木陰から低い唸り声がする。

ハヤトは腰に佩いた剣を抜いて身構える。

姿を現したのは一頭のエアデル・テリア。

低く唸り声を上げると、エアリス目掛けて飛び掛る。

ハヤトは左腕で咄嗟にエアリスを庇った。

鋭い犬歯が腕に食い込み、ハヤトは顔をしかめる。

遠くのほうで口笛の音がすると、エアデル・テリアはハヤトの腕を放し、走り去る。

ハヤトの衣服に血がにじむ。

「じっとして」

エアリスが神妙な面持ちで、ハヤトの腕を押さえると、エアリスの掌が青白く輝はじめた。

やがて強かにそれは熱を孕んでいく。

「エアリス、なんだか熱いですよ」

「大丈夫、じっとしててください」

しばらくすると、ハヤトの出血は止まり、傷跡は跡形もなく消えていた。

「エアリス、今のはひょっとして魔法ではないのですか？」

そう問うたハヤトにエアリスが寂しそうに微笑む。

「ええそうです。回復の魔法ですわ」

「魔法は、祭司の血脈に属していないと使えないはず……」

ハヤトは口ごもる。

王族の血統に祭司はいない。

ならばなぜ、エアリスがそれを使えるのだ？

「エアリス、あなたは一体……？」

一呼吸置いた後、エアリスは口を開く。

「わたくしは王族の血を引いておりません」
そして意を決したように不敵に微笑む。

「真実を知りたいですか？ ハヤトさま」

王妃の追憶

疲れた身体を、お気に入り長の長いすに横たえると、リア王妃は悲しげな視線をふと漂わせた。

脳裏を過ぎるのは、街を焼かれ、親を失った子供たちと怪我の痛みにうめく兵士……。

王妃は今日一日、国王とともに戦火の犠牲になった人々のもとを慰問し続けた。

足が棒になるほど歩き回り、身体の疲れはもちろん、だがそれ以上心重い。

窓際に置かれた文机の上にはセピア色の写真とその横に清楚な雛菊の花が飾られている。

王妃は重い身体を起こし、その写真の前に立つ。

写真のなかには、夢見るように微笑む女性が一人映っている。その面影が、どこことなくエアリスに重なる。

「ねえ、リージェ。戦争って本当に嫌なものね」
そう呟くと、王妃の頬にとめどなく涙が伝い落ちた。

最初に思い出すのは、桜の花の舞い散る季節。

制服姿の亜麻色の髪の乙女がふわりとリア王妃に笑いかける。

もったもこの時はまだ、リアは王妃ではなく將軍家の末の妹であったのだが、リアは一瞬そこに桜の精が舞い降りたかのような錯覚を覚えた。

「お姫様っていうのは、きつとこういうひとのことをいうんだ」

と14歳のリアが大いにショックをうけるほど、リージェは美しく完璧な女の子だった。それに対してリアは、將軍家の血脈のゆ

えか、従来より運動神経がよく、特に剣術に至っては天賦の才があった。親に内緒で出場した学園の剣術大会では男子を抑え優勝した
ことさえある。

そんな対照的な性格が引き合ったのか、二人は出会ってまもなく
無二の親友となった。光輝く木漏れ日の中で、幸せな少女時代を
ともに過ごしたのであるが、16歳の夏、リージェは時の大祭司の
息子であるポティファルに、リアはオリビエ王子セイルに嫁いだ。

リージェは早々に男の子を出産し幸せな日々を送っていたのだが、
あの日……。

16年前の新月の夜に、リアは双子を産んだ。

「おめでとうございます。王子と姫が同時に誕生されました」

大役を終え、その侍従の声を聞き安堵とともにリアはしばしの微
睡に落ちた。
ろみ

短い微睡のなかでリアは夢を見た。

夢の中で、リージェが泣いている。

泣きながら生まれたばかりの赤子を抱いていた。

やがてリアの顔を見つめ、その赤子をリアに託す。

なにか声をかけようとするが、上手く声がでない。

やがて、リージェを濃い霧が包みその姿が見えなくなってしまっ
た。

リアは飛び起き、身支度を整える。

「誰か！馬を引け」

「王妃、そのお体では無理です！だれか！王妃がご乱心です」

侍従の悲痛な声をあとに、リアは近衛兵を率いて神殿に向かう。

視界が見えぬほどの大雨であった。

雷鳴の轟きにリアは不安を拭えない。

神殿は侵略者によって、踏み荒らされた後だった。
門の傍で白目をむいた番兵がゆっくりと崩れ落ちる。
その項には槍が深々と突き刺さっている。

「おい！ しっかりしろ」

リアは馬から飛び降り番兵の項に突き刺さった槍を引き抜くと、
鮮血があたりに飛び散り、水溜りに注ぎ込んだ。

「一体だれが……」

リアは唇を引き結び、神殿の祭壇へと進み行った。
やはり神殿内にも、多くの祭礼者たちが倒れ付している。
いずれもすでに事切れているようだった。

祭壇の前で血まみれのリージェが蹲うずくまっていた。

「リージェ！」

リアが駆け寄ると、リージェが双眸から涙を流す。

「リア……来てくれたのですね」

「一体だれがこのようなことを」

リージェの衣服は破られ、その喉もとには刃物で切りつけた跡があり、その手には血塗られた短剣が握られている。侵入者に犯された後で、自ら命を絶とうとしたらしい。

リージェは祭壇の後ろの隠し階段を指差し、事切れた。

「リージェ！」

リアの絶叫が石造りの建物のなかをむなしく響き渡る。

暫し呆然と立ち尽くすリアの耳に地下の部屋から微かな子供の泣き声が聞こえた。

地下室に安置されている『契約の箱』の中でリージェの忘れ形見である少年トーマが泣きじゃくっていた。その小さな腕に赤ん坊を必死に抱きしめている。

「トーマ、もう大丈夫だ」

リアはその腕に少年と赤子を包み込んだ。

「トーマ、その赤子は？」

「今朝……生まれたの。僕の妹だって……お母さんが僕に渡して、この箱の中に隠れるように言ったの」

「名前は？」

「エアリスっていうの。お母さんは？」

リアはトーマに答えることができず、ただその小さな体を力いっぱい抱きしめるだけだった。

しばらくして祭司ポティファルとその一族のもの全ての惨殺が報告された。

マサムネが重い口をひらく。

「おそらくこの惨殺は『予言の書』が関係している。赤き血脈の手のもの仕業だ」

「祭司の一族が『鍵』の役割をになっているからなの？」

リア王妃は力なく首を横に振る。

国王セイルが生まれたばかりの赤子をかわるがわる抱き上げその頬にキスをした。

「ルリア、ハヤト、父はお前たちを愛しておる。そのことを忘れてはなりませんよ」

「あなた！」

王妃の瞳が涙に潤む。

「許せ、リア。この双子の誕生もまた『光の予言』に記されておる。そうであれば次に命を狙われるのは、この子たちだ」

リアはその場に泣き崩れる。

「新月の夜に王宮に生まれ出でたのは、この娘エアリスであった。故に『光の予言』は未だ成就していない。よいな」

セイル王はエアリスを抱き上げそう告げた。

「御意」

マサムネが下を向き、静かに頷いた。

悲しい追憶の後でリア王妃は顔を洗った。

「しっかりしなくてはダメね。リージェ……」
そういつて泣きはらした顔を冷やした。

間もなく侍従が慌しく部屋をノックする。

「何事ですか、騒々しい」

部屋に通された侍従は、よほど急いできたのか、肩で息をしている。

「マサムネ様が、ご危篤でございます……!!」

契約

マサムネ危篤の報告を受け、ルリアはその病室の前に力なく佇む。先の戦闘で負った傷は、深いとはいえ死にいたるものではなかったが、血液内に菌が入りこみ敗血症はいけつしょうを起こしているとのことだった。ルリアの握り締めた指先が氷のように冷たい。

「父上……」

昨日告げられた自身の出生の出来事は心に重く、今も自分の中で何一つ整理がついていない。

ルリアは病院内を頼りなく彷徨さまよい、中庭に出た。

人気のいない中庭に、ボロを纏った老婆が一人ベンチに腰掛けていた。

黒い外套から覗く横顔は不気味なほどに醜悪で、ルリアはふとその場に立ち竦すくんだ。

老婆はルリアに笑いかける。

「浮かない顔だねえ、お嬢さん」

「そう……ですか？」

ルリアが蒼白な顔を老婆に向ける。

「ああ、泣くこともできんぐらいに、心が押しつぶされているといった風情だねえ。だれか身内に不幸でもあったのかね？」

「父が……父が危篤なんです」

「いや……その人物はあんたの父なんかじゃあない」

ルリアがかつと目を見開く。

「そうじゃろ？ お前さんは新月の夜に取り替えられたんじゃ。お前の本当の父は……」

「いわないで！」

ルリアが耳を押さえ、叫んだ。

「私の父は、將軍マサムネだけです」

「ほう、ならばお前さんはマサムネを助けたいか？」

老婆の左目が、ピクリと動きルリアを見つめる。

「当たり前でしょう！」

ルリアははき捨てるようにそう言った。

老婆はルリアを値踏みするように見据えた。

「できないことはないぞ」

ルリアがはっと老婆を見つめる。

「ならばお前さん、わしと契約せい」

「契約？ あなたは一体……？」

「わしか？ わしは『人ならざる者』じゃて。人はわしを『魔』と

か『魔女』とかそれぞれに好きなように呼ぶ。

それよりも契約、命には命をもつてのう……。マサムネの命を助

けるかわりに、お前さんの命を賭けてもらうことになるがのう」

ルリアはきつと老婆を見据える。

「わかりました。父の命が助かるなら我が命、惜しくはありません」

「ほう、よい心掛けじゃ。お前さんはその命に賭けて、サリエリ王

子ランクス・クリフォードを殺すと誓え」

「ランクスを？」

「そうじゃ、誓いはリスクが高ければ高いほどその効力も高いと言

われておる。だからもう、この聖なる十字架をお前さんの心臓に埋

め込んで、その誓いが果たされぬときには、容赦なくお前さんの心

臓を貫くというわけじゃ」

老婆は懷から銀の十字架のネックレスを取り出し、その双眸を細めてみせる。

「憎いんじゃない？ この国を焼き、お前さんの貞操を奪ったあの男が」

なおも老婆は低く笑って続ける。

「マサムネを助けたいんじゃない？ ならばそれしか方法はない」

——ランクス ヲ 殺セ——

ルリアは鉛色の天を見上げた。

宣告

將軍マサムネの危篤の報告を受け、王宮が俄かに慌しくなった。赤毛の女騎士マリア・クラビスは、今リア王妃の護衛として、マサムネが治療を受けている病院に同行している。

「すまないな、マリア。昨日の今日でろくに睡眠も取れておらぬであらうに」

「いいえ」

マリアはリア王妃に一礼する。

マサムネが治療を受けているICUに王妃の姿を見送ると、ぼんやりと窓の外に目をやった。

疲れていないといえば嘘になるが、マリアは腰に難いだ剣に手をやる。

戦士としての直感が、その気配を感じてしまったからだ。

「『魔』の気配がする」

窓の外、中庭で誰かが話をしている。

「あれか」

目を凝らすとそこに見えるのは老婆と、金の髪の少女。

マリアは隠し持ったナイフを老婆目掛けて投げつける。

寸でのところを老婆がナイフをかわし低く笑い声をあげる。

「おやまあ」

マリアは移動呪文を唱え、中庭に姿を現わした。

腰の剣をぬき、身構える。

「この国の若者には、老婆を労わるって気持ちがないのかねえ」

「黙れ！『人ならざる者』が常世の人間になんのようにだ？」

マリアが老婆目掛けて一気に間合いをつめ切りかかると、老婆は信じられないスピードでその攻撃を軽々とかわしていく。

「お前さんには無理じゃて」

マリアが薄く微笑み、何事かを呟くと、地に魔法陣が出現した。

老婆の顔が驚愕に歪む。

「ちいつ、今までの攻撃は、この魔法陣を敷くための布石であったか」

「誘爆！」

マリアがそう唱えると、魔法陣の中で爆発が起こった。

肩で息をつき、苦しそうに喘ぐ老婆がの左腕がだらりとぶらさがっている。

老婆が右手で護符を取り出すとマリアにそれを投げつけた。

白い煙幕があたりを包み、老婆は姿を消した。

「ちっ逃げられたか、もう少しだったのにな」

マリアは剣を鞘に収め、その場所に蹲ったままのルリアに手を差し出す。

「立てるか？」

その拍子に、ルリアの鎖骨の辺りに黒い蝶の形の痣があるのを見つけた。

「黒い蝶、お前まさかあの『魔』と契約をしたのか？」

ルリアの頬に一筋の涙が伝い、小さく頷いた。

I C Uで奇跡は起きた。

一時は心肺停止の状態に陥ったマサムネの意識が戻り、その双眸を開いたのである。

「兄上！」

リア王妃がその手を強く握り締めた。

「奇跡でございます」

人々はみな互いにマサムネの回復を喜びあった。

その輪から少し離れた場所で、マリアがルリアの死を宣告する。

———お前は必ず死ぬことになる———

守護者

鬱蒼と茂る木々の間を、鳥が一羽不気味な泣き声をあげて飛び立つ。昼なお日の当たらないこの森の奥に、小さな石作りの教会がある。傷を負った左手を庇い、足を引きずりながら、老婆がその教会の前に立つ。

右手をその醜惡な顔に当てると、たちまち若い修道女の顔に変わる。

女は外套を脱ぎ捨て、聖堂の中に安置されているオリビエの女神の前に進み出た。

その手に握られている鈍く輝く青き神珠にふれようとしたとき、不意に背後に人の気配を感じ、振り返った。

「蛇よ」

ツインテールの少女が石畳の聖堂に軽やかに降り立つ。

ガラス玉のような透き通った青い瞳に、白磁のような肌の、年の頃なら12・3歳の少女である。

黒いビロードのドレスにはふんだんに白のレースとリボンがあしらっており、一見すると整いすぎた人形のような印象を受ける。

その少女の顔を見て、女の顔が恐れに蒼白になり震え始めた。

「ら……楽園の守護者ケルビム！」

少女は無表情のまま、女に手をかざすと鈍い音とともにその手首に火の輪が現れた。

「蛇よ、『人ならざる者』のこの世への関与を、主さまは快く思っておられない」

鈍い音とともに少女の両手首に火の輪が出現し、女の首筋にそれが迫る。

「あ……あ……命ばかりはお助けを！」

女はその場にペタンと尻餅をつき、振るえはじめた。

「よかろう、だがこちらもお前の命を助ける代償を貰い受けるとし

よう」

瀕死の傷を負った女が、その聖堂から逃げ出すと、少女はじつと青い神珠をみつめた。

先ほどまでとは違い、その表情には慈愛と悲しみの色があった。

「なあ、神珠エバよ。先に堕ちたのは、あのときもあなたのようにあったな」

蓮姫

「離せ！無礼者」

上質のシルク地のサリーの裾が翻る。

意思の強そうな唇を噛み締め、蓮姫は気丈に自分を連行するサリエリの兵士を睨みつける。

砂漠の要塞都市『シバ』の王女蓮姫は、『シバ』陥落後すぐサリエリ国王の夏の離宮に移送された。年の頃ならまだ十五、六といった可憐な少女である。

ランクスは何とはなしに遠目に蓮姫の姿を目で追った。

やがて彼女は日の当たらない、地下牢につながれ監禁された。ひとりになると、さすがに気丈なこの姫の瞳からも涙が伝う。

「父さま……母さま……」

シバ本土の襲撃のとき、父王と母である妃は公務で宇宙にあるシバの衛星都市シオンに出向いていた。おそらく戦火に巻き込まれずに、無事でいるはずだ。

遠くで物悲しいすすり泣きのような風の音がする。その音に混じってあれは足音……だんだんこちらに近づいてくる。蓮は神経を研ぎ澄ます。ひそかにペチコートの内側に隠し持った短剣に触れる。

蠟燭の頼りない明かりをもって、現れたのはサリエリの黒い軍服を着た年若い兵士、いや服装からしてかなり上位にある士官であろうと推測される。紫がかった漆黒の髪にエメラルドのような深い緑の瞳の少年。

彼は無言のまま、蓮姫の閉じ込められている牢の鍵を開いた。

「大丈夫か？」

いぶかしげに彼女の顔を覗き込み、彼女の華奢な手首を戒める鎖から解き放った。

蓮姫ははっと顔を上げる。

「あ……あの、あなたは？」

「ランクス・クリフォード」

蓮姫の瞳がかっと見開かれ、隠し持った短剣がランクスを目掛けて勢い良く振り下ろされる。

ロケット

地下牢の石畳に、甲高い金属音が響く。

蓮姫の振りかざした短剣は、いとも簡単にランクスによって取り上げられてしまった。

蓮姫の頬に涙が伝う。悔しいのだ。敵わない。自国を踏みにじり、辱める敵国の王子に一矢報いることもできず、唯一隠し持った武器さえも取り上げられ、これほどの屈辱があらうか。

「大人しくしている。悪いようにはしない」

そういつてランクスは蓮姫を地下牢から連れ出した。

「お前の兄と連絡をとった。すぐに向かえが来るだろう」

何処かへと向かうリムジンの中で、ランクスと名乗る少年はただぼんやりと窓の外を眺めていた。時々胸ポケットから銀のロケットペンダントを取り出すと、大事そうに触れる。

少し間を持余した蓮姫が口を開く。

「あの、そのロケットペンダント素敵ですね、恋人からの贈り物ですか？」

ランクスの瞳に悲しみの色が宿る。

「いや、恋人ではなく宿敵になってしまったよ」

港のあるヘリポートにつくと、ランクスは徐にそのロケットペンダントを海になげようとした。が刹那蓮姫にその腕を押さえられ、浅瀬にそのロケットを落とした。

蓮姫はその衣服が濡れるのも構わず、海に入りそれを拾い上げた。

「大切なものをそんなに簡単に手放してはいけませんわ」

ランクスは曖昧な笑みを向ける。

「君が、持っていてくれないかな？そしていつか彼女に会うことがあったら渡して欲しい」

純金のオーバル型のロケットペンダント

そこに映る向日葵の髪の少女が太陽のように明るく笑っている。

やがて上空からヘリが舞い降り、蓮姫の前に梯子を下ろす。

「蓮無事か！ 早く来い！！」

懐かしい兄の声がする。

「兄上！」

蓮姫が叫び梯子につかまると、ヘリは高度を上げて空に舞う。

刹那、けたたましいサイレンの音が港に鳴り響き、あっという間にランクスは銃を構えた兵士たちに囲まれる。

踊り子

——ランクスよ、お前は我が息子にあらず。我が奴隷なり——

それは、物心ついた折から父であるサリエリ国王オーリスによって言われ続けた言葉であった。

ランクスは今、蓮姫を逃がした罪を父王の前で問われている。

鞭打ち、それは水牛の皮でできた鞭を、罪人の背に振り下ろす拷問であり、通常50回の鞭打ちをその身に受けると、死に至るという。

父であるサリエリ国王オーリスは、酒宴の席の余興としてそれを
実の息子に行おうとしていた。

ランクスは上半身の衣服を脱がされ、手に枷をはめられた状態で
その場に四つんばいにさせられた。

合図とともに鞭が容赦なくその身に振り下ろされ、皮膚を抉る。

オーリスの酒で濁った瞳が爛々と輝き狂気に染まる。

痛みはやがて麻痺してゆき、意識も朦朧と途切れてゆく。

四十九回の鞭打ちのあと、ランクスは死を覚悟した。

思い出すのは幼き日々の幸せな記憶。

向日葵の髪の少女の微笑んだ横顔。

ランクスは静かに瞳を閉じた。

鈴の音がする。

薄暗い部屋に微かな鈴の音とともに少女が舞台のそでから姿を現

した。

ツインテールの少女が身に着けているのは、シルクの薄い布をだけであった。額に銀の鈴が結わえられ、官能的に舞ってみせる。年の頃は12・3歳。女として未だ成熟していないが、それゆえの禁断の魅力が彼女にはあった。オーリスに呼ばれ少女がその王座へと誘われると、薄い帳が下ろされた。

やがて、微かに鈴が鳴る音とともに、彼女の喘ぎ声が聞こえ始める。

王にならない来客者たちには次々と女性たちが宛がわれ、それの中である。

シルビスはこの狂乱に便乗し、そっとランクスを助け出した。

傷は思ったより深い。

シルビスは手早く傷口を洗い、薬を塗った。

ランクスは幼いころから、この父王によって拷問を受け続けてきた。愛妃であったランクスの母ラケルはランクスの誕生とともに息を引き取った。オーリスはその死の悲しみに耐えることができず、悲しみをランクスへの憎しみに変えた。

幼い頃から、この王子の傷口を何度手当してきたか知らない。

シルビスが汗で張り付いたランクスの前髪をそっと指で払うと、ランクスの形のよい眉毛が微かに動いた。

鈴の音とともに少女がランクスの手当てされている部屋へと入ってきた。

シルビスが少女に頭を下げる。

「王妃、先ほどは我が主のお命を救っていただきありがとうございます」

少女が無機質な声色でそれに応える。

「礼を言われる筋合いはない。こちらはこちらの思惑で動いている

だけのことだ」

少女が何事かを呟くと、ランクスの背にあった無数の傷が跡形もなく消え去った。

先ほどまで苦しそうに肩で息をしていたのが、嘘のように穏やかな寝息を立てている。

シルビスが思わず少女を見つめる。

「あなたは一体……？」

少女の唇に薄笑が浮かぶ。

やがて、オーリスの召しの合図である呼び鈴の音が聞こえ、少女はその場を立ち去った。

鏡

鏡の前で少女は衣服を脱ぎ捨てると、そつと掌を鏡にあてた。すでに男を知っているとはいえ、胸のふくらみはまだ小さく、ちつとも成熟していない少女のそれであるのだが、その胸の中心から縦に一直線の古い大きな傷跡がある。

やがて鏡に映る自身の顔がぐにやりと曲がり、ツインテールの黒いビロードのドレスを着た少女が映し出される。

同じ顔。しかしその人格は異なる。

「来てくれたのね、嬉しいわ」

少女は鏡に映るもう一人の自分に嬉しそうに微笑んだ。

「人間なんぞに転生したときは私も随分と心配したが、意外に元氣そうだな。アイ」

鏡のなかのツインテールの少女が口を開く。

「ええ、まあ、なんとか。でも、もうすぐ私もそちらに戻れると思うわ」

鏡の中の少女が悲しそうな眼差しを、その傷跡に向ける。

「お前にはつらい思いをさせてしまうことになるな。アイ」

アイと呼ばれる少女は静かに首を横に振る。

「いいえ、これもまた主さまの^{ぬし}大いなるご意思ですから。私は樂園の守護者ケルビムとして、赤き神珠アダムを解き放たねばなりません」

鏡の中の少女は静かに頷いた。

———その後我とお前はひとつになる。我らは樂園の守護者、双

頭の驚ケルビムなのだから――――

「なにをしておる、アイ早くこちらへ！」

少女は無邪気に笑い、オーリスの誘いに応じる。

白磁のような肌に蜂蜜色の髪が流れる。

かたい蕾のような少女の裸体を抱きしめ、オーリスはそつとその小さな胸の谷間に走る傷口に唇を追わせた。

くすぐったいのか、アイと呼ばれる少女がきゃっきゃと声を立てて笑い、逃れようとするが、オーリスのがつしりとした腕がそれを許さない。オーリスがそつと少女の胸に耳を宛がい、その鼓動を確認する。

「おお、そうじゃ、これじゃ。これこそまぎれもなく、赤き神珠の息づく鼓動」

母親を求める赤子のように、オーリスはアイを求める。

アイは狂気の中を生きるこの初老の男にとって唯一つの光であったのかもしれない。

アイは瞳を閉じ、自嘲する。

――人間とは厄介な生き物だ――――

少女がオーリスの髪を撫でる。

――自分は、この男を愛してしまったのかも知れない――――

少女はのぼりつめ、魚がはねるように身体をのけざると、その胸の中で果てた。

上司

まったく、この男ときたら。

マリア・クラビスは少し顔をしかめる。

衣服は一昨日のままだし、その端正な顔に無精髭がおおう。

なのだが、一心不乱に古文書を読み解く様に、マリアはお小言を飲み込んだ。

小さくひとつため息をつく執務室の端に設えられた小さなキッチンで、手早くスープを作ると、この上司の前に差し出した。

「とりあえず、食べろ！」

照れをかくし、ぶっきら棒な口調である。

マリアは少し悲しくなった。

なんで、自分はいつもこうなんだろう。

マリアはたいいていのことには、他者に引けを取らない自信があるが、この上司を前にした途端、すべての自信は無に帰す。

キライだ。

彼が？

いや、彼と一緒にいる自分が。

自分が自分でなくなってしまうのが怖い。

自分は、マリア・クラビス。

この国の大魔法使いの補佐官。

「うまい……」

無精髭を生やしたこの男の一言に、不覚にも泣きそうになっている自分がいる。

不意に視線がマリアの左手に注がれる。

「指輪、してくれないんだ？」

「ふん、あんな指輪がなんだというのだ。同じものをお前が飲み屋のお姉ちゃんに渡していたと、クロダが言っていた」

騙されないぞとマリアは横を向く。

「ち・が・う。指輪渡して飲み屋のお姉ちゃんを口説いていたのは、クロダ自身だ」

「あの……だって……」

マリアの顔が赤面する。

トーマが不敵な笑みを浮かべ、マリアの腰を引き寄せると、彼女の軍服のポケットの中を探る。

「あ……ちよつと。やめ……」

「みっけ」

そのポケットの中にプラチナの指輪をみつけると、彼女の華奢な指にそれを滑らせる。

トーマは指輪越しに、マリアの指に口付ける。

頭脳明晰、容姿端麗、無敵の美女騎士が不意に垣間見せる赤裸々な無防備さ。

マリアは大きくひとつ息を吐く。

「だめだ、応じられない」

指輪をはずすとそつとトーマの掌にそれを返す。
ぷーと子供のように唇を尖らすトーマの頬に一つ口付けをくれてやる。

「將軍家の娘を預かることにした」

トーマがマリアの透明な飴色の瞳を見つめる。

「……了解」

恋心

エアリスの亜麻色のふんわりとした髪が、風になびく。
つんと前を向き、なんでもないような顔をする。

ハヤトはそんなエアリスの横に並び、その顔を覗き込む。

「もう、なんですか？ ハヤト様」

少し怒ったようにハヤトを見つめている。

これが自分とエアリスとの距離。

手を伸ばせば届きそうで、でも届かない。

というか彼女が届かせない。

心に微妙な防御壁を作っちゃってる彼女。

まあ、それもひとえにこの僕が頼りないせいだ。

先ほど彼女が明かした出自。

それは自分にとっても、彼女にとっても決して軽いものではない。

僕は自分の不甲斐なさを思う。でもいつか……。

ハヤトは道の脇に積み上げられた煉瓦れんがのうえに飛び乗る。

ちやうどエアリスを見下ろす格好。

「エアリスさま、僕かならずいい男になります」

「いい、男ですか？」

エアリスがきょとんとした表情になる。

「あなたを守るだけの甲斐性のある男になります」

ハヤトはぴょんとエアリスの前に飛び降りる。

少しその前で胸をはってみせる。

「まあ、いったい何年かかることやら」

エアリスはそういつてふんわりと笑ってみせる。

「そんなあ」

踵を返しスタスタと前を歩く彼女の後姿を、ハヤトが見つめる。

オレンジ色の木漏れ日の向こう。

ほんのわずかに木々がざわめく。

ハヤトの瞳に剣呑な光が宿る。

「エアリス！」

そう叫ぶや、ハヤトがエアリスを横抱きにして、道を飛びのく。
地に着き刺さる、銀の矢。

「ほう、多少は腕が立つようだ」

そこに佇むのは、黒髪の男。

黒装束に金の龍の縫い取り。

背まで伸びる艶やかな髪を後ろでゆるく束ねている。

一瞬女かと見まごうほどに、美しい。

「いやいや、失敬」

やがて、表情を改め、その場でペタンと尻餅うやうやについているエアリスの前に跪くと、恭しくエアリスのてを取り、

「ご無礼をお許しください。玄武の姫巫女」

そう言って掌に口付けた。

「な・な・な…！」

隣でハヤトが憤怒の形相である。

玄武

「上杉様のお屋敷は間もなくですよ。ご案内します」

男は花がほころぶような笑みをこちらに向ける。

男を相手にこういう例えもどうかとは思うが『花の顔』かんばせとでもいうのだろうか。

ハヤトはその背でエアリスを庇う。

「あ、あのあなたは？」

「あつ俺ですか？　そうですね、上杉様の影とでもいうのですかねえ」

「いえ、べつにそんな込み入ったことをお聞きしたのではなく、お名前程度で結構です」

ふんわりとした微笑を浮かべ、エアリスが容赦なくぼつさりと切る。

「あつと、名前は紫龍しりゅうです」

「そうですか。わたくしはエアリス・シャル・オリビエそしてこちらにはハヤトですわ。隣国オリビエより戦渦を逃れて参りました。上杉様に我が国の將軍マサムネより書状を預かって参りましたので、お目通りをお願いいたしますわ」

エアリスは動じない。まっすぐに相手を見つめ微笑んだ。

「了解。ほら、あれがお屋敷だ」

紫龍が指さす方向に、純日本風の屋敷が見える。

門を見張る男が、紫龍に敬礼する。

「客人をお連れした。謙信さまにお目通りを」

通された純和風の広間に、初老の男が正座している。

穏やかで、しかしそこには犯しがたい静謐さが漂う。

本当の強者とはこういう男のことをいうのかもしれない。

「よく参られました。長旅でお疲れでしょう」

男は穏やかな笑みを浮かべ、エアリスとハヤトを迎え入れた。

差し出した書状に一通り目を通すと、じっとエアリスを見つめた。

「四神、玄武の封印について、書かれてあります」

エアリスが頷く。

「サリエリは四神を有するシバ、そしてわが国のオリビエへと進軍いたしました。そして四神のうちの朱雀と青龍の封印を解く事に成功しています。わが国有する白虎はなんとか死守したようですが、必ず遠からぬ日に、この北斗の国に進軍し玄武を欲することと思います」

「それほどまでのものかね？ 四神とは」

「無敵の軍事要塞と謳われたシバを三日で降伏させたところをみると、やはり侮れるものではないと思われます」

「うむ」

初老の男はしばし考え込む風情である。

「上杉様！」

慌しく斥候と思しき人物が目通りを願い出る。

「なんだ、騒々しい。客人の前で」

「サリエリ軍が進軍を開始しました！」

謙信は秀麗な眉目をわずかにしかめた。

「紫龍！ 客人を祠にご案内しろ。有事に備えて玄武を復活させよ」

「御意っ」

紫龍の顔にも苦渋の色が走る。

「祠はお屋敷からそんなに遠くはないんですよ」

エアリスとハヤトを案内する道すがら、紫龍は不意に口を開く。

「この土地にも玄武にまつわる言い伝えがあるのですよ。『災厄訪れしとき、異国より玄武の巫女現れし』ってね」

祠は洞窟の奥にある。

地に深く突き刺さった剣にエアリスがそっと触れると、やがてそれは鈍く光りだす。

「玄武神よ、どうか私たちに力をお貸してください」

その呼びかけに応えるかのように、剣はその輝きを増していく。一筋の青い閃光が地面を走り、やがてそれを中心に魔法陣が形成される。

「ハヤト、剣に呼ばれていますよ」

エアリスがハヤトを振り返る。

ハヤトが剣に歩みよると、天地を震わす雷鳴のような声がある場に響き渡る。

「汝、玄武に選ばれたる者よ。その宿命たる剣を引き抜け」

ハヤトは静かにその剣を引き抜いた。

永き眠りから目覚めた魔神がその姿を現す。

「ハヤト君、これを」

紫龍がハヤトにパイロットスーツを渡す。

「申し上げます！ただ今わが国の空域にて、サリエリ軍と交戦中！紫龍様にはすぐに戻って、戦闘の指揮をとるように、とのことですよ」

「わかった、すぐに行く！我が愛機『毘沙門天』の用意を！」

「はっ、すでに調整の上待機させてあります」

手早く着替えたハヤトの前にエアリスが歩みよる。

そのパイロットスーツの左腕に施されている刺繍は百合の紋章であった。

エアリスは感慨深げにそれを見つめた。

私は今、その影としての役割を終えたのだ。

自身の出自を知ったときから、私はずっとあなたたちを守りたいと思っていた。だけどその優しい眼差しにずっと守られてきたのは、本当は私のほうだったのかもしれない。

その眼差しはかわらないままに、あなたはいつの間にか私の背を超えていった。

幼馴染のあなたに身長を抜かされたときに感じた少しの悔しさと、

頼もしさを思う。

エアリスは魔神に目をやる。
だがその運命さだめの封印をといたのは私。そのことを私はいつか後悔しないだろうか。

「エアリス？」

ハヤトがきよとした顔をする。

「どうしたの？泣きそうな顔をしてる」

———気がつけば抱きついていていた。———

「ハヤト！目を閉じてください」

「は、はいっ」

ぎこちなく唇が重なる。

———気がつけば、キスしてた。———

「無事に帰ってこれるように……その、おまじない……ですから」
蚊の泣くように呟いて下を向く。

———仕方ないじゃありませんか。気がつけば、あなたのことが好きだったのですから———

黄昏の空に魔神が飛び立つ。それを見ながらエアリスはそう思った。

エアリスは愛機を調整中の紫龍に向き直る。

「紫龍さま、私にも機体をお貸し下さい。訓練は一通り受けておりますので」

アイ姫（前書き）

多少グロテスクかもしれませんが、苦手な方はご注意ください！

アイ姫

一体何年ぶりであろうか。

ランクスは暖かく、優しい微睡のなかに意識を委ね、ふとそう思った。

夢の中で彼女が自分に笑いかけている。

———あありサ、あなたはここにたんだ———
やわらかい蜂蜜色の髪が優しく風にそよぐ。

———ランクスさま———

彼女のなかのありったけの優しさを込めて名を呼ばれたとき、凍てついた心が溶かされていくのを感じた。

もともと母ラケルの乳兄弟であったリサは、母亡き後、後宮でその息子であるランクスの後見人として献身的に仕えたのだが、美しかったリサはやがて父オーリスの目に留まった。

リサはランクスを自身の子として、手元に置き育てることを条件にオーリスの妾となることを承諾した。

「ランクスさま、ラケル様の忘れ形見であるあなた様は、私が命に代えましてもお守りいたします」

そういつてリサは華奢な身体で、精一杯ランクスを抱きしめた。

やがてリサはオーリスによって身ごもった。

「私などが、ランクスさまのご兄妹を懐妊などと、もったいない話でございます」

少し顔を赤らめて恐縮するリサにランクスは抱きついた。

「ありがとう、リサ。ぼくすごくうれしい」

そういつてリサのお腹をさすった。

それは至極幸せな時間であった。

「なあ、シルビス。もうすぐリサに赤ちゃんが産まれるんだ」
息を弾ませ、守役のシルビスのもとにランクスが駆けってくる。

「ああ王子！ そんなに走るとまた転びますよ」

刹那、ランクスは木の根に足を取られ、豪快にすっ転ぶ。

「大丈夫ですか？」

そういつて差し伸べたシルビスの手をランクスは振り払い、自力で立ち上がる。

「大丈夫だ、このぐらい。ぼくはお兄ちゃんになるんだから。強くなってリサと生まれてくる赤ちゃんを守るんだ」

そういつてランクスは微笑んだ。

リサが臨月に入ったところ、剣の稽古を終えて後宮に戻ったランクスは、その惨劇を目の当たりにすることになる。

———ああ、なんと惨いことか———

噎せ返るような血の臭い。

部屋中に飛び散った血の跡。

「一体なにがあったんだ！ リサは無事か？」

———オーリス様がリサ様を切り殺し、その胎を持っていかれたのでございます———

少年はあらん限りの声を振り絞り、絶叫する。

この1年後、心を失った少年は、敵国であるオリビエに人質として送られることになる。

「王子、大丈夫ですか？」

少し霞んだ視界の先に、シルビスの顔が見える。

玉のような汗を布で拭いながら、シルビスが心配そうにランクスの顔を覗き込む。

「夢をみていた。俺のみる夢など、ろくなことがない」

自嘲するランクスのエメラルド色の瞳から涙が溢れると、シルビスはその反応に戸惑う。

———北斗へ進軍を開始せよ———

ランクスの意識が回復して間もなく、オーリスより使者が立てられ、そう告げた。

不思議と身体に痛みはなく、体調が良いのに驚いた。

「王子、良かった。アイ姫殿のお陰ですよ」

にこやかにシルビスが微笑んでいる。

「アイが助けてくれたのか」

ランクスは複雑な表情を浮かべる。

ランクス出兵の準備に城内が慌しくなるころ、アイがランクスの部屋を訪れた。

濃い緑のビロード生地ドレスに身を包み、緩くウェーブのかかった蜜色の髪が日に透けて、それはひどく儚げに見えた。

「具合はもう良いのか？」

「ああ、お陰でこの通り回復した」

心底ほっとしたように、アイが微笑む。

「そうか、良かった」

ランクスは顔を赤らめ横を向いた。

「……ありがとう」

なぜだか今そのことをアイに伝えなくては、と思った。

アイは一瞬きよとした顔をし、プツと噴出した。

「どうした、急に。兄上は本来そういうキャラではないだろう？」

「キャラ……キャラじゃなくても、言っていないだろ？ 本当にそう思っているんだから」

———自分を助けるために、異母妹は実の父と寝た———

そのことが、ランクスの心を苛む。

それを見透かしたように、アイはじっとランクスの瞳を見つめた。

「私が、父であるオーリスの妃となったのはあくまで私の事情だ。

兄上には関係ない」

リサの忘れ形見。

オーリスは生まれて間もない、リサの赤子の心臓を抉り出しそこに赤き神珠を埋め込んだ。

しかし血にまみれ、痙攣していたこの赤子は奇跡的に回復し、アイと名付けられた。

以後オーリスはアイを溺愛し、幼児の頃から寝室でその相手をさせた。

「だがお前にはもっと違う人生があったはずだ」

「その台詞、そっくりそのまま兄上にお返しする」

ランクスは返答に困る。

「運命には抗えない」

少女は寂しそうに微笑んだ。

「違う！ 俺は必ずお前を助け出す」

北斗への出兵を前にして、ランクスはオーリスへの謁見を願い出た。

サリエリの黒い軍服に身を包み、その戦の最高司令官である証しである青龍の紋章のはいた白いマントがひるがえる。

ランクスはオーリスの前に進み出で、恭しくうやうや臣下の礼をとる。

「ランクスよ、此度の戦には、その命を賭けよ」

「御意」

ランクスは静かに頷いた。

もはや自分の命など、惜しくはない。

それを見透かしたのか、オーリスは少し目を細める。

「いや、そなたの命だけでは足りぬな」

オーリスは玉座の脇に控えるアイをその前に立たせる。

「此度の戦で、玄武の奪取成らざるときは……」

———そなたの異母妹、アイの命を奪う———

序

——運命とは、何をもってしても抗えぬものであるのか——

北へと向かう飛空艇のなかで、シルビスはふとその横で深く瞳を閉じる主を盗み見た。

「なんだ？ 言いたいことがあるならはっきりと言え」

狸寝入りの主は、ちらりとエメラルド色の眼差しをこちらに向ける。

「少し、冷えますゆえ、上着をお召しになってください」

シルビスはランクスに自身の上着を着せ掛けた。

——滅びの予言に記された悲しみの子——

その定めを覆すことができるなら、この命など惜しくはないものを、と密かにシルビスは思う。

北への進軍を前に、シルビスは密かにランクスの異母妹であり、サリエリ国王の妃であるアイより密かに手渡されたものがあつた。

『勿忘草わすれなぐさを調合しておいた。すべての事が終わったらこれを使いランクスの記憶から私のことを消去しろ』

——この戦は負ける、私は必ず死ぬであろう——
シルビスは深くため息をついた。

「外にでるぞ、シルビス」

「王子、お待ち下さい」

踵を返すランクスを、シルビスが追いかける。

刹那、度のきついメガネをかけた、風体のぱつとしない下級の女兵とぶつかる。

「っ痛、気をつけろ！」

「ああああ、申し訳ないですだ。おらド近眼で前のものがあまりよく見えていないですだ」

女兵はその場にひれ伏して詫びる。

「もうよい、立て」

シルビスは舌打ちして、その場にひれ伏した女兵士に手を差し伸べる。

シルビスの絹糸のような銀の髪が肩に流れ、それに隠れるようにプラチナの十字架のネックレスがわずかに覗く。

「あわわ……ありがとうございますだ」

女は面食らったように、気後れている様子を取り繕い、その場を立ち去るシルビスの背を見つめる双眸を微かに細める。

「み〜つけた」

エアリス脱走

「紫龍さま、私にも機体をお貸し下さい。訓練は一通り受けておりますので」

紫龍は口をへの字に曲げる。

「それはさすがにできませんよ。エアリス殿は同盟国といっても他国の要人なわけですし、外交上に問題をきたしますので」

エアリスが頬をぷうっと膨らませる。

「なぜですか？ ハヤトは玄武を駆って出撃したでは、ありませんか！」

「ハヤトに関しては、ちゃんとマサムネ殿から書状をいただいております。おい、姫をシェルターにお連れしろ！」

脇に控える兵士がエアリスの腕を掴む。

「離しなさい！無礼者」

オリビエを出されたときの記憶がフィードバックし、エアリスは唇を噛み締める。

皆が私を守ろうとする。

でも、もう守られるばかりは嫌なのだ。

私にも守りたいものがある。

刹那、エアリスは兵士の手を振り払い駆け出す。

「ああもう！」

紫龍は苛立ったように頭を掻き毟る。

「もういい、とにかく俺は出撃する。四道^{しどう}、死んでも姫をお護りし

ろ、いいな!」

脇に控える無精髭の垂れ目の男にそう命じ、紫龍は愛機を駆って空へと飛び立つ。

「やれやれ」

四道は懷から煙草を一服取り出し、火をつけた。

白い煙が風に煽られ、コバルトの空へとゆっくりとたなびいていく。

黄昏が終わりを告げようとしている。

四道の細めた視線の先には無数の戦闘機が展開している。

「さあて、嬢ちゃん。とっとと出てこねえと危ねえべ? あんまり

手間かけさせるな」

よっころしよっと大仰に身体を起こすと、軽く瞳を閉じ意識を集中し始める。

「捕らえた」

エアリスが息急き切って、工業区を抜ける残像が脳裏に浮かぶ。

「さて、さて嬢ちゃん。そこは……やばいって」

四道はその場所を目指して走り出した。

第八部隊

人気のない格納庫の脇まで走りぬけ、エアリスは大きく息をついた。

額には玉の汗が吹き出る。

「体中……心臓になったみたい」

ルリアほどではないにしろ、軍事訓練も一通りは受けている。それなりに、やれる自信がエアリスにはあった。

格納庫から、小さな明かりがこぼれている。

その隙間から、こっそりと中を伺う。

人相のあまりよくない薄汚れた男たちが酩酊にふけり、賭け事に興じている。

エアリスの頭にかつと血が上る。

「自国が侵略を受けているときに、なんですかその様は！」

思わず怒鳴りつけてしまってから、エアリスは口を押さえた。

一瞬の静寂の後、男たちの好奇の視線を一身に浴び、エアリスの心臓は凍りつく。

——さあて、どのタイミングで助けを出すか——

木陰に身を隠し、四道は無精髭を触りながら思案する。

「綺麗な服着てお気楽なもんだぜ、女ってのは」

「どうせなんにもできねえんなら、へらへら笑って酌でもしてろっての」

男たちの冷笑を浴び、エアリスの中でなにか『カチン』という音とともにスイッチがはいった。

背後に並ぶのは、今ではもう旧型になってしまっているオンボロなG3型戦闘機。

「それでも無いよりはマシよね」

そう呟いて、エアリスはきつと男たちを睨みつけた。

「ねえ、あなたたち随分と女を馬鹿にしてくれたわね。だったら私と勝負なさいよ。あなたたちが勝ったら、酌でもなんでもしてあげる。私が勝ったらあの機体を貰うわ」

エアリスがG3型戦闘機を指差す。

「かまわねえぜ、じゃあ飲み比べだ」

円座の中心にいるリーダー格の小太りの男が、エアリスの前に一升瓶をどかっと置いた。

———負けられない。負けてたまるものですか!———

エアリスは男から一升瓶をひったくると、一気に飲み干した。

「ぶはっ」

そのまま一升瓶を隣にいた男の頭へと勢い良く振り下ろす。

甲高い音とともに一升瓶は砕け散り、男は額から血を流し白目を剥いている。

その場の空気が凍てつく。

「ああん? おめくら何見てやがる」

エアリスの鉄拳が次々と男たちを沈黙させてゆく。

木陰で一部始終を見ていた四道が、軽くこめかみを押さえる。

——紫龍^{わか}、あの酒乱姫をこの俺にいったいどうしろと？——

「これで全部か？ 文句ある奴あいねーな？」

エアリスが千鳥足でG3戦闘機に向かう。

「ちっ、そんな時代遅れのオンボロ戦闘機で何ができるっていうんだ。わざわざ出て行って敵の的になりたいのかよ」

リーダー格の小太りの男が吐き捨てるようにそういった。

「ああん？ なんだとお」

エアリスがゆらりと男に近づく。

「俺たちは落ちこぼれの第八部隊だ。機体だってオンボロの旧型で、いわばこの国の捨石だ。そんな風にしか扱ってもらえない俺たちが、なんで命をかけてこの国を守らなきゃなんねーんだ！」

エアリスが男の金玉を蹴り上げる。

「○×△？！！！」

「飛べねえ豚は、ただの豚だ。すっ転んどろ」

エアリスが戦闘機に向かう。

「捨石でもなんでも、命がけで今戦わなければ大切な人を守れねーじゃねえか。国のために戦うんじゃない。大切な人を守りたいだけだ」

そういつてエアリスが戦闘機に乗り込もうとする。

——やばい、かっこいいこと言ってるけど、思いつきり単なる飲酒運転じゃねーか——

さすがに四道がエアリスの襟首を引つつかむ。

「なんだ？ お前。邪魔すんのか？ ああん？」

———どこの世界に、こんだけガラの悪い皇女がおるんだ———
四道は心のなかでつつこむ。

「おい、エアリス、お前戦闘機をナメんなよ。乗りたきゃお前は後部だ」

「ちっ、しゃーねーな」

ヘルメットを着用しエアリスが大人しく後部座席に座る。

「四道様」

男どもが起き上がり、四道に敬礼する。

「へえ、お前ら。ちったあ、いい顔になったじゃねえか」

「へへ、やめてくださいよ。四道様も人が悪い」

「よっしゃ、それじゃあ行くか。サリエリの馬鹿をしばきに行く！

志のあるものは続け！」

「俺も行くぜ！」

「俺も。金蹴りの姉ちゃんに負けてらんねえもんな」

冷めていた男たちの士気が上がる。

四道の機体が盛大なエンジン音を上げ夜空に飛び立つ。
急速に加速する重力。

四道の脳裏に嫌な予感が過ぎる。

「お……おえええ」

「やっぱり……」

——いやっこんな逃げ場のない密室でそれだけはやめてええ——

四道の悲鳴が夜空にむなしく響き渡る。

エリーザベト

赤く血塗られた唇が嗤う。

——あなたはまるでタンホイザーのようね。淫らな女神ヴェヌスに魅せられて快樂を貪る罪人——

「アン・ジャネット、ここで何をしておる？ここから先は下級兵のお前さんは立ち入り禁止だぞ！」

恰幅のよいサリエリの上等兵がやんわりと嗜めると、あまり風体のぱっとしない下級の女兵士が振り返る。

「ああああ、すいませんですだ。オラ、まだこの船さ、慣れてなくて」

「そうか、だが気をつけろ。この先は総司令官ランクス・クリフォード様の居室になる」

ランクス・クリフォード、その名を小さく呟いて、アン・ジャネットは下を向く。
嫌い。

その漆黒の髪も、憂いを帯びたエメラルドの瞳もなにもかも！
アン・ジャネットの指先が小刻みに震える。

似ているのよ、あまりにも。

私からあの人を奪った女——ラケル

「あ、どうした？ アン気分でも……」

上官が最後まで言葉を紡ぐことはなかった。

アン・ジャネットの右手が、正確にその上等兵の心臓を貫いていたからだ。

彼女は先ほどのまでの風体のあがらない下級兵士ではなかった。

返り血を浴びた彼女はどこまでも冷たく、気高く、崇高であった。

——そう、私も祈りを捧げるわ。タンホイザーの心を取り戻すために祈り続けたエリーザベトのように——

甲板で空を眺めるランクスをシルビスが自らの背で庇う。

「王子、お下がりで下さい、私の張った結界に、何者かが侵入いたしました」

ブーツの靴音がゆっくりとこちらに近づいてくる。

刹那、ナイフがランクスを目掛けて投げつけられる。

「何者！」

シルビスが難なくそれを指で挟んで受け止める。

視界に彼女の姿を認め、少し驚きを見せる。

「お前は、先ほどの……」

そんなシルビスに彼女は少し寂しそうな表情を見せる。

「なにもかも、忘れてしまったのね。ルシファ」

「なにを言って……私はシルビス、シルビス・ライアンだ」

「違う！ あなたはルシファ、誇り高き悪魔王ルシファなの……！」

女の顔が醜悪に歪み、シルビスに切りかかる。

「なっ、お前は一体」

「おのれ、許しはせぬぞ！ ラケル……！」

狂気をおび、もはや正気を失ったアンがシルビスに死に者狂いで切りかかる。

じりじりと間合いを詰められ、シルビスはその場でバランスを崩し尻餅をついた。

刹那、彼女のサーベルが、シルビスの首に飾られていたプラチナ

の十字架のネックレスを引きちぎった。

特有の甲高い音を立て、プラチナの十字架が甲板に落ちると、間髪をあけずアンがそれを踏みにじる。

「ラ…ケ…ル」

シルビスの乾いた唇が、その名を紡ぐ。

「あ…：あああああああああ…！！！」

迫り来る記憶のうねりに飲み込まれ、しばしの間シルビスは意識を失いその場に倒れ付した。

ランクスが女を睨みつける。

「お前は一体何者だ？」

「私かい？ 私はエリーザベトだよ。愛する男をお前の母親ラケルに奪われた、悲しきエリーザベトだ」

蛇

「タンホイザーにその純真な愛を貰いた、エリーザベトに自身を例えるなど、厚かましいにもほどがあるな。貴様は」

ランクスが腰に薙いだ青龍の剣を鞘から抜き、構える。

「ああ、憎らしや、ラケルの息子、呪われしサリエリの王子」

女は瞳から、血の涙を流しすすり泣き、やがて狂ったように囁い出した。

「その目でしかと見るが良い。これが我の真実の姿」

女はその姿を変える。

白磁の裸体には蜜色の髪が惜しげもなく流れ、夢見るような眼差しの美女が佇む。

足首に、局部に大蛇を纏い、うっとりそこちらを見つめる。

「我が名はリリス、悪魔王ルシファの妻として定められたもの」

次の瞬間なんともいえない臭気が、あたりを漂いランクスは思わず手で口元を覆った。

目の前に佇む女の形相が変わる。頬は腐れ落ち、もはや人の原型をとどめていない。

「目を背けるでない、これが堕ちた悪魔の成れの果てだ」

醜悪な、まるで爬虫類のような顔をこちらに向ける。

女は苦しそうに肩で息をしながら、ランクスを睨みつけた。

「ああ、憎らしや。その眼差し、面影。殺してもなお憎い、あの女と重なる」

ランクスが間合いをつめ、一気に切りかかる。

女は爬虫類の鱗のような左腕で、難なくそれをかわす。

刹那、女の口から漏れた吐息に、ランクスは身体の不自由を奪われる。

「なっ」

「さあ、苦痛に満ちた眼差しで私に許しを請うがよい」

鳩尾に強烈な拳を喰らい、ランクスは甲板に叩き付けられる。

込み上げる吐き気を懸命に堪えながら、ランクスは女を睨みつける。

「気に入らないねえ、やっぱりお前は気に入らない」

頬に、横腹に、後頭部に、次々と強烈な痛みが走る。

ひとしきりの苦痛を与えた後で、不意に女がその手をとめた。

「どうした、もう終わりか？　ならさっさと殺せ、蛇女」

どこか虚ろな眼差しを女に向ける。

やがて女は狂ったように笑い出す。

「ひっひっひ、お前をこの場で殺すことなどせぬよ、お前には生きながら地獄をみせてやる」

———お前は最愛の女の手にかかり、死ぬことになる———

シルビス

「ランクス様、お怪我はありませぬか！」

異変を聞きつけた近衛兵が、その場に駆けつけるころには、リリスはもう姿を消していた。

「私に大事はない。シルビスをはやく寝台に運べ」

医者と呼ぶことを提案した近衛兵に、ランクスは人払いを命じた。
「仰々しいことをシルビスは好まぬ、外傷もないゆえ、このままが良い。気がつくまで私が看ている」

寝台に横たわる男を、ランクスがじっと見つめる。

「悪魔王、ルシファ……か」

そういわれても素直に信じてしまえるほどに、その容姿は美しい。
ランクスはそつと懷にしまった十字架のネックレスを取り出し、そつとシルビスに握らせた。

「大切なものののだろうか？シルビス。お前が悪魔だろうが、天使だろうが、俺にはそんなもの関係ない。

お前はお前だ。お前だけが私にとって唯一の友であり兄のだから」

迫り来る記憶のうねりの中で、シルビスは眉をよせた。

記憶の中でも、これは最も不快この上ない部類に入るであろう。

それはまだ、自分が天上界というところにいたときの記憶。

真っ白な亜麻布を身に纏った紅顔の少年が、はちきれんばかりの笑顔を振りまき、俺のもとにかけて来る。

「ルシファ！」

天上界の最高権力者『神』のバカ息子である。

俺は悪魔という生き物だったんだけど、なぜだかこのバカ息子とは気が合った。

しかしあるとき、このバカ息子が俺にこう言った。

「ねえ、ルシファ。僕はね人間の世界に行ってみようと思うんだ」

「ああん？またいつものお忍びか？」

付き合わされる俺の身にもなってみろよ、と少し気だるさを装ってみる。

「違うよ。僕はね、人間として人間界に行ってみたいんだ」

俺は顔色を変えて飛び起きた。

コイツは一体なにを言い出すんだ。心臓に悪いったらありゃしない。

「ば、ばか何言ってるんだ！ お前は仮にも『神』様の一人息子なんだぞ！ この天上界で一番偉い奴の跡取りなんだぞ！ わかっているのか？」

「うん、わかってるよ」

「じゃあ、なんでそのお偉いさんが、わざわざ人間になって下界なんぞに行かなきゃならんのだ？ それにお前が思ってるほど人間って奴はきれいな生き物じゃねえ、きつとひどい目に遭わされる」

俺は腕を組んでふんと鼻息を荒くする。

「うん、きつと君の言うとおりでと思う。でも僕は行くよ」

「なんでだよ、なんでわざわざそんな嫌な目に遭いに行くんだよ」

「それは僕が『神』だからだよ。人間界ではたくさんの人が苦しんでいる。でも、僕がこの天上界でのほほんと生活していたら、本当の意味でその人たちのことを理解したことにはならないんだ」

「つうかさあ、お前『神』なんだから、ちょいちょいと人間界を変えてやればいいじゃんよ。何不自由ないこの天上界みたいにさ」

だけどアイツは静かに首を横に振った。

「ううん。それじゃ駄目なんだ。僕はね人間を愛したいんだ。愛するっていうのはね、いいことも悪いことも、一緒に乗り越えてこそ輝くものなんだよ」

そういつて、アイツは俺の必死の説得にも応じず、人間界へと降り立った。

星のきれいな夜だった。

神の子である身分を捨て、あいつはみすばらしく馬小屋なんぞで産声を上げた。その後、アイツは時の皇帝に殺されかけたり、大工の倅として貧乏を極めてみたりとすごい辛酸を舐めて生活していたっけなあ。

そしてあいつが30歳になったとき、俺たちは再会することになる。

アイツが公生涯ってのに入る前、その準備として荒野で40日間断食するっていう苦行をしていたのだが、その直後に俺はアイツに会った。

やつれ果てたアイツの姿に、俺は思わず涙してしまった。

「やあ、久しぶりだね。ルシファ」

「お前、もういいかげんにしろ！　こんなこと。こんなことしたって、いいこと一つもないじゃんよ。な？　とりあえず食べろ！　お前ならそこに転がってる石ころをパンに変えることくらいすぐできるだろ？　なんなら、俺がやってやろうか？」

「心配してくれてありがとう。でも僕は平気だよ。

人はパンだけで生きるんじゃないかって、神の口から出る一つ一つの言葉で生きるんだ」

俺は頭を抱えた。

キレイ事いってる場合か！　死ぬぞ！！　　っていうか、悪魔である俺にはコイツの未来がはっきりと見えた。

コイツは命を賭けてコイツが愛した人間たちに裏切られ、罵られ、十字架にかけられて死ぬ。

そんなのは嫌だった。

そんな悲しい運命をコイツに背負わせたくなかった。
今すぐに天上界にアイツを連れて帰り、苦しみや悲しみから守ってやりたかった。

「ああ、もういい、じゃあ手っ取り早く天使を呼び出そう。な、お前ここから飛び降りろ」

俺は、アイツを聖なる都の神殿の屋根の上に立たせた。

「お前がここから飛び降りたら、お前に仕えるおびたしい天使軍団がお前を、お前の足が石に打ちあたらないように、助けにあらわれるだろう？　そんで一緒に天上界に帰ろう」

「ううん。僕は飛び降りないよ。神を試すことはできない」

俺は頭を掻き毟る。

「ああもう、だったらいいよ。天上界でなくてもこの世界で俺がお前を守る！　だけど俺はお前の親父さんに権限を与えられてねえ。だから頼むから一言俺を拝むと言ってくれ！　そしたら、俺はこの世界の全ての繁栄をお前に与えてやれる」

「ごめんね。それもできないんだ。僕は神以外拝むことも、仕えることもしない」

「ああもう！　お前このままだとなあ！」

「うん、知ってる。僕が神の仔羊と呼ばれていたのはそのためなんだもん」

後は声にならなかった。泣きながらただアイツにしがみついていた。

ひとしきり泣いてそれから俺たちはさよならの挨拶をかわした。

その後、アイツは公の生涯に入った。

弟子をとり、神の国の奥義とやらを伝え歩き、最後は愛する者に裏切られ、十字架の上で死んだ。それは救いようなない無残な死だった。

それから俺は人間を憎んだ。憎んで憎んで、気がついたら3000年のときが流れてた。

ラケル

人を憎めば、当然人からも憎まれ、終わることのない負の連鎖の戦いのなかで、いつしか身体も心も疲れ果てていた。魔を狩る一族に深手を負わされ、あるとき俺は祭司の治める『逃れの街』に逃げ込んだ。人気のない洞窟に身を潜め、力尽きた。

目覚めると、冷たいだけのその洞窟には火がくべられ、俺の傷口には真新しい布が巻かれてあった。

なにやら気配がする。

「誰だ！」

鋭く叫んで振り返ると、少女が手に持っていた水差しを落とした。

「びっくりした」

濡れるような黒髪を後ろでゆるく束ね、白い亜麻布で織られた祭司の衣服に身を包み、額に結わえられた金の鈴が軽やかな音を立てる。

「よりによって祭司かよ。いけ好かねえ」

俺はそういつて横を向いた。

彼女はそんな俺の様子など、気にする風でもなく無邪気に笑いかける。

「まあ、そういわず、あんたとにかく何かたべないと」

そういつて彼女は俺に木製の器にはいったスープを差し出す。

「うまい……」

そう呟くと、彼女の顔が輝いた。

「良かった」

「その……人間ってのは、もっと冷酷な生き物かと思っていた。あんたみたいなのもいるんだな」

そういうと彼女が少し考え込む様子。

「そりゃあ、一概に人間といっても色んな人間がいるわ。でも誰一人同じ人間ていないのよ。それってすごいと思わない？」

「すごいっつか、なんっつか、でもろくでもねーな」

「まあね。人間はあんたたちみたいな天上界の人と違って、とっても不完全な生き物なのよ。完全な悪人もいないし、完全な善人もいないわ。弱さのゆえに自分と異なるものを排除したり攻撃したりしてしまうこともある。」

でも神様は人間に弱さというものをわざと与えられたんじゃないかなって、あたしは思うの。その弱さがあるから、人は神という存在を必要とするんじゃないかしら」

あんたはここでしばらく養生するといい。

そういつてくれた彼女の好意に甘えることにした。

彼女と過ごす日々は、暖かく幸せだった。

やがてこの平穏な街も、赤き王族と青き王族との戦火に巻き込まれることになる。

長い間中立を保ってきたこの国に、サリエリが進軍したのである。街は焼かれ、祭司の一族は皆捕虜として捕らえられた。

——また俺の大切なものが、人の手によって奪われ、踏みにじられる——

ラケルの姿がアイツと重なった。

「おいラケル！俺はお前を助けたい。頼む俺を拜むと一言いってくれ、そうすれば俺はお前を助けてやれる」

——ただ、助けたかったんだ——

彼女は静かに首を横に振った。

「あたしは祭司なの。だから神だけに仕えるわ」

そういつて、彼女はサリエリに引いていかれた。

諦めきれなかった俺は天上界に戻り、今では栄光の姿に変えられ神として君臨するアイツに謁見した。

「駄目だ、ルシファ。人でない者の人間界への関与は認められない。君がもしどうしても彼女を助けたいと願うなら、悪魔であることも、ルシファであることも全て捨てなくてはならない」

「それでもいい、俺はラケルを助けない」

「わかった。なら、この契約の聖十字架セインタクロスに君の力と記憶を封印する」

「待て、記憶と力が封印されちまったら、どうやって俺はラケルを守るんだよ」

「大丈夫、運命が必ず君たちをめぐり合わせる」

サリエリ国王オーリスの目に留まり、その妃として迎えられたラケルの離宮の前で、赤子が籠に入れられ、捨てられていた。

その小さな手には、プラチナの十字架がしっかりと握られていた。

接吻

乱気流に吞まれ、船体が大きく揺れた。
シルビスの双眸ゆっくりと開く。

幼き頃、俺を抱き上げてくれた優しい手。

「ラケル……」

霞がかかった視界がやがてクリアになり、それがラケルでなくランクスであることが分かる。

「目が覚めたか、シルビス。今水を……」

そういつて立ち上がるとうとしたランクスをシルビスが抱きしめる。
まだ大人になりきっていない、少年特有の華奢な体躯。

「なに？ どうしたシルビス」

少し意外そうにランクスがシルビスを見つめる。

低く耳に落ちる美声。

「王子、よくお聞きください。私は悪魔なのです」

不意に手首を掴まれ、ランクスは寝台に組み敷かれる。

冷たい銀灰の双眸が、ランクスを見つめると、シルビスの額に難解な文字の羅列が浮かび上がる。

ランクスは不快そうに眉を寄せる。

「なんの真似だ、シルビス」

「王子、私と契約を交わしませんか？ 私はあなたにこの世界を捧げましょう。しかしその代償として……」

交わされたのは濃厚な接吻。

———私は あなたを愛しています———

説得

「なんの真似だと聞いている、シルビス」

ランクスは、シルビスから身を離し、唇を拭う。

「お前が愛したのは、俺ではなく母なんだろう？」

どうにもならないやるせなさが募る。

シルビスはぼんやりとした視線を彷徨わせる。

ランクスがその頬を殴りつけると唇の端が切れて、鮮血が伝う。

ランクスはハンカチを取り出し、シルビスに渡す。

「幻影ではなく、ちゃんと俺を見てろ」

刹那、爆撃音とともに船体が大きく揺れる。

———ホモはいけませんわ！———

エアリスの乗った戦闘機が飛空艇に突っ込むと、それに続き、第八部隊が甲板に鉄の雨を降らす。乱気流に吞まれ、敵の主艦の計器に一瞬の狂いが生じたその隙を突いた作戦だった。

「四道様、もっと近づけて！」

「無茶いうな、これでも精一杯」

四道が歯を食いしばる。

エアリスはコクピットを開き、悲痛に叫んだ。

「ランクス！」

「バカ！ 何やってんだ、危ねえだろ」

熱風は頬を撫で、肺を焼く。

四道の制止もエアリスの耳には入らなかった。

「ランクス・クリフォード！ オリビエ皇女エアリス・シャル・オリビエとして申します。」

どうか、このような無益な争いを止め、軍をお引きください」

硝煙越しに静かに佇むランクスの微笑が、かつてのそれと重なった。かつて無邪気に遊んだ幼馴染。

「ランクス！」

狂おしかった。

「どうして、私たちが争わねばならぬのです！」
涙が熱い、熱くて苦い。

もうこんなのはたくさんだ。

「ランクス！ 共に――」

エアリスは機体から精一杯身を乗り出し、ランクスにその手を差し出した。

「お願いよ、ランクス。後生だから」

不意をつかれて混乱状態であったサリエリ軍が体制を立て直し、反撃に転じようとしている。

迎撃のミサイルが、第八部隊を襲う。

四道は小さく舌打ちし、高度を上げて攻撃をかわそうとするが、機体の左翼が被弾し黒い煙を上げている。

「突っ込むぞ！ 舌を噛むなよ、エアリス」

町並みは途切れ、眼下には深淵の海が臨む。

エアリスは目を閉じ、必死で歯を食いしばった。

手のひらの温度

機体を洗う波の音で、エアリスは目を覚ました。
四道が無言でバカになった無線をいじっている。

「き……さまと、おれ……と……は……同期の……桜」

エアリスの渴いた唇が、途切れ途切れにその歌を紡ぐ。

「大丈夫か？ エアリス。えらく古めかしい歌を知ってるじゃねえか」

その続きを受けて、四道が鼻歌を歌いだす。

貴様と俺とは同期の桜 同じ兵学校の庭に咲く
咲いた花なら散るのは覚悟 みごと散りましょ国のため

貴様と俺とは同期の桜 同じ兵学校の庭に咲く
血肉分けたる仲ではないが なぜか気が合うて別れられぬ

エアリスの目裏に愛する人々の面影が浮かび、やがて涙で霞む。
「はるかな時代を超えても、人を慈しむ心に変わりはありませんね。
まして大切な友を戦場で失うなど、私には耐えられそうにありません」

万が一の奇跡を信じたランクスの説得は失敗に終わり、結果的に
第八部隊の皆を命の危険にさらすことになってしまった。

エアリスは唇を噛み締める。

四道のごつい手がガシガシとエアリスの頭を撫でる。

「は……反則です。こういうときに優しくしないで……ください」
エアリスは子供のように泣きじゃくった。

四道がそれをあやすように優しく背をぽんぽんとたたく。

「お前は……よくやったんじゃないの？」

四道は照れ隠しにそっぽを向いてぶっきらぼうにそういった。

「あ、あなた、私のことをアホだと思っているでしょう」

エアリスは泣きながら恨みがましい目で四道をみつめる。

四道はポリポリと頬を掻きながら素直にそれを認めた。

「まあ、アホだわなあ」

四道がポツリと呟く。

「ひどっ……」

エアリスは頬を膨らます。

「だけどみんなそんなお前が……」

——嫌いじゃないんだぜ——

被弾はあったが、意外にも第八部隊に死者は出ず、今は浜に上陸し手際よく怪我人の手当てに当たっている。

「うわーん！」

エアリスは大泣きし、四道の背中に盛大に涙と鼻水をなすりつける。

「うわっ、こらやめろ。きたねえな」

「ちよっと、四道の旦那、あれはひよっとして友軍の発煙信号じゃないですかい？」

深遠海のはるか先に、かすかに船舶の明かりが見えた。

初陣

玄武のコクピット内でエアリスと第八部隊が無事に救助された知らせを受け、ハヤトはほっと安堵のため息をついた。眼下ではすでにおびただしい戦闘機と人型機動兵機が陣形を整えつつあった。早まる鼓動とともにきつく握り締めたハヤトの拳にじんわりと汗が滲む。

目を閉じて思い出すのは、花咲く離宮で無邪気に遊んだかつての友――――

はにかんだようなランクスの笑顔が脳裏を過ぎる。
一途にルリアを思い続ける純真な眼差しが好きだった。

ハヤトはふと玄武の剣に触れる。

その剣は機体を動かすための鍵の役割もはたしており、コクピットの操縦席の上にある神棚にそれを安置してはじめて機体が機動する仕組みになっている。刃こぼれひとつない名刀。しかしいささか今の自分にはその剣は冷たく重く感じられた。

神は、お互いを争わせるためにこの剣を僕たちに与えられたのだろうか。

なぜだかそうじゃないような気がした。

剣が鈍く輝き、ハヤトの意識に直接語りかける。

―――剣は、己が宿生を切り開くために与えられたもの――――

―――剣は、呪いを解くための鍵――――

―――剣は、その宿生を歩む標なり――――

「玄武の剣よ、教えてください。宿生とは」

ハヤトが問う。

しかし剣はその輝きを失い沈黙する。

「宿生とは、自身でそれを見つけなければならないのですね」
ハヤトは剣を神棚に安置した。

「来るぞ！」

紫龍の鋭い一声のあと、遠方の空に敵の機影が垣間見えた。
耳を劈くような爆発音とともに硝煙が立ち上る。

敵の攻撃とそれを迎撃するミサイルの応酬。

屠られてゆく友軍の機体。

叫び、怒号、いろんなものが押し寄せてくる。

刹那、耳鳴りがして他の音が一切消えた。

静寂の闇の中、ただ聞こえるのは自身の脈打つ鼓動のみ。

ハヤトは無我夢中で機体を駆った。

玄武を取り囲む敵軍の機体のインカムをビームライフルが的確に
射抜く。

制御困難となった機体が戦場を離れていく。

ハヤトは隊長機であるランクスの青龍を目指し、突っ込んだ。

月光を浴び青白く輝くボディーが、玄武を認め静かに長刀を構える。

闇の黙示録

———血に染まる満月と主の接吻。これで要件はそろったんじゃない？ 仔羊よ———

シルビスの銀の髪が夜風に吹かれ、優雅に靡いている。

背に白い大きな翼が生え出でる様は、あまりにも人間離れしているが、それさえも戦慄を覚えるほどに美しい。

欠けるところのない満月に照らされた戦場。

やがて月は流された血に染まるように、色を変えた。

眼下に広がる凄惨な光景を見つめ、シルビスは天を仰ぐ。

———なあ、仔羊よ。もういいかげん、ここらで終わりにしてもいいんじゃないか？ ———

お前が愛した人という生物にはてんで進歩がねえ。はるか古の昔から同じことの繰り返しだ。神の一人子であるお前の命をもつてしても悔い改めることをせず、3000年後の今もこうしてドンパチやっってるってわけだ。

「俺りゃあ、もう些か疲れたよ」

シルビスの額に文字が浮かび上がり、身体を銀の粒子が纏う。何事かを呟くと、その手に巻物が出現した。

———第5の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると私は一つの星が天から落ちるのを見た。その星には底知れぬ穴を開く鍵が与えられた———

「なあ、仔羊よ。俺はこのときのために神によってつくられた。だ

からもう全てを終わりにするから」

シルビスの指先が巻物を縛める封印の糸に触れると、ちりりとそれは熱に焼ききれた。

巻物を開き、何事かを唱えるところに巨大な五母星が出現する。

「目覚めよ暗黒騎士、死の門を司る魔神ハデスよ！」

やがて地底から禍々しいオーラを纏い、巨大な人型機動兵器が出現した。

「これで全てが終わる」

シルビスが不敵に笑いコクピットに乗り込んだ。

装束

とりあえず友軍に救助されたエアリスと第八部隊は、北斗の主艦「千手」に移された。

「エアリス殿！」

紫龍はエアリスの有様を見て大仰にため息をついた。

「無事だったから良かったようなものの……」

そして言葉を失う。

ばら色の頬は煤で汚れ、もとは上等のシルクの服はあちこち焼け焦げて破れている。おまけに海水でべとべとになり、見るも無残な有様であった。

「とりあえず司令官室のバスルームをお使いください」

御影という女の兵士がにつこりとエアリスに笑いかける。

しかしまあ、とりあえずこの状況下でシャワーを浴びれることにエアリスは感謝した。

「着替え、こちらに置いておきますね」

シャワーを浴び終えた、エアリスは絶句する。

「———なんですかこれは！ひょっとしてこれは今流行りのコスチュームプレイ———」

トランス

「違いますって。これは玄武の巫女の装束です。この装束を纏い戦の勝利を神に祈禱していただきたいのです。まあ一種の験担ぎみたいなものなんです。が、玄武の巫女がともに戦ってくださいと戦闘の士気もあがりますもので」

「はあ、そんなものなのでしょうか」

御影が器用にエアリスに装束を着付けてゆく。

不思議と心が落ち着いて、今までぐちゃぐちゃだった思考がクリアになった。

「あの私、祈祷の作法とかにも知らなくて」

「精神を統一して、そして念じてください」

船室に設けられた、浄室には青い薄布の帳がかけられ、その中央に神棚が設けられている。

エアリスはその中央に座し、意識を集中しはじめる。

禍々しい魔神に乗り込む、銀の髪の美しい悪魔。

屠られてゆく、友軍。

赤く染まる月。

「やめて！ もう耐えられない」

エアリスが叫ぶと、神棚の水差しが甲高い音を立てて割れた。

脇に控えていた御影が、じっとエアリスを見つめる。

「なにをご覧になったのですか？」

「魔神。かつてない強力な力が目覚めて、貴国は甚大な被害を被る」

対峙

コクピットの中で、ハヤトは息を呑んだ。

血に染まる月に照らされた群青のボディーが、自分に刃を向けている。

「うおおおおお」

血に飢えた獣に対峙したような戦慄が全身を貫き、ハヤトは必死でバーニアを吹かし、青龍に突っ込んだ。

激しく切り結び、火花が散る。

「軍を引け、ハヤト！ これ以上の犠牲を出したくは無い」

通信機を通じて、かつての友の声が聞こえる。

「ばかな！ そっちがいきなり侵略しておいて今更！」

ハヤトの全身が怒りに熱くなる。

ランクス、お前たちサリエリが母国のオリビエに何をした？ それで今もまた罪なき北斗の民を戦火で焼こうとしている。

「ハヤト頼む。この戦いがサリエリの侵略戦争だということは重々承知している。俺はその責めを負うつもりでいる。だからお前はその機体を置いてエアリスを連れて逃げろ！ せめてお前たちだけでもっ」

しかし、通信機を通じて聞こえてくるランクスの声は、あまりにも苦しそうで。泣き出す前の子供のように震えている。

「勝手なことを言うな！」

玄武の重鎗が容赦なくランクス of 青龍を攻め縛める。

「くっ、このわからずやが！」

ランクスがその形の良い唇を噛み締める。

青龍が玄武のわき腹を蹴り上げ、玄武はバランスを崩し背面の岩山に強かに打ちつけられる。

「くっそお」

コクピットに突きつけられる長刀。

「ハヤト、お前を傷付けたくはない。頼む機体を捨ててエアリスと逃げろ！」

それは懇願するような悲痛な叫びだった。

死神

北の空に死神が立ちほだかる。

闇黒のボディーに巨大な大鎌をかかげた、その目だけ、赤く不気味に光る。

「なんだあれは？」

北斗の海に展開する海軍部隊がざわめき立つ。

刹那、一陣の閃光が左舷に展開していた北斗の友軍をなめ尽くす。

北斗主艦の司令室が静まりかえる。

誰もが現状を把握できぬままに、モニターに表示される赤い「Lost」という文字とシグナル音がせわしなく鳴り響いていた。

「さ……左舷前方部隊、全滅です」

「毘沙門天の用意を！副艦長、後を頼む」

紫龍はその場の上着を脱ぎ捨て、ロッカールームへと向かった。

「ばか、待て紫龍！指揮官のお前が出てどうすんだ」

エアリスの護衛で主艦「千手」に乗り込んでいた四道が、紫龍の背に手をかけた。

「今、とにかくあれをどうにかしないと同じことだ」

四道が言葉を飲み込む。

「毘沙門天、隊長機出るぞ！」

管制塔が俄かに慌しくなり、主艦千手から白い機体が飛び立つ。

闇に輝く白いボディー、関節部分は金のカラーリング、左腕に北斗七星をモチーフにした紋章が施されている。

背に備えつけられたスラスタが光の羽のように輝き、北斗軍の

誰もがその隊長機に一縷の希望を託した。

「くらえ！チェーнкロス」

毘沙門天の右手に装備された鉄の鎖が白く輝き、うねりながら死神を指す。

「だから、なんだ？」

鉄の鎖は死神に触れることすら適わず、ぼろりと熱に解けた。

「なにっ！」

死神の指に装備されたビームライフルが、毘沙門天の手を、足を容赦なく吹き飛ばす。

「これで終わりだ」

ビームライフルが毘沙門天のコクピットをとらえた。

共に

コクピットが開き、ハヤトが投降する。

それを見届け、ランクスも青龍のコクピットを開く。

「少しだけ、話をしてもいいかな。ランクス」

人気の無い砂浜に腰掛け、無言のままに波打際をながめる。

「なんでって聞いても、いい？」

ハヤトがランクスを覗き込む。

ランクスはしばらく口を噤み、やがて声を絞り出した。

「妹が、人質に取られているんだ。助けるためには、これしか方法がなかった」

「そっか……」

ハヤトが服についた砂を払い、立ち上がる。

「じゃあさ、一緒に行こうよ！で、妹さん助けよ」

「お前……何言って」

「青龍と玄武があれば、なんとかなるっしょ？」

昔と変わらない、温かで優しい笑顔。

「ありがと……な」

「ああもう、嬉しいときに泣く癖、ちっとも昔と変わらないねランクス」

風

風が凪いだ。

空が泣きそうな湿り気を帯びて。

「ランクス？」

そういつて奴は俺の手をとった。

春に咲く桜のように儚い微笑みで。
それが奴の最後に見た笑顔だった。

「危ない！」

そう叫び、奴は俺を突き飛ばした。
静寂に響き渡る銃声と硝煙。

俺はその場に尻餅をつく。

奴は天を仰ぎ、仰向けに倒れた。
ふざけてるのか？

一瞬そう思ったが、それっきり奴の瞳が開かれることはなかった。

「ハヤト————！！」

狂ったように叫んで、俺はバカみたいにその亡骸にすがっていた。

破魔弓

「エアリス様？泣いていらっしやるのですか？」

御影が心配そうにエアリスの顔を覗き込む。

「わたくしは……泣いているのですか？　なぜでしょう……」

理由がわからないままに、それでも涙はとめどなく流れ続けた。

御影が祭壇に安置してある破魔弓を取り、エアリスに握らせる。

「これを用い、悪しき魔をお祓ください」

「どうすれば、良いのですか？」

そのとき、息せき切って駆け込んだ四道がエアリスの手を掴む。

「紫龍が、紫龍が危ねえんだ」

手のひらが微かに震えている。

甲板の端に立ち、エアリスは玄武の破魔弓を構えた。

——父よ、母よ、そして兄上。一族の皆、どうかわたくしに力を
お与えください——

エアリスは写真でしか見たことのない父と母を思った。

そしていつも飄々と軽口とたたき、自分を気遣ってくれる兄。

育ててくださった、王と王妃。

金の髪の少女の面影と、

そして最後にハヤトの顔が横切った。

刹那、なにかがふわりと降りてきて、自分を抱きしめたような気がした。

——君を守るよ——

微笑とともに、確かにその声が耳を掠めた。

エアリスは瞳を閉じ、息をとめた。

破魔弓が呼応し、鈍く光を放つ。

破魔矢が具現化し、その狙いを死神のコクピットに据える。

「南無八幡大菩薩」

光の矢が放たれ、死神のコクピットを抉った。

「なにっ」

光の矢はコクピットを貫き、シルビスの身体に深々と突き刺さっている。

「熱いっ、熱い……うおおおお」

シルビスが獣のような呻き声を上げ、矢を引き抜こうとするが、矢から放たれる青い光がその身体を容赦なく焼いていく。

心臓のあたりに大きな穴があき、どす黒い血を滴らせる。

「なんだ、これは。許さん、許さんぞ、小娘」

ぜいぜいと肩で息をしながら、シルビスはコクピットから姿を消した。

やがてサリエリ軍が撤退を始める。

北斗軍のやんやの喝采が勝利の女神であるエアリスに送られるのだが、エアリスは人目を避けて浄室に引きこもる。

「どうされましたエアリスさま、戦いを勝利に導かれた巫女様がそのような悲しいお顔をなされますな」

心配した御影が、そっと様子を見にきたが、エアリスは薄布の帳のなかで膝を抱えたまま返事をしなかった。

月光

こんなにも――月の綺麗な夜に逝くのも悪くは無い。

窓辺の揺り椅子にもたれかけ、アイはそう思った。

寝台に眠る男にそっと口付け、その寝顔をじっと見つめた。

「時が満ちた。じゃあ、な」

アイは部屋を後にする。

「神珠を……よこせ」

廊下にどす黒い血痕をつけ、足を引きずるように銀の髪の男が立ち上がる。

「ふん、なんだその様は」

「うるさい」

「破魔矢……か。誰が射た？」

アイがそれに触れると光の破魔矢がふっと消えた。

「エアリスだ」

アイが笑い出す。

「ほう、確かにあれもお前が愛したラケルの血を引く者であったな」
シルビスは不快そうに顔をしかめる。

「おっとおしゃべりが過ぎたようだ。もうそろそろ逝け」

「わかった。では逝くでしょう」

アイは静かにその瞳を閉じた。

瞼が微かに震える。

「なに、苦痛は与えない。一瞬だ」

銀の髪の男がそっと女を抱きしめその胸に手を置く。それはまるで愛を囁くかのような仕草で、どこまでも優美で優しかった。

アイの純白のドレスが紅に染まる。

乙女はまるでその胸に咲き初めの薔薇を抱きしめて眠るようだった。

棺

棺がふたつ、目の前にある。

茶色の髪の毛、自分と同じ位の年齢の少年。

それが誰なのかはわからないのだが、なぜだか彼が瞳を開き自分に笑いかける様を想像することができた。

もうひとつの棺に納められているのは、自分よりも幾分幼い少女。整いすぎた人形が横たわって納められているようだった。

「彼らは一体誰なんだ？」

ランクスは隣に佇む、美しい銀の髪の毛の青年に尋ねる。

「さあ、そんなことよりも、こちらで少しお休みになりませんか？今日はもう、お疲れでしょう」

部屋に漂うかすかな媚薬の残り香を、風が跡形もなく運び去った。

冷たい石の回廊を随分とくだると、俄かに松明の明かりがぼんやりと周囲を照らしていた。

カビの匂いが鼻につく。

「さあ、どうぞ」

鉄格子を開け、シルビスはランクスを招き入れる。

ランクスはどこか虚ろに微笑んだ。

「ああ、俺は罪人なのか。きっとあの二人を殺したのは、俺なのだな」

手につけられた枷が、ずしりと重く食い込む。

浅い微睡の合間に襲いくる、悪夢の数々。

茶色い髪の毛の少年が、春風のように儚く微笑んで自分を振り返り……。

――血まみれの骸と成り果てる――
目覚めたのは、自分の悲鳴だった。

喉がカラカラに渴いている。
生きることより、死ねない地獄。

「殺シテ……、誰カ、俺ヲ……殺シ……テ」
ひび割れた唇が、そう呟くと涙が頬を伝った。

どこか崩れた記憶の片鱗で、金の髪の少女が笑っている。
「君は、誰だ？ 俺を迎えにやってきた死神か？」
嘲るように呟くと、鉄格子がそっと開いた。

誓い

メイドがひとり佇んでいる。松明の明かりが頼りなく女の横顔を照らし出す。

「ランクス様、お忘れですか？ わたくしです」

少女は懐かしむように、ランクスをじっと見つめる。

「お前は、誰だ？」

ランクスにはそれが誰なのかが、わからない。

少女ははっと表情を強張らせる。

「ランクス、あなたもしかして記憶を操作されているのですか？」

ランクスからかすかに漂う、媚薬の残り香。

ああ、と悔しげに唇を噛み締める。

「ランクス様、わたくしは以前あなた様に命を助けていただいたのです。ですから今度はわたくしがあなた様をお助けする番なのです。サリエリ国王オーリスが、あなた様の処刑を明日に決定いたしました。逃げるなら今夜です。さあ、わたくしを信じてくださいませ」

ランクスは虚ろな視線をただぼんやりと漂わせた。

「もはや、この俺が生きる理由がどこにある？ いささか、もう疲れた。親切には感謝するが、どうかこのまま死なせて欲しい」

それはどこまでも寂しい微笑だった。

少女はつかつかと牢に入り、思いつきランクスをひっぱたいた。乾いた音が響き、唇の端が切れた。

「っ痛う」

「それは、あなたさまが生きているからです。否、生きなくてはならないからです。確かに多くの犠牲の上に国家が成り立ち、その葛藤の故にあなた様が苦しむこともよくわかります。ですがあなた様には使命があるのです。幾千、幾万の民を導かねばならぬのです」

はたとランクスの目が生氣を取り戻す。

「お前は一体何者だ？」

「わたくしですか？ わたくしの名は蓮。砂漠の要塞都市シバの総督です」

蓮の黒い瞳がランクスの顔を覗き込む。

ランクスがかすかに目を細める。

「ならば、俺は一体誰なんだ？」

少女は意味あり気に微笑む。

「教えて欲しいのですか？ ならばあなたはわたくしに、生を誓いなさい」

蓮の唇が触れる。それが無言のうちに交わされる誓いの儀式。

———あなたの名はランクス。わたくしの夫となる人物ですわ———

青き神珠

ツインテールの乙女が静かに広間に降り立った。

「アイ、迎えにきたぞ」

そういうと、少女の前に同じ顔の少女が佇んだ。

うっすらとその体が透けて見える。

差しのべた手のひらに手を重ねると、青白い光が少女たちの体を包んだ。

熱い血潮が彼女たちの体を駆け巡り、その姿は変貌を遂げる。

そこに佇むのは黄金の甲冑に身を包んだ美しき女戦士であった。

女戦士が棺に横たわるハヤトの前に歩み寄る。

「起き上がれ少年よ。そなたはまだ死すべき運命にはない」

女戦士の右の掌に、青い神珠が鈍く光る。

神珠は棺の冷凍カプセルを透けて、ハヤトの胸に吸い込まれた。

再会

「その身に刻まれし、黒揚羽の羽が開ききる前に、ランクスを殺せ」
月が血の色に染まった夜に、赤毛の女騎士がそう告げた。

金の髪の少女が、その地に降り立った。カーゴパンツに赤のタンクトップ、その上に緑のジャケットを羽織っている。見るからに少年じみた簡素な服装ではあるが、どこことなく気品が漂う。

シバ衛星都市シオンの宇宙ステーションは人ごみでごった返している。シバは四神のデータを解析し、それを少し簡易にした人型機動兵気機の量産に成功し、あつという間にサリエリをシバ本土より撤退させた。戦争の勝利と軍事による好景気に沸く。

「さあて、これからどうしようか」

なんてことを呟きながら、売店に入ると新聞におおきく見出しがついている。

『亡命の王子、ランクス・クリフォードとシバの王女、蓮・ハダサの婚約！』

ルリアはそつと自分の鎖骨にある黒揚羽に触れた。

空虚な感情が心を満たす。

ランクスは母国を焼き、自分の貞操を奪った男。そして最愛の弟、ハヤトの命を奪った。

自分は瀕死の父を救うため、魔と取引をした。

この鎖骨に刻まれた黒揚羽の羽が開ききる前に、ランクスを殺すことができれば、自分は心臓に埋め込まれた聖十字によって命

が絶たれる。背に担いだ剣の柄にそつと触れてみた。

売店でいちご牛乳を買った。今にも茶色の髪 of 少年が駈けてきて、自分をからかうのではないかと、そんな気がしてならなかった。

「ちょっと待て、シヤナ。いくらお前の母国でも、いきなり官邸を抜け出ではアグニが心配するだろう？」

紫の髪の少年が佇む。

ルリアの心臓が跳ね上がる。

思い出のなかのそれより、幾分大人っぽく成長したその横顔を見て、不意に目頭が熱くなった。

「いいの、いいの。いつものことだしさあ。せっかくお前を案内してやろうってのに一々目くじらたてんなつうの」

小麦色の肌をした、端正な顔をした少年が、唇を尖らせる。

不意にルリアの身体に衝撃が走った。男がひとりルリアの身体に体当たりし、荷物を持ち去ったのである。

「あつ泥棒！」

そこにはルリアのパスポートと全財産が入っている。

ルリアは必死で泥棒を追いかけるが、追いつかない。

刹那、紫の髪の少年が、ひょいと足を引っ掛けると、男はものを見事に派手にすっ転び、その上に小麦色の肌の少年が乗っかり、腕を押さえ込んだ。

ぎゃつと叫んで男はバッグを手放した。

「君の？」

ランクスがバッグをルリアに返す。

食い入るように自分を見つめるルリアをランクスは不思議そうに見ている。

「なにか？」

「い、いえ、どうもありがとうございます」

ぎこちなく、震えがちにようやくそう答えた。

騒ぎを聞きつけた警官がようやく駆けつけ、ランクスとシャナを見て仰天する。

そんな混乱に乗じて、ルリアはひとごみに紛れ姿を消した。

心臓が早鐘のように鳴り響いている。

「芝居なのか？」

自分を見たときの不思議そうなランクスの眼差しにちりりと胸が痛んだ。

そして身を隠し、ランクスの行動を探るための方法に思いを馳せる。

ステーションの掲示板に貼り出されてあった求人広告に目が留まった。

「王族親衛隊員募集……か。なるほど、木は森に隠せてことか」
よし、これでいこう。ルリアはぽんとひとつ手を打った。

記憶の片鱗

気がつけば、彼女は姿を消していた。

ランクスは半ば呆然とその場所で立ち尽くす。

行きずりの雑踏のなかでの不意の出会いはずかしく、切なく己の胸を締め付けた。

食い入るように自分を見つめる金の髪の少女の面影が頭から離れない。

そして思い当たる。

あれは毎夜悪夢の後で見る死神。

否、崩れた記憶の片鱗で自分に微笑む金の髪の少女とあまりにも似ている。

「なんだ？ ランクス顔色悪いぞ」

シャナがかすかに柳眉を寄せる。

「いや……、シャナさっきの少女を捜すことは不可能だろうか？」

「はあ？ なに惚れちゃったわけ」

シャナは冷やかすようにランクスの顔を覗き込む。

「そうじゃない。だけど……いや、いい」

ランクスはふいと視線をそらした。

「おいおい、浮気ってわけじゃないだろうな。今日は蓮への婚約の祝いの品を買いに行くのが目的だろう？」

シャナが無邪気な笑顔を向け、ランクスは苦笑する。

「ああ、そうだな。早く行こう」

ターミナルを出ると、人工的に調整された青空がなんだか白々しく見えて、ランクスは人知れずため息をついた。

どうも宇宙はあまり好きではないらしい。

はやく地球に帰って、本物の太陽が見たいと思った。

閉じた目裏に、燦々と輝く太陽のもと、金の髪の少女が微笑んで
いる幻を見たような気がした。

鉄仮面の男

「あのう、すいません。王族親衛隊に入隊したいのですが」
ルリアは恐る恐る、強持ての門兵に尋ねてみる。

ここはシバの衛星都市シオンの中心部で、目の前に首相官邸が堂々と佇む。

一見中世の広大な城のような建物で、よく手入れされてある前庭には、多くの志願者が集っている。

「ああ、ダメだ。お前みたいな細っこいもやしみたいなのは」
てんで話しにならないと、門兵はうるさそうに手を振った。

「うむ、見た目の問題か」

ルリアはたと自分の身体を見つめた。

確かにこのままでは、色んな意味でまずい、ような気がする。

「正攻法では無理か。うーん、どうしようっか」

ぼんやりと佇むルリアの前を、男が一人通り過ぎていった。

鉄の仮面をすっぽりと被り、大仰な鎧を身につけている。

男は受付で親衛隊審査の登録を済ませると、裏路地へと歩いていった。

ルリアはそつと男の後を追う。

売春宿の客引きの女が、男を誘い腕を絡ませ、何事かの睦言をささやきかける。

「そうかい、あんた物好きだねえ。こんな俺でも相手にしてくれるのかい」

男が仮面を外すと、女の甲高い悲鳴が耳を劈く。

「いやああああ、あっあのお許しを……」

驚愕に震える女の、か細い首に無骨な手がかけられる。

「誘ったのはお前だろう？　ならその気になっちまった俺を静めてくれなくちゃ」

「ああっ……」

その手の中で女の生が蝕まれてゆく。

ルリアがつかと、その男に歩みよる。

「おっちゃんさあ、変態なの？」

斜め45度の下からのアングル。

ルリアはかなり可愛く聞いたつもりだった。

「お前が、この女の代わりに死ぬか？」

しかしどうやら、冗談の通じる相手ではなかったらしい。

鎧

男の手が離れ、女は咳き込む。

勢いよく振り上げられた男の拳を難なく掴み、空へ投げ飛ばす。

ひよいと自分も跳躍し、勢いよく男の鳩尾に一撃を見舞う。

「ぎゃっ」と呻いて男はその場で動かなくなった。

「よいせ」とルリアは男の仮面を外す。

顔中一面に焼け爛れた跡があった。

懐を探ると、先ほど登録した親衛隊審査の受付票があった。

「これこれ♪」

ルリアはほくほくと微笑んだ。

「あ……あなたは、ひよっとして追いはぎ？」

女が目を白黒させ、ルリアを見つめている。

ルリアは苦笑する。

「いや、好きでやってるわけじゃ、ないんだけど、ごめん今回だけ大目に見てよ」

ルリアは片目をつぶり、女にお願いする。

「家が貧乏で、母の薬代を稼ぐために王族の親衛隊に志願したいのですが、外見が貧相だから、断られてしまって。家ではお腹を空かせた兄弟たちが仕送りを待っているんです」

愁傷気に目を伏せ嘘八百を並べ立てると、女はプルプルと震えだした。

「そうだったの。それはお気の毒だわ。よかったら家にいらっしゃいよ。コスパブだから、色々衣装もそろっているわ」

女に案内されたパブの控え室で、胸にさらしを巻いてもらった。女を捨てた日——髪を切った日のことをなんとなく思い出し

た。

「ちょうど少し小さめの、あなたにぴったりな皮の鎧があるわ」
差し出してくれたそれを身につけ、鉄仮面が顔の半分を被う。
鏡に映し出された自分の姿に、ルリアはそっとため息をつく。
冷たく無機質なそれを自分は決して好きにはなれないだろう。
だけど……。

これでよいのだと思う。自分は心を凍らせなければならない。人
であることすら捨てて、そして……。

この手を血で染めなくてはならないのだから。

いちご牛乳

「ええと、君はエド・アルダートンだね」

白髪の間じる品のよさそうな紳士が受付に立ち、親衛隊審査の受付に立つ。

先ほど登録した志願者たちの顔と名前を念入りにチェックしている。

「はい、そうです」

仮面の主は、受付票を手渡し手のひらに判をついてもらう。頭からすっぽりと仮面を被り、その表情は見取れない。

「君、さっきよりなんか小さくなってない？」

受付の紳士が、無垢な笑顔で素朴な疑問をぶつけてくる。

ギクッそんな擬音語を背後に背負い、仮面の主は小首を傾げる。

「さあ、そんなことは無いと思うが」

曖昧に呟いて、仮面の主は早々にその場を立ち去る。

仮面から零れ落ちた金の髪が陽の光を受けてひまわりの色に輝く。

審査の方法は、簡単な筆記試験と武術のトーナメント勝ち抜き戦なのだそう。

筆記試験は言っちゃ悪いが楽勝だったと密かに仮面の主は思う。

後半の実技試験に入る前の休憩時間に、仮面の主は売店でいちご牛乳を買い、ぼんやりと佇む。

「仮面の騎士がいちご牛乳……か」

低く笑いをかみ殺し、視界に現れるのはフォーマルに身を包む紫の髪の少年。

「悪いか」

仮面の主はぶっきら棒に答えそっぽを向く。

「いや、悪くは無い」

不意に仮面に覆われていない頤を掴まれる。

「美味しいのか？」

触れるほどに近くある、愛しき仇の紅顔。

「まだ飲んでいない、が、とりあえず離せ！」

ルリアは仮面越しにランクスを睨みつける。

「では俺もそれを貰おう」

ランクスはルリアから手を離し、購買の店員に話しかける。

「申し訳ありません。ちょうど今売り切れてしまっ

て店員が愁傷気にランクスに謝っている。

ルリアは手にあるパックのいちご牛乳をランクスの後頭部目掛けて思い切り投げつける。

「おっと」

少しバランスを崩しながらも、ランクスが右手でそれをキャッチする。

「さっきの礼だ。やるよ」

ルリアは内心舌打ちしたい衝動に駆られたが、なんとか耐えた。

「ありがたく、頂戴するよ」

ルリアは背を向け、歩き出す。

「お前名は？」

「エド・アルダートンだ」

「気に入った、命令だ。お前必ず勝ち残れ」

競技場の来賓席に、蓮・ハダサが正装姿で座っている。

愛する男、ランクス・クリフォードとの婚約を終え、その表情は陰りを知らない。

そこに妙に上機嫌の想い人が歩み寄る。

「まあ、なにをお飲みになっ

「ああ、いちご牛乳という飲み物ですよ。初めて飲んだのですがなにか懐かしい味がしますね」

ぼんやりと、霞のかかった記憶の中で、ひまわりの髪の少女が笑う。

「ルリアはね、イチゴが大好きなの」

———君ハ、誰?———

「甘い」

予選開始

中庭に設けられた特設の競技場に猛者が集う。

皆一様に受け付けでもらった白いリボンを腕に結んでいる。

「さて、ここからが本番か」

見回せば、ざっと百人くらいいる。それでも先ほど行われた筆記試験で規程の点数を満たさなかった者は帰されたのだが、これだけの人数をトーナメント形式でいちいちで勝負するなんて、なんだか面倒くさいような気がした。

「ではこれより、王族親衛隊の入隊実技テストを開始する。相手の腕にあるリボンを10本集めた者が合格となる。特にルールはないが、ただし相手を殺すと失格になる。」

ドラが中庭に鳴り響く。

屈強な男がルリア扮する仮面の騎士の前に立ちはだかり、強烈な拳を繰り出すが、仮面の騎士は身軽にひよいひよいと難なく交わしてゆく。

頭にきたのか、男は鞘から巨大な剣を引き抜き、仮面の騎士目掛けて勢いよく振り下ろす。

仮面の騎士はその刀の切っ先に飛び乗り、男の顔を覗き込む。

「おっちゃん、これちょうだいね」

呆気にとられている男の腕に巻きつけられた白いリボンが、仮面の騎士の手の中でひらひらと風に靡いている。

「No51 エド・アルダートン合格」

10本のリボンを審査官に手渡し、合格を宣言され仮面の騎士はほっと一息つく。

ランクス・クリフォードと蓮・ハダサの婚約パーティーの余興のひとつとして、今夜、合格者10名の中でナンバーワンを決めるトーナメント戦が行われるらしい。

それを考えると、なんだかうんざりしてきた。

「スケベ……」

なんとなく呟いてみる。

国を焼き、弟を殺し、なおかつ自分にあんなことをしておきながら、そして今日平然とシバの王女と婚約してる。自分はその余興の出し物のひとつ……。

ルリアは来賓席に座るランクスを見上げた。

覚悟

王族親衛隊として選ばれた10名は、トップガンエリートとしての栄えある白の士官服に身を包む。襟元にはシバの王族を意味する鳳凰が豪華な金糸で縫いとられている。

さらに今夜の余興でナンバーワンになったものが、親衛隊の隊長として任命されるそうだ。

控室として宛がわれた客間の一室には、しみひとつない赤い絨毯が敷き詰められ、すでにシャンデリアには灯りがともっている。この部屋に通されすでに半時は経とうかとしているが、10人が10人ともそれぞれの思惑のもと、張りつめた雰囲気が漂う。特に鉄の仮面を被っているルリアには誰も話しかけようとはしない。

ルリアはぼんやりと窓辺に佇み、コバルトに染まる空を眺めた。その色がランクスの髪の色に重なる。

やっとここまでできた。

今はもう手を伸ばせば触れることのできる位置に彼がいる。

ルリアはその瞳を閉じ、ランクスの面影を思い出す。

大丈夫、もう迷いはしない。自分はランクスの命を奪ってでも生きる。

その覚悟があるからこの場所にいるのだ。

控え目なノックの後、執事と思しき出で立ちの紳士がそっと部屋に入ってきた。

「皆様、お時間ですので中庭にて待機してください」

すでにシバ王女、連・ハダサとランクス・クリフォードの婚約式ははじまっており、中庭の特設会場では弦楽の四重奏が甘美なメロ

ディーを奏でている。

招待客はグラスを片手に世間話に花を咲かせている。

王族親衛隊として選ばれた10名の名が呼ばれ、連・ハダサの前に立たされる。

その視線がルリアでとまり、じっとルリアを見つめている。

「あなた、その仮面をおとりなさい。王族の前で失礼ですよ」
全会衆が見守る中、ルリアは生唾を飲み込んだ。

ナンバーワン

「お許してください。この顔には醜き火傷の跡があり、きつとご列席の皆様のご不興をかいましよう」

「そう、なら仕方ないわね」

剣が鞘から抜かれ、ランクスに渡されると、選ばれた10名のひとりひとりの肩に軽く当てられた。抜き身の剣の冷たさと重さが項に触れ、ルリアは無言でその不快さに耐えた。

中庭の中央に石のタイルが正方形に敷き詰められている。どうやらこれが特設の競技場らしい。各々剣を与えられ、名を呼ばれた順に進み出でる。

予選のときと同じく相手を殺すことはご法度で、相手がダウンするか、参ったと言われれば勝ちなのだそう。

「エド・アルダートン、前へ」

ルリアは前に進み出る。

強面のステファン・ヴォイタスという男が相手だった。

繰り出される剣の重さを受け、ルリアの手が痺れる。

パワーでは相手のほうが上、ルリアは相手との間合いをとり、じりと後退する。

「もらったー」ステファンが雄たけびを上げ剣を振りかざした瞬間、その瞳が見開かれる。

「なにつ、消えた」

冷たい剣の感触が、ステファンの頸動脈を正確に捉えている。ステファンの額に汗が滲み、

「ま……参った」

低く唸るように声を絞り出した。

観客が沸き、その歓声に応えるべくルリアが手を振る。

王族の観覧席で、ランクスがほっと息をついた。

「息もつかさぬ、接戦でしたわね」

「ああ、途中力で仮面の騎士が押されたときはどうしようかと思っ
たよ。剣の重さに手首を痛めていなければよいが」

心底心配そうに騎士を見つめるランクスの肩に蓮はそっと頭を持
たせかける。

「お優しいですね。ランクス様」

「このような公の場で、おやめなさい」

そういつてランクスはそっと蓮から身体を離す。

頬を掠める夜風が冷たくて、蓮はなんだか悲しくなった。

「エド・アルダートン勝利！」

ルリア扮する仮面の騎士が、難なく勝ちあがり優勝の歓声に場内
が沸く。

「ランクスよ、これも一興じゃ。あのナンバーワンと剣を交えよ」

シバ国王サウルが剣をランクスに手渡すと、割れんばかりの歓声と
熱気に包まれた。

石畳に紫の髪の少年が姿を認めると、ルリアは己の剣をぎゅっと握
りしめた。

攻防

開始の合図に沸きかえる場内。

しかし、両者の間には奇妙な沈黙が流れる。

ルリアの剣を握る手が汗ばむ。

一陣の風が二人の間を吹き抜けると、ランクスが間合いを詰めその切っ先をルリアに繰り出す。

はいっ

ルリアは仮面の中で顔をしかめるが、捉えられないほどではない。冷静にと、自分に言い聞かせながら、守りに徹してランクスを力量をはかる。

これは好機か。いやそれとも……。

ふと脳裏に邪念が過る。

今、ここでランクスを命を奪うことができるなら、たとえ相果てようとも悔いはない。

ハヤトの仇？ 国を守るため？ 否、そのどちらでもないような気がした。

ルリアはちらりと主賓席に佇む蓮・ハダサを見上げた。

刹那、ルリアが攻めに転ずる。

ランクスが一瞬、微笑わらったような気がした。

「俺を殺すか？ それもよからう」

剣の切っ先が、ランクスを頬を掠め、わずかに皮膚を抉る。

「だが、その前に」

虚無の中に微かな慈しみの色を宿し、ランクスを碧の瞳がルリアを見つめる。

次の瞬間、ランクスの剣の柄がルリアの眉間を打つ。

ルリアは後ろに飛びのき、その衝撃に耐える。

「くっ、何を！」

翳した剣が交り合い、斬り結ぶ。

ルリアの剣の切っ先が、ランクスの喉元を捉える。

バルコニーから身を乗り出した、蓮・ハダサの黒髪に結わえられた薔薇の花飾りがふわりと夜風に舞って、石畳に紅を散らした。

月の女神

「……参り、ました」

そう呟き、ルリアは背を向けた。

鉄の仮面が二つに割れ、石畳の上に転がる。

ルリアのこぼれおちた金の髪が焰を受けてゆらりと褐色に輝いている。

「悪かったな」

ランクスが、ルリアの頭に上着を投げかける。

ルリアはそれで顔を覆い隠した。

王族の親衛隊として個室が与えられ、しばらくの間そこで休むように言われた。

灯りを消し、簡素なベッドに身を横たえる。

「どうしよう……鉄の仮面壊れちゃったしなあ」

今頃になってランクスに柄で打たれた部位が、ズキズキと痛んだ。

控え目なノックの後で、男が一人部屋に佇む。

「誰だ？」

ルリアは飛び起き、身構える。

「ランクス・クリフォード。お前の主だ^{あるじ}」

「恐れながら……」

ルリアはその場に跪く。

「いい、いい。畏^{かしこ}まらなくて。お前が嫌だ^かというのなら灯りはつけないから、そんなに身構えるな」

「あのっ」

「傷を見せてみる。つい剥きになって傷つけてしまった」

その声色に後悔の念が滲む。

カーテンの間から洩れた月明かりが頼りなく部屋を照らし、お互いの顔の輪郭だけがおぼろげに浮かぶ。

おそらく痣になっていいるであろう額に、そっとシップ葉が塗られ、ルリアは顔を顰める。

「くさい」

思わず呟くと、ランクスが噴出した。

「贅沢いうな」

サイドテーブルに置かれた、割れた仮面にランクスが触れる。

「女がこんな無骨なものを被るな」

ランクス指が、その頬に触れようとしたとき、ルリアは反射的に身を引いた。

「お許しくださいます。私には醜き火跡がありますゆえ」

「闇の中でしか、その素顔を見ることが許されないとは、お前はまるで月の女神だな」

ランクスは小さくため息をついた。

「お前は、エド・アルダートンの名を捨てよ。この仮面を被り月の女神ティナの名を名乗るがいい」

手渡されたのは、プラチナで形作られた女神の仮面。

「月の女神よ、我に忠誠を誓え」

差し出されたランクスの手の甲に、ルリアはそっと口付けた。

「……御意」

思惑

「なにゆえですか！」

ランクスの執務室にて、蓮がその机を叩き、御冠である。

黒く艶やかな髪が、ゆらりと揺れる。

ランクスの深い碧の瞳が、蓮の姿を映し出すと、蓮は少し頬を染めて下を向いた。

ランクスはおだやかな微笑を称え、そんな蓮を見つめている。

「そのように取り乱さず、まあお掛けなさい」

蓮はひとつ、ため息をつき赤い革張りのソファーに腰かけた。小柄な蓮にはこのソファーは幾分大きすぎるが、蓮は気丈に胸を張ってランクスを見つめた。

「どうして名と性別を偽わり、我々を欺いた人間を親衛隊の長に任命するのですか？それも女騎士などをお傍に置くとはっ」

「おやおや、婚約者殿は焼きもちを妬いてくださるのですか？」

「べっべべ別に、そういうわけでは。そう、私は総督です。シバ本土の総督として申し上げているのです！」

「ならば、総督殿に申し上げます。これはプロパガンダです。仮面の女騎士を英雄に仕立て上げるのです。彼女にはわが国最強の精鋭部隊『暁』を率いてもうらう」

「あかつき……」

蓮は言葉を飲み込んだ。

ランクスは視線を外し、窓の外を眺めた。

霞んだ記憶の中で、銀の髪の男が冷たく笑っている。かつての自分の母国だったというサリエリとの決戦は避けられないであろう。

願わくば、人も土地も焼きたくはない。

まもなく妻となる、この乙女も。

匂うような黒髪が、利かん気の強そうな口元が……やがて金の髪の少女のそれに重なる。

ランクスはその幻影を振り払うかのように、蓮をきつく背後から抱き締めた。

「今夜は蓮の部屋に行こう。執務にかまけあなたには寂しい思いをさせた。申し訳なく思う」

蓮はきゅっと掌を握りしめ、その胸の高鳴りに耐えた。

初夜

バスタブに散らしてある花卉を手にくい、蓮はため息をついた。指の間から、芳香を燻らせた湯が毀れおちる。

私はランクスを愛している。

初めてお会いしたときから、どうしようもなく恋焦がれてしまった。ランクスに想い人があることは知っていた。

金のロケットを愛おしそうに胸に抱いていた。

その写真に写る、金の髪の少女。

彼女が誰なのか、ランクスが記憶を失っている以上、今の私には知る由もないのだけれど。

私は今夜ランクスと初夜を迎える。

それは喜ばしいことのはずだった。

しかし気持ちは一向に晴れない。

蓮の手がバスタブの水を打った。

「だからどうしろと？」

私はランクスの正式な婚約者なのだ。

蓮は唇を噛みしめた。

淡い緑のイブニングドレスに、ランクスからの婚約の贈り物である大粒のダイヤのネックレスがよく映えていた。

瑞々しい豊かな黒髪を背でゆるくまとめ、肩に流している。

ベッドの上にも花卉が敷き詰められ、よい香りがした。

「なんだか、恥ずかしいわ」

鏡に映る姿を見て、蓮が頬を赤らめた。

「花嫁になれる方は、最初はみんなそうなんですよ」
蓮付きの侍女が、鏡越しに嬉しそうに微笑みかけた。

やがて控え目なノックの後に花婿が姿を現した。

「これは美しく支度ができましたね。これをどうぞ」

差し出された花束に、蓮は顔を埋めた。

「まあ、素敵。アリスこれをサイドテーブルに飾ってちょうだい」
そういつて侍女に花束を渡した。

私は抜け駆けは嫌い。

心にあるこの葛藤を一生後生大事に抱えて生きていくなんて、そんなのは嫌だ。

「ランクス、私はあなたに渡さねばならないものがあります」

蓮はベッドサイドに置かれている、鏡台の引き出しから金のロケットを取り出した。

「あなたは記憶を失われる前に、サリエリの捕虜となった私を命を掛けて助けてくださいました。いつの日か私がこの写真の少女に会うことがあったら渡して欲しいと私に託されたものです」

ランクスは手の中にある古びた写真を見つめ、ため息をついた。

「彼女は……一体誰なのだ？ 毎夜毎夜、悪夢を見る。人がたくさん死んでいく夢を。無数の亡骸の前で死を願う私の前に彼女が必ず現れ、微笑む。彼女は天使なのか？ それとも死神なのか？」
蓮が美しい眉を寄せる。

「死神などと……、不吉なことを」

「いや、申し訳ない。間もなく妻とられる方に聞かせる話ではないな。この少女がどうであれ、もう今の俺には関係ない。これは私が処分する」

「では……、お捨てになって。今ここで」

星が冷たく瞬いていた。

美しくも不吉な夜だった。

リンクスがバルコニーから林に向かってロケットを投げ捨てた

暗い林の中で、ロケットのオルゴールが悲しげに泣いていた。

星の降る夜

星の降る夜か。

不吉だという人もいるが、美しいものは美しい。

ただ、そんな美しさにどうしようもなく胸が締め付けられ、だけどそんな自分を誰にも見られたくなくて、俺はふらりと官邸を出た。闇に紛れて、微かなオルゴールの音色が聞こえた。

ぞっとしないでもないが、音のするほうに近づくと金のロケットが落ちていた。

手にずっしりと重い純金製のオーバル型のロケット。

大層高価な手の込んだものだった。

月明かりに照らされた少女の写真が頼りなく笑い、とぎれとぎれにオルゴールが悲しい旋律を歌う。

「ばーか、大切な女を泣かせてんじゃねえよ」

シヤナはそれを手に取り、ポケットにしまった。

水音がした。

シヤナはそっと草むらから湖畔を伺う。

月光を浴びた女神が降りたっているかのようだった。

湖水に素足を浸し、くるぶしまである丈の長いネグリジェを手で託しあげて、月の女神が小波と戯れていた。

女神は月を仰ぎ見て、その仮面を外す。

そこには火傷の跡など全くなく、息を飲むほどに美しい女だった。

「ティナ？」

「あっ」

「月の女神の美しさに、すっかり見とれてしまった」

「シヤ：ナ王子」

ルリアはその場に跪き、臣下の礼をとる。

噛みしめた唇が、後悔に震える。

迂闊であつた。

寝付けぬからと、官邸の宿舎を抜け出しこのような場所にいたことを必死に悔いた。

誰もいないと高を括り、あまつさえ素顔を晒してしまふなど。

「これは、お前のものか？」

シャナはポケットにあるロケットを取り出し、ルリアの手にのせた。

「この写真はお前なのだろう？」

月明かりの下、シャナの手がルリアの頬を包みこんだ。

胸を掻き毟られるほどに優しい瞳だった。

「素顔を隠さねばならない事情があるのだろうか？ お前が困るのであれば、私は余計な詮索はしないでおく」

ふわりと何かが降りてきた。

シャナが自分の来ていた上着をルリアに着せかけたのである。

「いくら腕に覚えがあるといっても、女がこんな時間に一人で出歩くのは物騒だ。送ろう」

ピアス

俺は彼女に笑いかけた。

それは完璧な微笑であるはずだった。

「ランクス？ あなた泣いて……」

蓮の黒い瞳が驚いたように見開かれている。

「俺が泣く？ まさか」

「いいえ、あなたは泣いているのだわ。悲痛なほどに」

鏡台に自身の顔を移してみる。

なるほど、俺は泣いていた。

「すまないな、蓮。どうやら記憶を失った俺の心はすでに壊れてい
るらしい」

蓮のひんやりとした手が伸びて、俺を抱きしめた。

優しく温かな胸の中は心地よく、その鼓動を聞きながら瞳を閉じた。

蓮の唇が重なる。

軽く啄み、舌を絡める。

蓮の華奢な体軀を組み敷き、耳に、項に唇を這わせる。

「ん……」

気丈に引き結んだ唇に再び唇を重ね、強引に舌を絡め取ると、耐え
きれず蓮は仰け反った。

それは息を吸うほどの自然さで、そこに高ぶりはなかった。

そこに愛というものの存在を問うたとき、再び涙が流れて止まらな
かった。

心が警鐘を鳴らしていた。

違う。違うのだ。彼女ではない。

金の髪の少女が振り返り笑いかける。

———もういい、頼む。消えてくれ———

心の中で悲痛なほどに叫んでみても、幻は消えやしなかった。

蓮は身に纏っていたドレスを脱ぎ捨てた。

月の光を背に、一糸まとわぬ姿をランクスに晒す。

蓮の瞳にも涙が光っていた。

「ランクス、私を見て！　そして私を抱きなさい。過去の幻影に惑わされてはなりません。私は、いえ私たちは、共に未来を歩くのです。そう決断しあなたは過去を捨てたはず。ならば……」

蓮の手が差し出された。

刹那、有事を知らせるけたたましいサイレンの音が静寂を破った。

蓮は衣服を身に纏う。

ドアのノックの後に従者が事態を報告する。

「ランクス様、蓮姫様に申し上げます。有事が勃発し、現在わが国のターミナルにてサリエリ軍と交戦中。ご両名にはすぐに官邸の執務室にお戻りくださいますように」

「このようなときに申し訳ない、蓮」

軽く抱きしめて口付けを交わす。

「仕方ありませんわ。有事ですものね」

蓮は一国の総督の顔に戻っていた。

胸のどこかでほっとしている自分がいた。

そんな自分をこの上もなく卑怯で下種な存在だと思う。

執務室にはすでに、白き鳳凰の縫いとりの士官服に身を包んだ親衛隊が控えていた。

ルリアも月の女神の仮面を着け、ランクスの脇に控える。

「事態はすでに把握しているな。ターミナルのあるN31ポイントにて現在サリエリ軍と交戦中だという。皆には最新鋭機体『焰^{ほむら}』を駆って出撃してもらいたい」

「おい、ランクス。俺も朱雀で出るぞ。こいつらは急な有事で訓練もろくすっぽできてねえ状態だ」

「そうしてもらえるとありがたい。本陣であるこの官邸の守りは、俺の青龍と近衛兵で足りる」

「吉報を！」

「Yes my lord」

ランクスの言葉に親衛隊が呼応し、臣下の礼をとった。

「おい、お前」

「はい？　なんでしょう」

部屋を去ろうとするルリアをランクスが呼びとめた。

「悪かったな」

「なにが、ですか？」

「俺の直属部隊なのに、お前の初陣についててやれなくて」

「あ…っと…」

ルリアは言葉を失った。

「必ず生きて戻れ。命令だ」

「王族の為に命を捧げる。それが親衛隊の務めでございましょう？」
ランクスがドアの前で会釈したルリアの手首を掴む。

ドアに背を強く押しつけられ、ルリアは小さく喘いだ。

「生きて戻れと言っている。それが命令だ」

顔が触れあうほどの至近距離で、低く囁いてよこす。

「痛っ、なにをっ」

ルリアの右の耳朵に痛みが走る。

「じっとしてろ。勝利祈願の弦担ぎだ」

右の耳朶に何かが揺れている。

「アメジストを加工したものだ。俺の代わりにお前を護ってくれるように願いを込めた」

ランクスは背を向けた。

「あ…あの…：…ありがとうございます」

「じゃあな」

ルリアもまた背を向けて格納庫へと急いだ。

告白

ロッカールームに二人きりなのである。

シャナがじつとりとルリアをみつめている。

「祈願のピアスねえ。

隊を任されたのは俺なのに……。

っていうか、普通俺だろ？

祈願ピアスを部下に送るのってさあ。

アイツ婚約者居るのに……。

女だとわかりゃあ、掌返してほんと、アイツもマメだよな。はんっ。ぜったい蓮にいいつけてやるんだ……

あっちなみに俺彼女いないからね。こう見えて意外と一途なんだよ」

日に焼けた小麦色の肌に、薄く筋肉が張り付いて均整の取れた理想的なボディだ。少し彫りの深い端正な顔立ちにはどこことなく気品が漂い、額には赤いルビーで作られたティカラを着けている。少し長めの黒髪から強い意思を宿した琥珀色の瞳が覗いている。

シャナは大陸一の軍事大国シバの第一王子にして皇太子であり、四神のひとつ、朱雀のパイロットなのである。

ルリアは闇より火の子を纏い輝き出でる死の鳥を思い出した。

最初にシャナと相見えたのは戦場であった。

サリエリの捕虜となったシャナは、朱雀を駆って嫌々ながらもオリビエを戦火に焼き、ルリアは四神白虎に乗ってそんなシャナと応戦した。

「着替えるので部屋から出て行ってください」
ルリアの声が張りつめる。

「やだ」

「や：やだって、ちょっと」

「早くしないと、到着が遅れちゃうよ？ 親衛隊長さん」

シャナの顔がきらきらと輝いている。

「ここで着がえろと？」

「いえーす！」

ルリアは意を決し、ズボンを脱いだ。

負けてたまるかつ！

しかし緊張のために、手が微かに震えて上手く脱げない。

シャナが口笛を吹く。

「きれいな足だね」

「どんなエロ上司なんですか、あなたは。王族会に上訴しますからね！」

「別に構わないよ？ 事のついでに君との結婚の承諾を得るからニコニコとこの上なく上機嫌なご様子である。」

「はあ？」

ルリアは上着を脱ぎ捨てる。

薄いカッターシャツに下着が透けている。

「君が好きだ」

ルリアのシャツのボタンに掛けられた手がとまり、パイプ椅子に反対に座って、ルリアを見つめるシャナの顔が綻んだ。

そこに邪気は一欠片さえ存在しない。

真っすぐに無垢な瞳。

強くて我がまままで、それでいて凜としている。

「それは……困ります」

ルリアは口ごもり、盛大にため息をついた。

なんなのだ、このバカ王子は……。

これから戦場に赴くというのに、これほどまでの能天気さは。

「俺はね、この国の正当後継者なんだ。だから命を賭してこの国を護る。そしてそれと同じだけの情熱をもって、必ず君を俺の正妃に迎えると約束しよう」

シヤナは不敵に笑い、ルリアの手に口付けた。

焰

格納庫に照明がともり、機体の全貌が明らかになる。

「これは……」

ルリアが息を呑む。

「これが大陸最強の国シバの護りである最新鋭機体『焰』だ」

白を基調にしたボディーの関節部にメタリックな橙のカラーリングが施され、機体の左手に装備された盾にはシバの守護神朱雀の紋章を掲げている。

四神が科学と魔力の融合体であるのに対し、この機体は純粋な科学の結晶といえよう。

ルリアは機体に取り込んだ。

OSが起動し、システムに目を通す。

そう複雑なものでもないらしい。

「初心者でも操縦できるよう、とりあえずはマニュアルに従え」

シヤナからの通信がはいる。

「了解です」

格納庫の屋根が開く。

「シヤナ・ハダサ・ギュスターヴ、隊長機でるぞ！ 続け」

空を切るエンジン音、バーニヤを噴かすとオレンジの光の粒子が機体を包み、それはさながら蝶の羽のような形であった。

司令官室にて、ランクスは窓の硝子に頭をもたせかけ、ぼんやりと夜空を眺めた。深紅に輝くのは隊長機であるシヤナの機体朱雀。それに続き柔らかな橙の光を纏い、『焰』が飛び立ってゆく。

あれは生命を燃やし輝く蛍火、それとも……。

俺を焼き尽くす鬼火なのか？
ランクスの唇に歪んだ笑みが浮かぶ。

「こちらシャナ・ハダサ・ギユスターブ、司令官室、ターミナルの状況を教えてくれ！」

視界の先が白く煙っている。

通信機に少しノイズが混じり、通信担当の若い女が映し出される。

「こちら司令官室、現在サリエリ軍はターミナルを人型機動兵器『飛龍』10機にて掌握し、最上階の管制塔に民間人の人質を拘束している模様」

「ちいつ、やってくれるぜ、これじゃあ正面突破は無理か」

通信機越しにシャナの苛立った声色が伝わる。

「おっと敵さんくるぜ、落っこちなよ！ お前ら」

シャナが朱雀を飛行型に変形させ高度を落とす。

飛龍の上にミサイルの雨が降る。

シャナは素早く機体を旋回させ高度を上げる。

ルリアもまた機体に備えられているソードを構え、敵機に突っ込んでいく。

「いくぞ！」

敵機飛龍からビームライフルが発射され、ルリアは左手に装備している盾でそれを防ぐ。コクピットのなかでアラートがなり、背後にもう一機が迫っている事を告げる。

ルリアは機体を跳躍させ、やり過ぎす。機体の頭部に備え付けられているバルカンで敵機を威嚇するが、敵も旋回しそれを交わす。

「ちいつ」

ルリアは舌打ちし、一気にアクセルを踏み込む。

間合いに入り、飛龍の後頭部に剣を突き刺す。

飛龍は崩れ落ち、激しい爆発を起こす。

「ひゅう、やるじゃねえか、親衛隊長殿」

通信機越しに上司が口笛を吹く。

「俺も負けちゃいられねえな」

シヤナは朱雀の背に背負っていたランチャーを構える。

「どきなっ！ 火傷するぜ」

圧倒的な火力の前に、一機、また一機と機体が屠られてゆく。

「そこまでだ、シバ軍に警告する。機体を捨て投降せよ！ こちら

の警告に応答しない場合、人質の命は保証しない」

「ちくしょう……」

シヤナがコクピットを開き両手を挙げた。

「シヤナ……王子」

ルリアの瞳が見開かれる。

亜麻色の髪の乙女

「我が名はシャナ・ハダサ・ギュスターブ。この国の皇太子である。私がお前たちの人質となるゆえ、管制塔にとらわれている民間人の解放を求める！」

強い意思を宿した琥珀色の瞳が、向けられた銃口をまっすぐに捉えている。その瞳は死をも恐れてはいない、凜とした眼差しだった。

「シャナ王子！」

ルリアがコクピットを開き、シャナの前に降り立つ。

シャナがルリアを軽く睨み、そして微笑む。

「お前も、来るか？」

「私は親衛隊長です。命を賭して主を護るのが使命ですので」

耳朶でアメジストのピアスが揺れた。

ルリアはそっとパイロットスーツの上から、胸にかけた金のロケットに触れる。

その裏に刻まれた、ランクスの誓いの言葉を胸に抱く。

——ランクス・クリフオード、

ここにルリア・ダテ・オリビエに生涯の愛を捧ぐ——

愛しき仇の美しき面影が過る。

漆黒の髪に覗く深緑の眼差し。

ルリアは軽く瞳を閉じ、小さく吐息をついた。

生きては帰れないかもしれない、ふとそんな気がした。

だがしかし、奴の面影を抱いて逝くのも悪くはないと思った。

脳裏に過る、別れ際のランクスと交わした最後の言葉。
ルリアはそつと耳朶のピアスに触れる。

——すまないな。ランクス。命令はどうやら守れそうにないらしい——

「砂漠の覇者の王子か……。それもよからう。ついて来い」

少女は唇を噛みしめた。

なにも関係のない民間人を人質にとるなど、卑劣極まりない行為だと憤慨する。

ターミナルに飛空艇が到着した刹那の出来事だった。

あつという間に武装した集団に銃をつきつけられ、最上階にあるこの管制塔に連れてこられたのである。

深く被ったフードの中にふんわりとした亜麻色の髪が覗く。

「こんなことって……もうダメだわ。きっと私たち助からない」

10代だろうか、淡いピンクの髪の色をした少女がその場で泣き崩れている。

亜麻色の髪の少女がそつと手を握り、勇気づける。

「きつと大丈夫ですわ。こんなときこそ希望を失ってはなりません。さあどうぞ涙をおふきになって」

亜麻色の髪の少女がそつとハンカチを差し出した時だった。

「ああん？ ビービーと泣きやがって。なんならお前から殺してやろうか？」

武装集団の一人が、ピンクの髪の少女の服を掴み、その場に立たせ銃口を向ける。

「あつ……あああああ」

少女はただ怯え、言葉を失っている。

「あなたたち、いい加減になさいっ！」

全身に怒りをみなぎらせ、亜麻色の髪の少女が立ち上がった。

「ほう、じゃあお前がこいつの身代わりになるか？」

少女の頤おとがいに、武装兵の無骨な手がかけれ上を向かされる。

こめかみにふれる銃口のひんやりとした感覚に、亜麻色の髪の少女は唇を噛みしめた。

戦闘

ドアが開き、上官と思しき人物が新たな人質を連れて入ってきた。「なに勝手なことをしている。その手を離せ、ゲハジ。命令はあくまで人質の監視だろうが」

新たな二人の人質。白いパイロットスーツの右腕には鳳凰の紋章が縫いとられている。

一人はシバの王族か。小麦色の肌の端正な顔の少年である。

亜麻色の髪の少女は目を細める。

その横に控える、鳳凰のパイロットスーツに身を包む金の髪の少年？ いや少女だろうか。月の女神ティナの仮面を着け右の耳にアメジストのピアスをつけている。身のこなし、雰囲気からしておそらく護衛か。えらく華奢だが王族の護衛を務めるほどの者。あの者は一体……。

「さあ、約束通り人質を解放しろ」

シヤナが武装兵を見つめる。

「ああ、俺たちや約束は守るぜ。そら行け！」

解放されたドアに駆け寄る人々に向けて、武装兵の散弾銃が容赦なく発射される。

硝煙と噎せ返る血の匂い。

「危ない！」

ルリアが亜麻色の髪の少女を庇い床に伏した。

「おい、ティナ。お前のピアスの飾りを引っ張れ」

シヤナが小声で囁いてよこす。

「あ、はい」

言われるままにルリアはピアスの飾りを引っ張った。

刹那、轟音が響き建物が大きく揺れた。

爆風が、ルリアの仮面を、亜麻色の髪の少女の深く被ったフードを

吹き飛ばした。

かたく閉じた瞳をゆっくりと開き、視界に明らかになる両者の素顔。
「る…ルリア…さま？」

少女の唇が、ぎこちなくその名を紡いだ。

「エアリス……なんで……」

「なんだ？ お前ら知り合いなわけ？」

シヤナが武装兵を素手で次々と伸してゆく。

「ま、とりあえず感動のご対面ってのはこの後で頼むわ」

向けられた銃口をかわし、ルリアが跳躍する。その手元に蹴りを入れ銃を奪う。銃の得で相手の眉間を打ち、気絶させる。

エアリスが意識を集中しはじめると、その掌がぼんやりと青く光り、バリバリと音を立てている。

「雷電！」

エアリスが掌を解放すると、兵士が白眼を剥いて倒れている。

「エアリス、お前いつの間にそんな物騒なもん……」

横目で見つめるルリアが苦笑する。

「うふふ、私も守ってもらってばかりではいけませんもの。戦わなくてはね」

エアリスが床を蹴って跳躍し、スカートをたくしあげ、相手の顔面にハイヒールを沈める。

「ごめんあそばせ」

「へぶう」

男はその場に崩れ落ちた。

「ひゅう、やるもんだ。親衛隊にスカウトしたいくらいだ」

シヤナがにやりと笑い軽口をきく。

床に沈められ、泡を吹いていた男が意識を取り戻し、シヤナの心臓に狙いを定め銃口を向ける。

ルリアの顔が引きつる。

「危ない」

銃口が火を噴いた。

甲高い金属音の後で、金の髪が床に散った。

想い

「ルリアさま！」

エアリスの悲痛な叫び声が響き渡る。

歩み寄り抱き起こすが意識はない。

唇に手をかざすと……息はある。

他に怪我はしていないわね。

パイロットスーツを脱がすと、鎖が切れ変形した金のオーバル型のロケットが床に転がり落ちた。

——ランクス・クリフオード、

ここにルリア・ダテ・オリビエに生涯の愛を誓う——

「ランクスの想いが、ルリアさまを守ったのだわ」

刻まれた銘に触れ、エアリスはぎゅっとロケットを握りしめた。

同時にルリアの華奢な鎖骨に刻まれた黒揚羽のタトゥーが目に入り、エアリスをやるせない思いにさせる。

この二人は争ってはいけない。今はまだ方法は分からないけど、絶対になんとかしなくてはいけない。そのために私はここに来たのだ。祭司の末裔である私の血をもって、命を賭してでも私は必ずルリア様を助けてみせる。

エアリスはルリアをぎゅっと抱きしめた。

「はい、お前フルボッコ決定！」

シャナがゆらりと敵の前に立ちはだかり、もはや無敵の勢いで敵を伸してゆく。

最後の一人をブーツの下に踏みつけ、シャナは浴びた返り血を拳で拭った。

「胸にかけていたロケットのおかげで、大事にはいたっておりません」

「そうか」

安堵の吐息とともにルリアを見つめるシャナの琥珀色の瞳に優しさが滲む。

ルリアの前にしゃがみ、その髪に触れる。

「初陣にしちゃあ、よくやったんじゃないの？」

そう言っ、意識の戻らぬルリアを抱きあげた。

「エアリス……だっけ？ お前も来い」

シャナは足でドアを開けながら、エアリスを振り返った。

「は……はい」

エアリスはおずおずとシャナに従った。

「シャナ王子！ ご無事でしたか」

応援に駆け付けたランクスの直属部隊がシャナの前に敬礼している。

「無事か？」

鳳凰の軍服姿のランクスが、ちらりとシャナを見やる。

「遅えよ、お前ら」

シャナが唇を尖らせる。

「敵はあらかた伸したんだけどなあ、人質は救えなかったんだ……」

シャナの瞳に悲しみの色が走る。

シャナの肩にランクスが手を置いた。

「お疲れさん。それ、かわろうか？」

「いや、いい。触らせねえよ。お前にも」

幸せそうにルリアを抱いているシャナを見て、ランクスが寂しそうに笑った。

「ライバル出現といったところかしら？ ランクス」

背後でエアリスが意味あり気に呟いた。

「何を言っている。ところでこちらは？」

ランクスが不思議そうな顔でエアリスを見つめている。

「ああ、人質のなかの一人だ。ティナの知り合いらしいぜ」

「ティナではありません。この方はルリア・シャル・オリビエ。オリビエ公国の王女様であらせられます。っていうかわたくしのルリア様にきやすく触らないでいただきたいの」

エアリスは思いつきりシャナの腕を抓った。

シャナ

「オリビエ公国の王女様だあ？」

ルリアを医務室のベッドに寝かせ、シャナは素っ頓狂な声を出した。

「このちんちくりんが、か？」

ベッドサイドに腰かけシャナがルリアの寝顔に見入る。

閉じた双眸を長い睫毛が縁取り、頬は咲き染めの薔薇のよう。

つんとつきだした愛らしい唇は桜ん坊の果実のように艶やかで。

ちんちくりんというか……可愛いよな、確かに。

あどけなさを残すルリアの頬をつんと突いてみる。

シャナの全身に電流が走った。

——うおーなんじゃこりゃ！　どんだけ柔らかいんじゃあ——

柔らかいだけじゃない。指に吸いつくような肌目の細かさ。
も……もう一度……。

息を呑み、シャナがもう一度人差し指でルリアの頬を突く。

——うお——！　やっぱりすげえ——

「う……ん」

ルリアの唇が微かに震え、吐息が漏れる。

無意識にシャナが自分の唇をルリアのそれに近づける。

——猛烈にキスしてえ。っていうかしないと死ぬ——

シャナの少し長めの前髪から覗く琥珀色の双眸が閉じられ、ルリア

の頤を掴む。

赤い舌がシャナの唇を潤し、

キスまであと1cm。

ルリアの顔にシャナの吐息がかかる。

エアリスの思考回路が先ほどから停止している。

おかしい。

目の前のこの男の行動が、どうにも不可思議なのだ。

気を失った乙女の頬をつついて、息を荒くして顔を近づける……。
変態。

彼は変態なのか？

ルリア様が……ルリアさまの貞操の危機なのだ！ これは。
そう考えついたとき、エアリスは頭より身体が先に動いていた。

「いい加減にしやがれ、この腐れ外道があ！」

エアリスがベッドサイドの花瓶をシャナの頭に投げつける。

みしっ……。

鈍い音がした。

「ああ、いかんいかん……俺。

もう少しで人間やめてケダモノになるところだったよ」

頭から盛大に流血し、シャナは軽く頭を振った。

「落ちつきまして？」

エアリスがふんわりと微笑する。

そんなエアリスの顔をシャナがじっと見つめる。

「オリビエ公国の王女様ってさあ、お前じゃなかったっけ？ エアリス・シャル・オリビエさんよう」

エアリスが悲し気に微笑む。

「我が国にもいろいろと事情がありまして。ですがオリビエの正当後継者はまぎれもなくこの方なのです」

「まあ、事情はどうあれ俺はこいつを正妃に迎えるし」

「却下！」

「却下ってなんだよ。俺だって砂漠の覇者シバの第一王子だぜ？

こいつが王女だろうが婚姻になんの障りがある？」

「ルリアさまの気持ちは？ ルリアさまは決してあなたの気持ちを受け入れることはできません」

シヤナの唇に冷えた微笑が浮かぶ。

「受け入れさせてみせるさ。俺の異名は『砂漠の蠍』だぜ？ それができないなら、こいつは死ぬことになる」

幽閉

「おい、こいつは他国のスパイだ。石の聖堂に監禁しろ」
部屋の外に控えていた近衛兵がエアリスを連れ出す。

「こいつは攻撃魔法を操れる。魔力無効の護符を貼れ。聖堂にも封印の魔方阵を。警戒怠るな」

「はっ」

近衛兵が軍服の腰に掛けられた小さなポーチから護符を取り出しエアリスの華奢な手首に貼りつけた。

「いやあああああ！」

エアリスが悲鳴をあげる。

強かな熱とともに手首にくつきりと黒い魔方阵が浮かび上がった。ナイフを取り出し、シャナが自分の左手の人差し指を傷つけた。

「我、汝の魔力を封印せし」

そう呟いて、魔方阵の上に血で×の字を書いた。

「くっ……なにを……」

眩暈とともにエアリスの視界が突如真っ暗になり、意識が遠のく。

甘かった。

悔恨にエアリスは歯ぎしりしたい気持ちになった。

人質を救う為に命を賭して身代わりとなったシバの王子を、自分は信用しすぎたのだ。

自分のことはいい。どうなっても後悔はない。

だが、ルリアは。ルリアだけはどうしても助けたかった。

意識が完全に途切れる直前に、エアリスはランクスの心に『想い』をとばした。

ランクスは執務室で書類を繰っていた。サリエリ軍と思しきテロ組織のターミナル占拠事件の事後処理の最中で、この事件により罪のない民間人が多数傷つき、命を落とした。ランクスの胸に遣る瀬無さが満ちる。

——ランクス——

突如頭のなかに直接に語りかけてくる声があった。
ランクスは書類を床に落とした。

——前方後退型ヘタレ——

ランクスは軽くこめかみを押さえた。

「殺すぞ？」

——冗談よ、冗談。私はエアリス。空気を振動させてあなたの意識に直接語りかけているの。私はあなたの^{おにいさま}変態な義兄様に捕まっ
てしまって、石の聖堂というところに幽閉されるらしいわ。とりあ
えずルリア様を守って。あの男マジやばい——

「自業自得だろ？ 監禁でも幽閉でもされて少しは反省したらどう
だ。っていうかお前は誰なんだ？ ルリアって誰だ？」

うーむ。前方後退型に怒っているのだろうか。それにしても器の小
さい男だのう君は。とそこまで思いめぐらし、エアリスはある可能
性に気付く。

——若年性痴呆？——

「ボケてなどいない。だが俺は記憶を操作されている。お前が俺を

知っているというなら失われた俺の過去を教えてくださいませんか？」

「―――記憶の封印の解除か。私に魔力が戻ればできないことはないのだけれど……。とりあえず助けてくれないかな？　ルリア様も私も―――」

「善処はしよう」

ランクスはため息をひとつついた。

混乱

「うっ…ここ…は？」

ルリアは周りを見回した。

夕闇に染まる室内の中央にシルク地の天蓋ベッドが据えられ、自分はそこに横たえられていた。

自分は確かシャナを庇って、撃たれたはず……。

そっと胸の中央に触れてみるが、外傷はない。

私は……生きている。

ルリアは小さく安堵のため息をついた。

「エアリス！ エアリスは？」

戦鬨の混乱の中で、敵に捕らわれた人質の中に確かに彼女がいたのだ。

エアリスは無事なのだろうか。

その面影がルリアの胸を切なく締めつけた。

「気がつかれましたか？」

ルリアの脇に控えていたメイドが、ルリアを見てにっこりと微笑む。

黒いビロード地に白いレースをふんだんにあしらったエプロンを身に付け、栗色の柔らかいウェーブのかかった髪が鎖骨の辺りに流れている。

「ああ、ここはどこだ？ 私の軍服は？」

「ここはシャナ・ハダサ・ギュスターヴ様の居城、イーリオス城でございます。ティナ様が目を覚まされましたら、湯を使われますようにとのシャナ様のご命令です」

「いや、私はそんな……結構だ。それより親衛隊の長としてやらねばならぬことが……」

「外傷はなかったとはいえ、あなた様は丸一日意識を失われていたのです。本日はこちらでゆっくりと休養するようにとのシャナ様のお心遣いでございます。さあ、こちらに」

脱衣所でルリアは盛大にため息をついた。

疲れる……。

状況がよく呑みこめない上に、なんなのだこの展開は。

本来なら官邸の医務室あたりで目覚めて、今頃は上司に事件の詳細を報告している頃だろう。直属の上司……そうランクス・クリフォードに。

それがなぜ？

シャナ・ハダサ・ギュスターブが出てくるのだ？

褐色の肌にきつい琥珀色の瞳。

猛烈に我がままदैて凜とした男。

彼なりに気を使ってくれたのだと思う。

悪気はないのだろう。

だがしかし……だ。

猛烈に疲れる。

こんなわけのわからない現状で薔薇風呂に入るより、官邸で業務こなしているほうがどれだけ楽か。少なくとも官邸だったらエアリスにも会えるはずだ。

ルリアの着ていたシルクのネグリジェが滑り落ちた。

バスタブに散らされた薔薇の花弁から、芳香が立ち上る。

「なぜ、着替えがドレスなんだ？」

ルリアがきよとした顔をする。

そんなルリアにメイドが無垢な笑顔をむける。

「シャナ様がディナーをエスコートされますので」

「いや、だから私にはそのような暇はなくて……」

洩々ルリアは用意されたロングドレスを身に纏う。

エンジ色のロングドレス。袖はなく胸元から右の肩にかけて薔薇の飾りが伝う。

不本意に着飾り、ルリアはシャナの訪れを待った。

貞操

「へえ、ちったあ見れるようになったんじゃないの？ 親衛隊長殿」

シャナは慇懃にルリアの身体を見つめ、口元に酷薄な微笑を浮かべる。

ノックもせずにいきなり部屋に入ってきた上官の、明らかに普段とは異なる様子にルリアははっと息を呑んだ。

シャナはベッドの横に置かれた長椅子にどっかりと腰かけ、タイを外して放った。

「これがオリビエの王女だって？ あの女もバカなことを言ったもんだ」

シャナは立ち上がり、威圧するようにルリアの前に立った。長身のシャナには腕力では敵わない。

ルリアはシャナから距離をとろうと二三步後ずさった。

シャナはそんなルリアを許さない。

ルリアの華奢な手首をとって、腰を引き寄せる。

シャナの手が、ルリアの頬に、項に、そして鎖骨に触れる。

「王族がタトウーなんか入れるかっての。しかも趣味の悪い黒揚羽なんぞ」

シャナが忌々し気に呟く。

「痛っ！」

ルリアが悲鳴を上げる。

「ふん、当たり前だ。噛みついたのだから」

ルリアの鎖骨にシャナの歯型の内出血ができている。

「気に入らん。なぜお前の身体に情婦の証があるのだ！」

ルリアは荒々しくベッドに投げ出され、シャナに易々と組み敷かれる。

少し長めの前髪から覗く、琥珀色の瞳は赤く充血し濁っている。

「遊女ならそれらしく、優しく俺を慰めてみな。金が御所望か？
なら好きだけやる。それとも地位か？ 権力か？」

ルリアはシャナに、揶揄するようすでいて必死になにかに縋る幼子のようなそんな脆さを垣間見たような気がした。

「だが、遊女だと？」

ルリアはシャナを睨みつけその下腹に蹴りを入れた。

怯んだシャナの頬を思い切り殴りつける。

シャナの唇に鮮血が伝った。

ルリアはベッドサイドにあった木製の椅子で窓を破った。

「お前に媚を売り、組み敷かれるくらいなら、私は迷わずこの場で死を選ぶ」

硝子の無くなった窓枠に、ルリアが腰かける。

風を孕んでレースのカーテンが揺れていた。

ルリアは瞳を閉じた。

「なんの騒ぎだ？ シャナ。それにしても派手に破壊したものだなあ」

どこか間の抜けた声とともにランクスが部屋に入ってきた。

「テロ組織事件の事後処理の最中なんだが、どうしても証人が必要でな。取り込み中すまないが部下を連れて帰るぞ」

シャナはふいと横を向いた。

「ほら、帰るぞ」

窓枠に腰かけたルリアの前に歩み寄り、ランクスがその手を取る。

その温もりに安堵し、ルリアの緊張の糸が切れるとランクスが急に仏頂面になる。

「泣くな」

それでも繋いだ掌が小刻みに震えている。

「泣くなといっている。女の涙は苦手だ」

長く続く回廊の柱の陰で、ランクスがルリアを抱き寄せた。

取引

「不思議なものだな。私はお前をずっと以前から知っている気がする。ティナお前はなぜ俺の前で仮面をつけた？ お前は俺を知っているのだろうか？」

ランクスの腕の中でルリア目を見開いた。

「俺は記憶を操作されている。過去の記憶を一切思い出すことができない。お前が俺を知っているというのなら、どんなことでもいい。教えてくれないか？」

ランクスの深緑の瞳が切なく揺れて、ルリアを見つめている。
ルリアはそっとランクスから身を離れた。

「仮面をつけたのは、女だからと侮られたくなかったからで、私は以前のあなた様を存じません」

ランクスに背を向け立ち去ろうとした瞬間、またもランクスに手首を掴まれる。

「待て！」

振り向きざまに、胸にしまった金のロケットが胸元から毀れ落ちた。

「これはっ」

金の髪の毛の乙女が向日葵のように笑っている。

——ランクス・クリフオード
ここにルリア・ダテ・オリビエに生涯を愛を注ぐ——

「誤解です。シャナ様も貴方様も。面影が似ていたとしても私はティナです。あなた様がそう私を名付けたものではありませんか。忘れたのであれば、ただそれだけの想い。そしてあなた様はその想いをこのロケットごとお捨てになったのでしょうか？」

ランクスが苦し気に表情を歪めた。

「ああ、そうだ。確かに俺は過去を捨てたのだ。今さらお前を愛する資格などあるはずもないのだな」

ルリアはランクスに背を向けた。

「無礼をお許してください。私は官邸にてせねばならぬ仕事がありますゆえ、ここで失礼いたします」

回廊を抜け中庭に走っていくルリアを、ランクスがじっと窓から見つめていた。

鉛色の重い空が、いまにも泣きだしそうで、音も無く雷光が光っていた。

「なんだ、結局お前もフラれてんじゃない」

いつの間にかにやにやとシャナがランクスの横に立っていた。

「俺のはそんなじゃない。が、お前はそれでティナのことを諦めるのか？」

「いんや。俄然やる気が出てきたね。ぜったい落としてみせる」

シヤナがにやりとランク스에笑って見せた。

「そうか。ならば貴様に協力してやる……がその代わりにこちらにも条件がある。ティナをお前の直属にするから、サリエリの動向を探れ。方法は任せる。その代わり、エアリスとかいう女を解放してやってほしい」

「こっちが駄目なら、そっちかよ。お前も好きもんだね」

「勝っ手にいってろ！」

「了々解！　じゃああの女はお前にくれてやるよ。煮るなり、焼くなり、揉むなり、ご自由に」

シヤナはランク스에背を向けてひらひらと手を振った。

その男

すでに身体感覚が麻痺している。

朦朧とした意識の中で、エアリスはゆっくりと瞳を開いた。

身体が思うように動かない。

石の聖堂に刻まれた魔方阵の中心に身を横たえ、エアリスは顔を引き攣らせた。

———下手くそ———

内心毒づいてみる。

黒いローブに身を包んだ魔道士が呪文を唱え、両の掌に青白い炎が浮かび上がり、容赦なくエアリスの華奢な身体を焼いていく。

シャナの命令により、この国の魔道士に拷問を受け続けること三時間。

すでに痛みや恐怖すら感じなくなっている。

痛みよりも寒さを感じて、視界が暗くなってきたあたりから、それとはなしに死を予感している現状だ。

死ぬことは怖くない。

もとより自分は影の存在。

ルリアに命を捧げることができればそれで本望だ。

ルリアを見つめるランクスの表情を思い出し、エアリスは微笑んだ。記憶がなくなっても、ランクスはルリア様を想っている。

自分が死んでも、きっとその想いがあれば何があっても大丈夫な気がした。

ランクスは何があっても、命を掛けてルリア様を守る。

だから私は安心して逝ける。

脳裏に過る彼の人の面影。

儂く笑って逝ってしまった人。

——ハヤト、私ももうすぐお傍に参りますわ——
瞼が重い。

眼を閉じると、もう二度と開くことはないだろう。

——さようなら。私のルリア様——

心の中で別れを告げ、エアリスは目を閉じた。

魔道士が酷薄に笑いを浮かべ、再び呪文を唱え始めた。

刹那、一陣の風が聖堂を吹き抜け、祭壇に供えられた盃が甲高い音を立てて割れた。

するとエアリスを取り囲む魔道士が、次々と石畳に崩れ落ちた。

聖堂の扉の前に、男が一人佇んでいる。

茶色の髪を風に靡かせ、騎士の軍服に身を包み、紫の瞳に深い慈しみの色を宿し、ブーツの靴音がゆっくりとエアリスに近づく。

エアリスの霞んだ目の裏に、かの人を見た気がした。

「ハ……ヤト？」

暖かな光が身体を包み、ふわりと身体が宙に浮く。

エアリスの口元に笑みが浮かんだ。

きっとこれは夢だ。

天に召される時には、自分がもっとも望む幸せな夢をみて逝けるのだという。

だからきっとこれは、夢なのだ。

幸せな夢。

エアリスの頬に涙が一筋伝うと、茶色の髪の騎士のエアリスを抱く手がかすかに震えた。

「ここで何をしている？」

聖堂の扉の前に、白き軍服に身を包んだランクスが立ちはだかる。

「ランクス・クリファード!!!!」

空気が怒気に震える。

「お前がともにいながら、なぜエアリスをこんな目に合わせた？」
ランクスが柳眉を顰め、ゆっくりと剣を抜いた。

「貴様は誰だ？」

窓から差し込む日差しを受け、剣が鈍く輝いた。

エアリスをそっと石畳に下ろし、茶色の髪の騎士も剣を抜いた。

求める者

石畳の上に、エアリスがふらりと立ち上がる。

向けられた剣の切っ先をその胸に突き付けにっこりと微笑む。

「剣をお納めになって……」

そしてそのまま崩れ落ちそうになるのをなんとか茶色の髪の騎士に助けられる。

「エアリス！」

「私は……大丈夫です。どうか……剣をお納めになって。なにがあってもあなたがたが互いに争うことを私は許しません」

茶色の髪の騎士が憎々し気にランクスを睨みつけ、剣を放った。

掌がエアリスの傷口にあてがわれると、エアリスは瞳を閉じて身をゆだねる。

「ハヤト、温かいですわ」

エアリスがそう呟くと、エアリスの身体にあった無数の傷跡が跡形もなく消え去った。

その様子にランクスが目を見張る。

「ありがとう、ハヤト。治癒の魔法ですわね。ですがここまで強力なものは私も初めて見ました」

そう言ってエアリスがまじまじと、自分の手首を見つめた。

シヤナによって封印されていた魔力が身体に満ちるのを感じる。

意識を集中させると、ぼんやりと青く光を放つ。

「ハヤト、ランクスは記憶を操作されています。故に私やあなたのこと、そしてルリア様のこともわからないのです」

エアリスが愁傷気にそう言うと、ハヤトは小さく溜息を吐いた。

「いい気なものだね、君は。自分の犯した罪を償いもせずに忘れてしまうなんて」

「ハヤト！」

とがめるような口調のエアリスに、ハヤトが一瞥をくれる。

「なに？ エアリス。本当はすぐにでも君はランクスの記憶を戻すことができたんでしょう？　なのに君はそれをしなかった。だけどそれは間違っている」

「辛すぎるもの！　あなたが死に、そして命を掛けて守ろうとしたたった一人の妹姫まで、最も信頼していた乳兄弟に殺されてしまうなんて！　そんな記憶なんていっそなかったほうがいいって。思い出はまた作ればいいって……」

エアリスはそう叫んで、掌で顔を覆った。

小さく震えて、嗚咽が止まらない。

そんなエアリスをハヤトが抱きしめる。

「だけどね、逃げちゃだめなんだ。ランクスは」

ランクスの深い碧の瞳が、じっとハヤトを見つめている。

「そういうわけで、君の歩んできた人生は半端なくきついんだけど、それでも記憶を取り戻す勇氣、ある？」

ハヤトの紫の瞳が、ようやく和らいだような気がした。

この瞳の色も、なぜだか知っている気がした。

亜麻色の髪の少女を含めたこの場を包む空気ですえも、なぜだかしっくりとくる。

「全てを知ったこの俺を、お前たちは支えてくれるか？」

それは不思議な感じだった。

人を信頼したことなど、一度もないと思っていた自分なのに。

こんなにも素直にその存在を求めていると言えたこと。

「ばーか。そんなの当たり前じゃん」

茶色の髪の少年がふんわりと笑う。

ああ、この微笑みも自分は知っている。

だったらきつと、大丈夫だ。

そう確信した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6732i/>

緋の剣

2011年1月11日18時55分発行